

PORT FOLIO

Profile



2001年9月18日 神奈川県生まれ

2020年東京工芸大学 工学部建築コース 入学

2023年東京工芸大学 工学部建築コース 卒業

2024年東京工芸大学 工学研究科 建築学専攻 山村研究室に入学

2025年東京工芸大学 工学研究科 建築学専攻 山村研究室 修了予定 gkg

現在は神奈川県横浜市に住んでいる

Contents 目次

Design 設計

卒業設計 開いたシゼン 10 塔の火の見櫓が作る風景

Cultural winery Sustainable of track

相良村川辺川魅力創造事業・交流拠点施設 公募型プロポーザル 相良村の象徴なる交流施設

Design 設計

卒業設計

開いたシゼン 10 塔の火の見櫓が作る風景

矢野晃佑

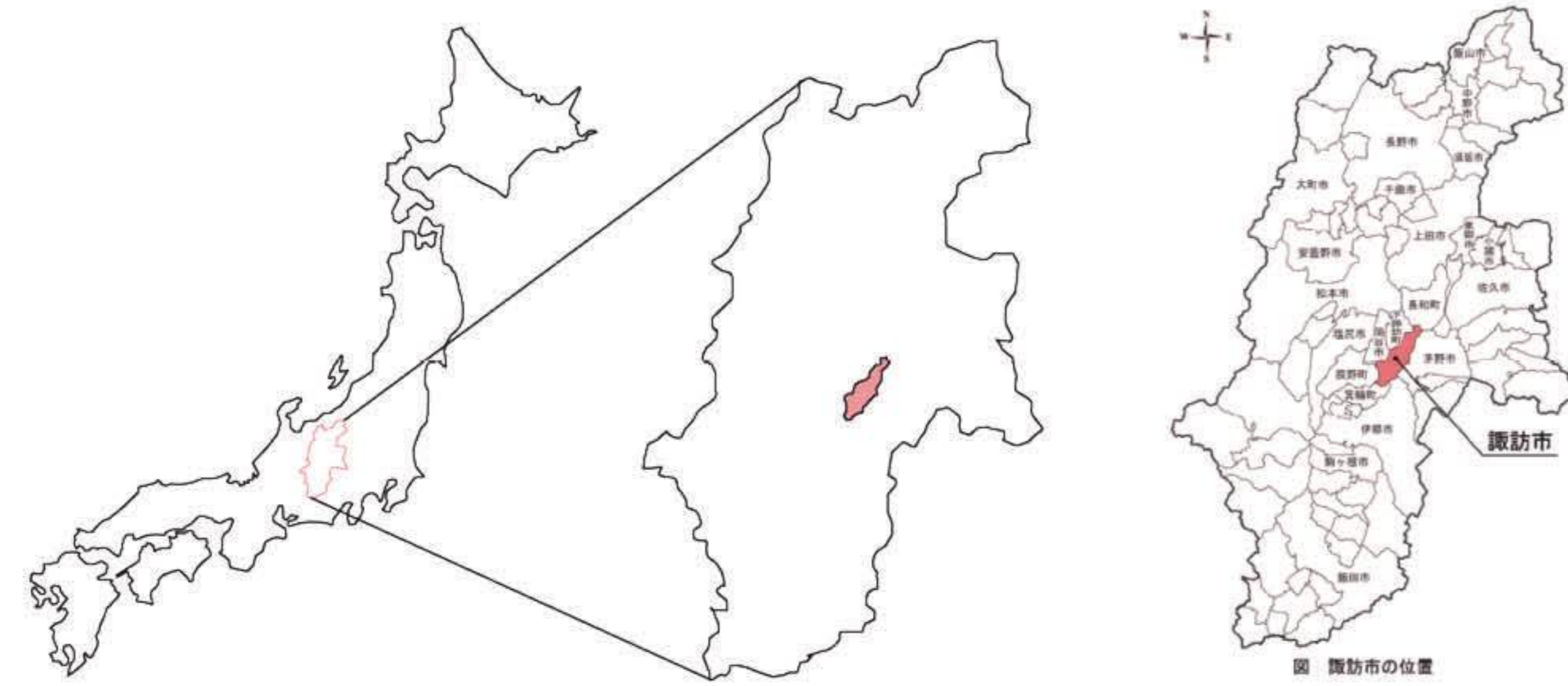
Theme

長野県諏訪市に眠る 32 塔の火の見櫓から 10 塔を新たな都市の居室として提案している

Concept

我々は自然を知れているのだろうか。本設計は長野県諏訪市にある火の見櫓 10 塔を使用したシゼンを克服する設計である。江戸から現代まで自然と密接な関係性がある火の見櫓は諏訪市民の精神的な中心へ帰属し近代化が進んだ社会において重要な建築として存在する。既存の防災インフラは市民のインフラとして変化しネットワークは多様化する。新たなネットワークは記憶の風景と自然の音を取り入れることで新たな空間になる。

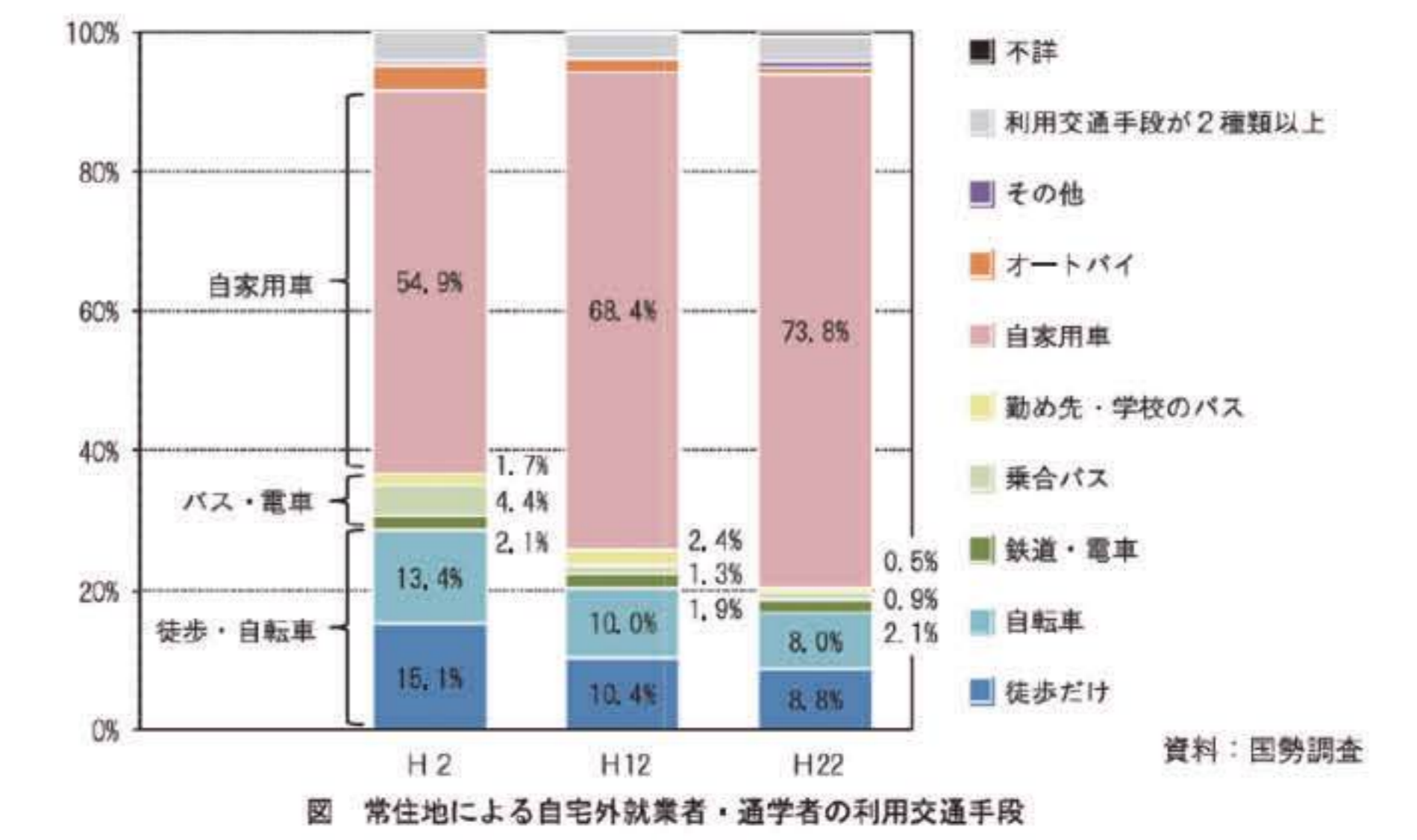
Site



長野県諏訪市は本州の中心に位置しており飛騨山脈や八ヶ岳といった自然が豊かな地域である。山に囲まれた盆地は古くから文化を形成しており脈々と継承されている。



上記の写真は今も現存している火の見櫓たちである。現在情報社会によって使われなくなった櫓たちは物置として扱われており使用される機会はほとんどない。



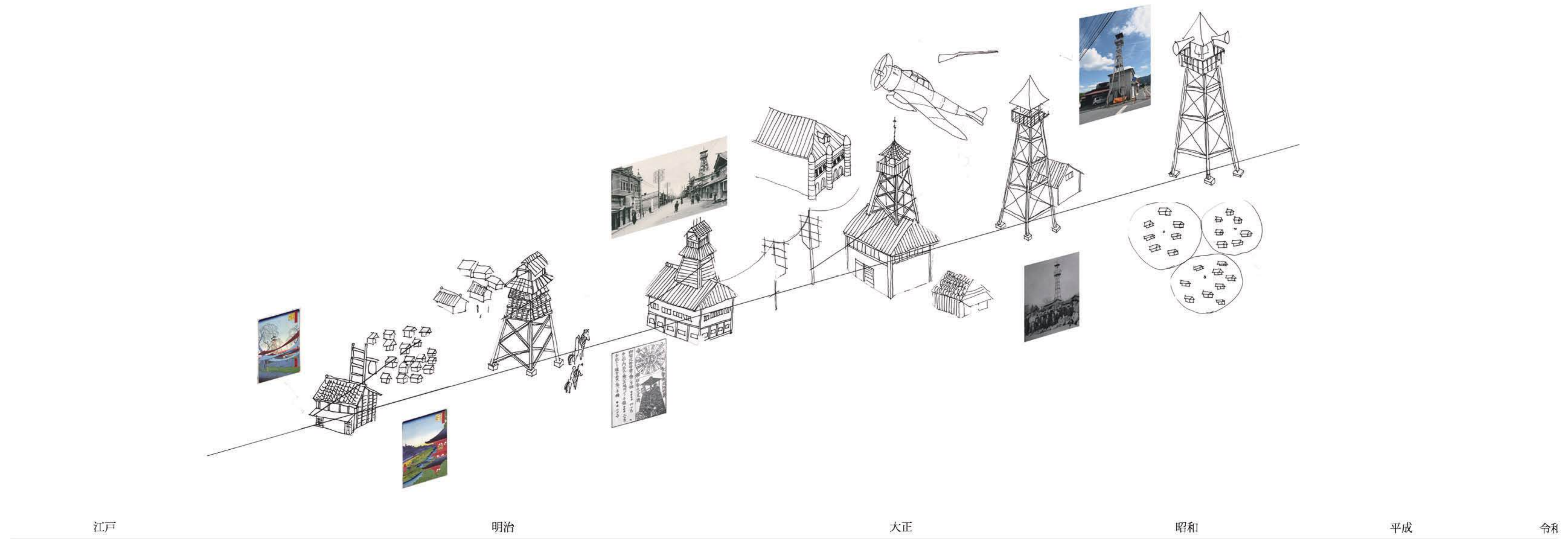
上の図は長野県諏訪市の移動機関の割合図である。近代化が進み、人口が一定である諏訪市は社会的な発展はせず、今でも自動車依存社会になっている。

Site



火の見櫓の歴史

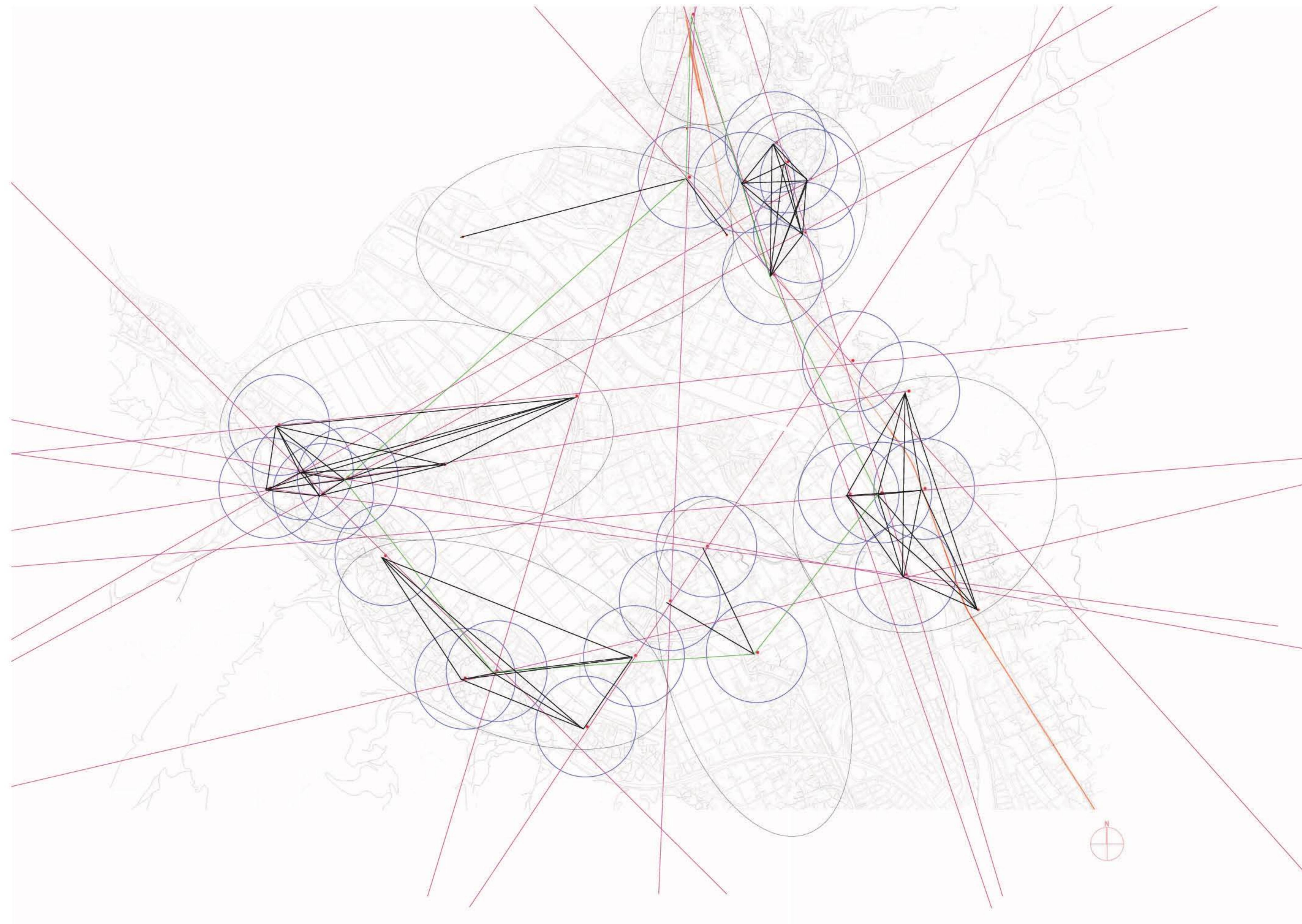
火の見櫓は江戸から始まり現代まで様々な様相があり、人による**行為**や**自然**による影響中で変化し続けている



江戸	明治	大正	昭和	平成	令和
<p>1650年 幕府管轄の「定火消」整備</p> <p>1657年 明暦の大火</p> <p>1658年 火消役が火消屋敷に定駐の際に 建つられての始め</p>	<p>1869年 明治維新</p> <p>火の見櫓の機能は廢れて いき取り壊されていく</p> <p>1874年に東京警視庁が設置されると 各警視出張所に望楼という機能として 付属されていく</p>	<p>大正にかけて木材から鉄の素材を使う ようになってくる</p> <p>1939年に第二次世界大戦開始</p>	<p>当時の火の見櫓は鉄でできていたため 戦時下の武器などに多く使用されてい たため撤去される櫓は多かった</p> <p>昭和30年後半になると全国に配備される</p> <p>昭和50年代になっていくと技術は 発展していき携帯電話の普及とともに に緊急時の連絡がしやすくなっていく</p>	<p>昭和50年代になっていくと技術は 発展していき携帯電話の普及とともに に緊急時の連絡がしやすくなっていく</p> <p>都心と地方では防災の整備の 格差がハッキリしていき都心 では撤去され昭和50年代後半 で急増した火の見櫓は地方で 見受けられるようになっていく</p>	<p>現在では昭和後半に建てられた地方の 火の見櫓は経年劣化により撤去する 地域が多くなっている。</p>
「火災」と「民衆」	「改革」と「用途変化」	「素材」と「垂直」	「戦争」と「変形」	「整備」と「急増」	「環境」と「流動」

SUWA and Hinomiyagura 諏訪と火の見櫓

都市の位相



赤紫色の線は火の見櫓が三つ以上重なるインフラ軸である。この軸は目に見えない線として火の見櫓のネットワークを強めながらも都市断面的に見ることで一種の高さ制限的なスカイラインが引かれている。

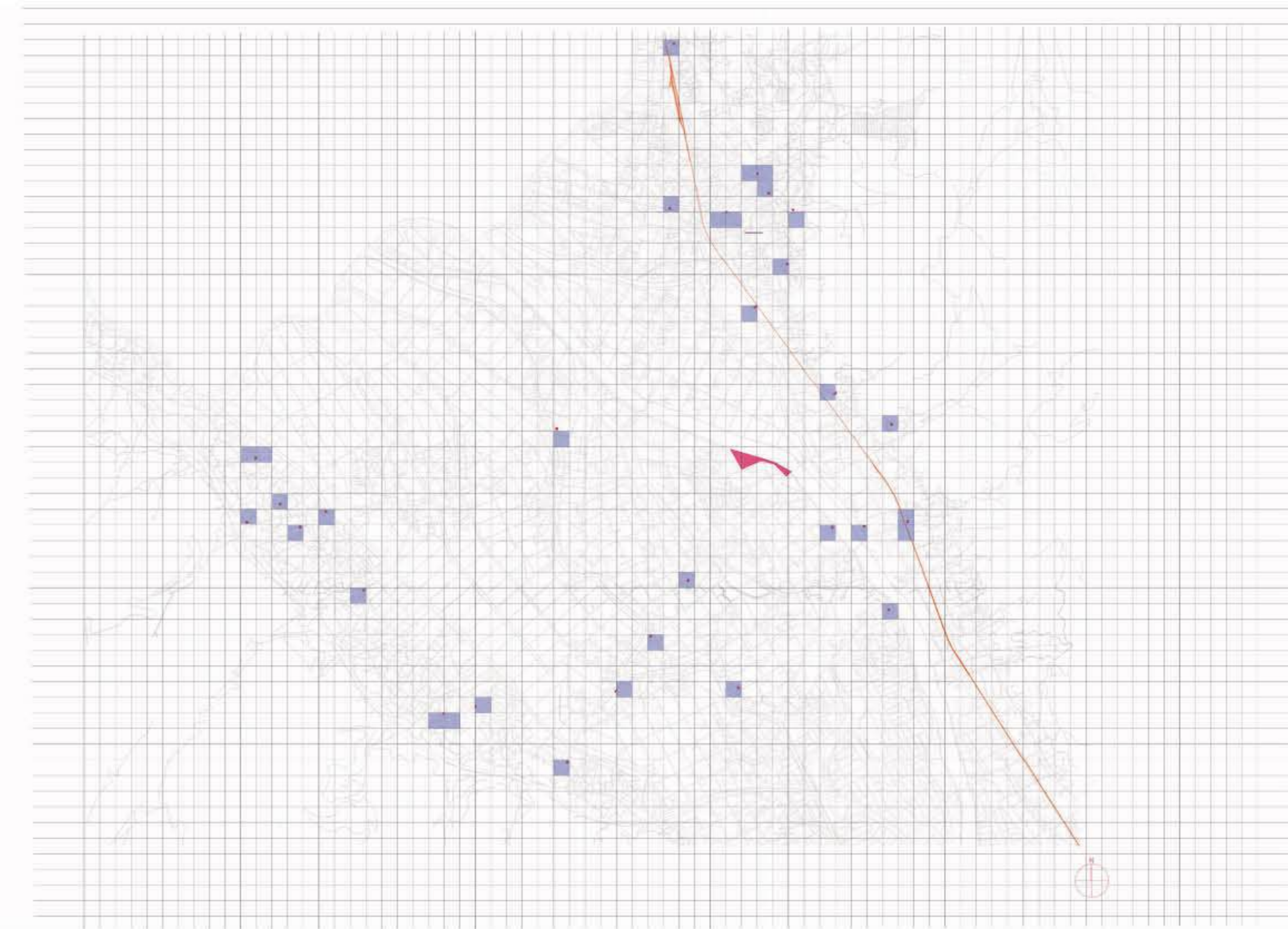
青の円は火の見櫓の音の伝達領域であり防災インフラとしての生息域でもある。この円の領域は一定の流れがあり諏訪市の特殊な地形に対して守るように答えている。

黒線の諏訪市の火の見櫓を通した消防団のネットワークである。住宅街を中心とした運営がされておりそれに付随する火の見櫓は象徴的なオブジェとして扱われている。

SUWA and Hinomiyagura 諏訪と火の見櫓



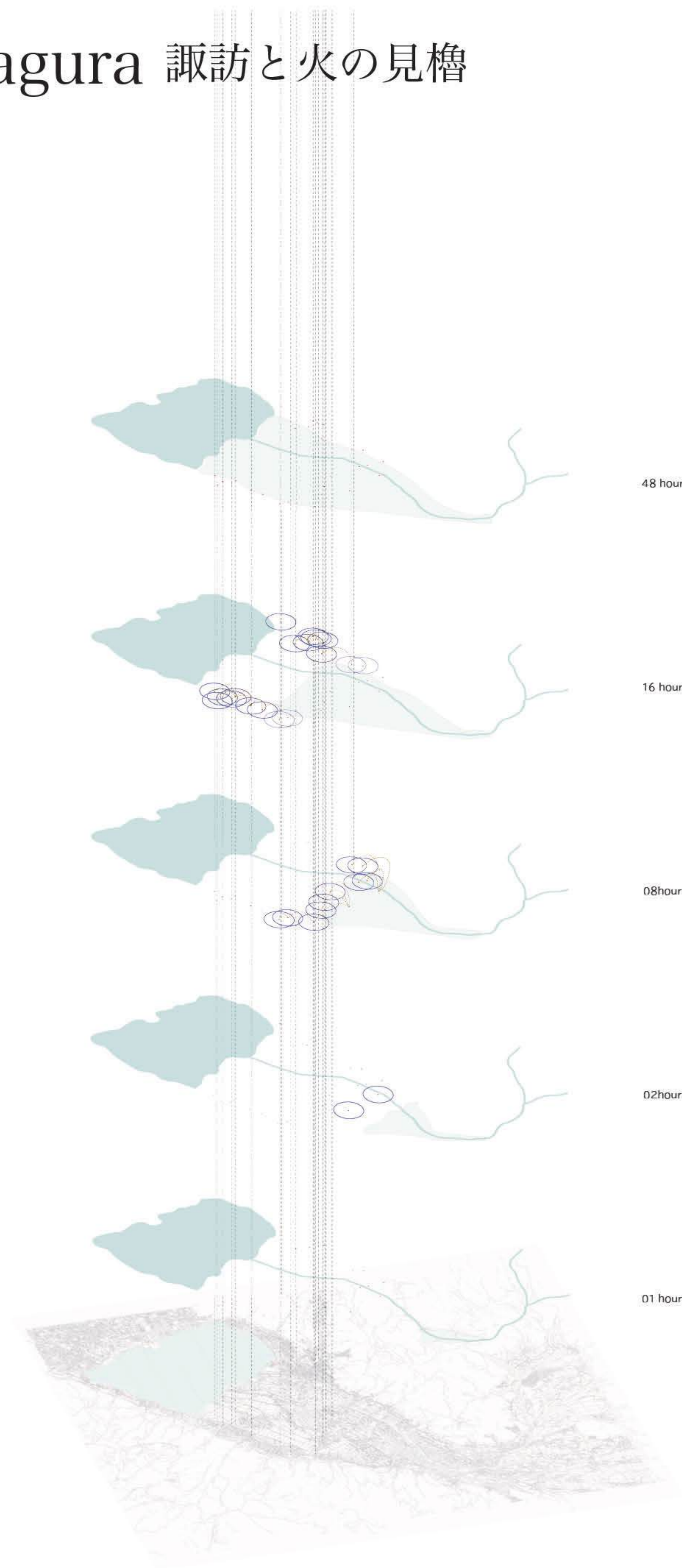
青紫色の範囲は小学校、中学校であり、災害時は避難所として運営されることもある。火の見櫓と小学校等は他律的な関係性が存在している。



諏訪市は 3500 個分割された土地内、火の見櫓は 34 個所有している。一塔のみの都市への影響は小さいが複数塔でのネットワークによる影響は大きい。

SUWA and Hinomiyagura 諏訪と火の見櫓

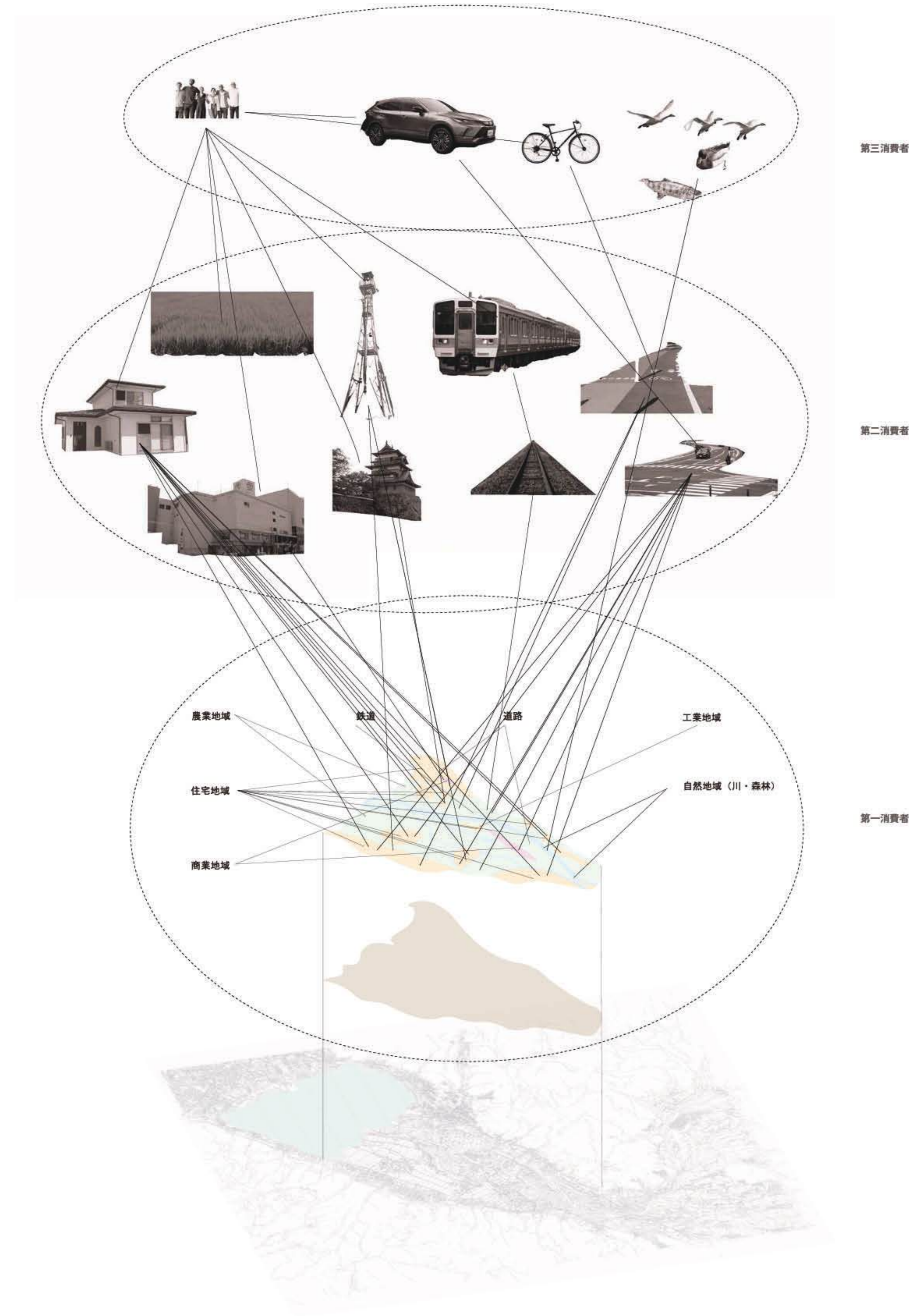
水害と火の見櫓



諏訪では火の見櫓は水害に対しても防災しており、上の図式は八ヶ岳から流れる上川の氾濫を想定したものである。火の見櫓は氾濫した箇所を監視するかのよう位置しており災害時間が経つにつれて波のように火の見櫓たちはつながっている。

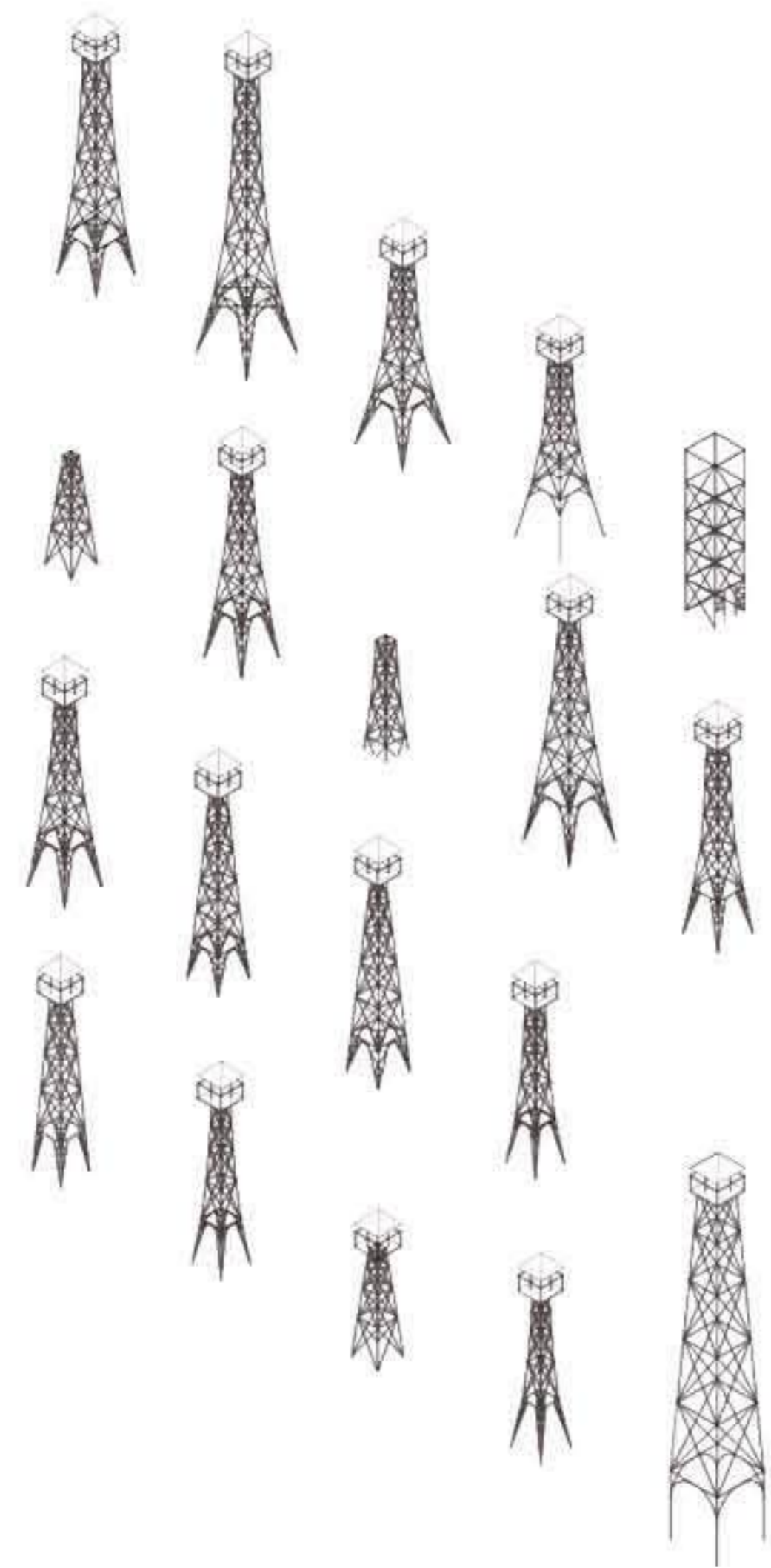
SUWA and Hinomiyagura 諏訪と火の見櫓

諏訪の空間的食物連鎖

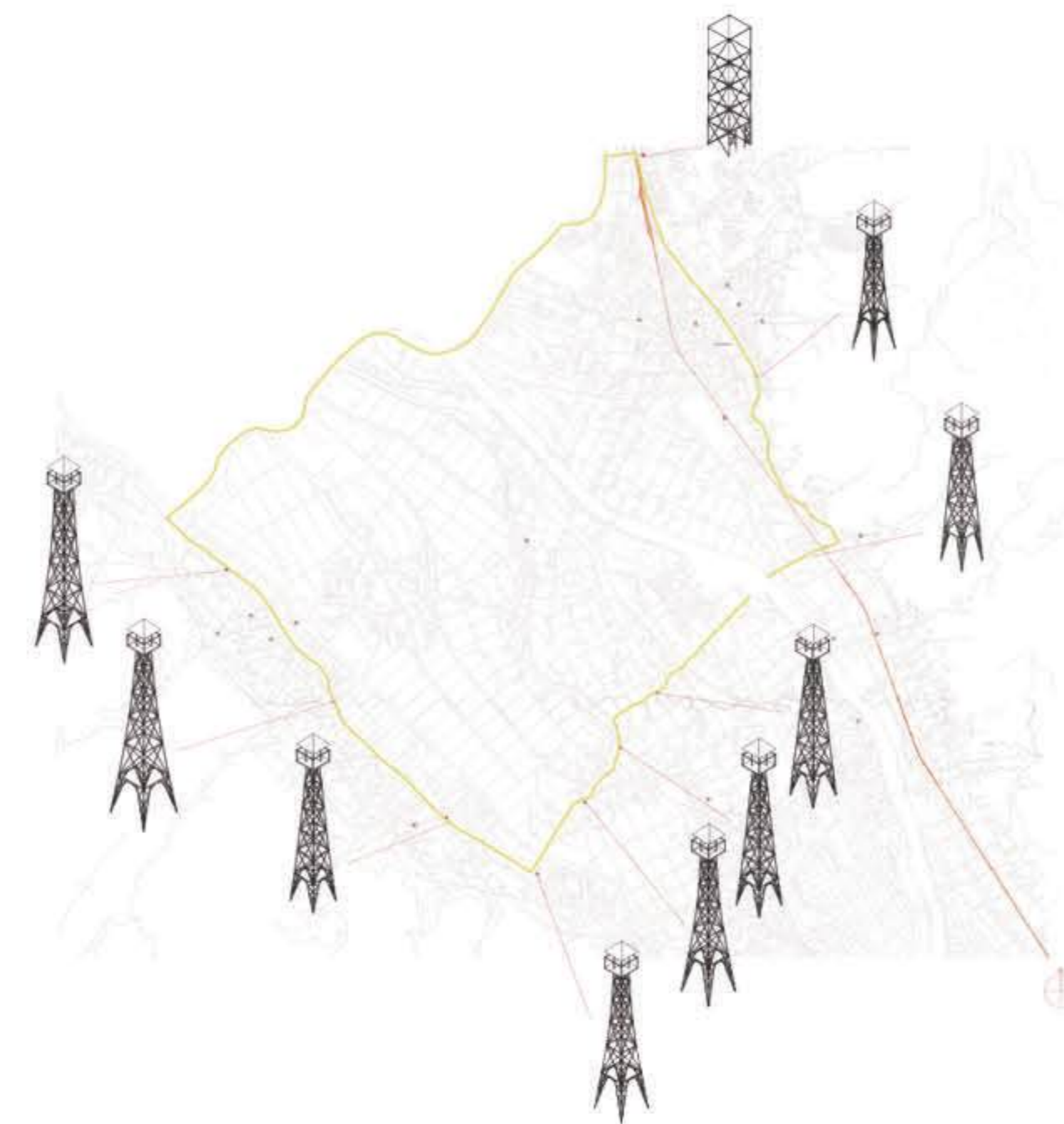


諏訪は近代化から進んでおらず都市空間を三段階に分け分類化した。近代化による車での移動が目立ち、諏訪の都市空間の捕食者は自動車であり人間である。市民は自然に無関心となっていき乖離している。

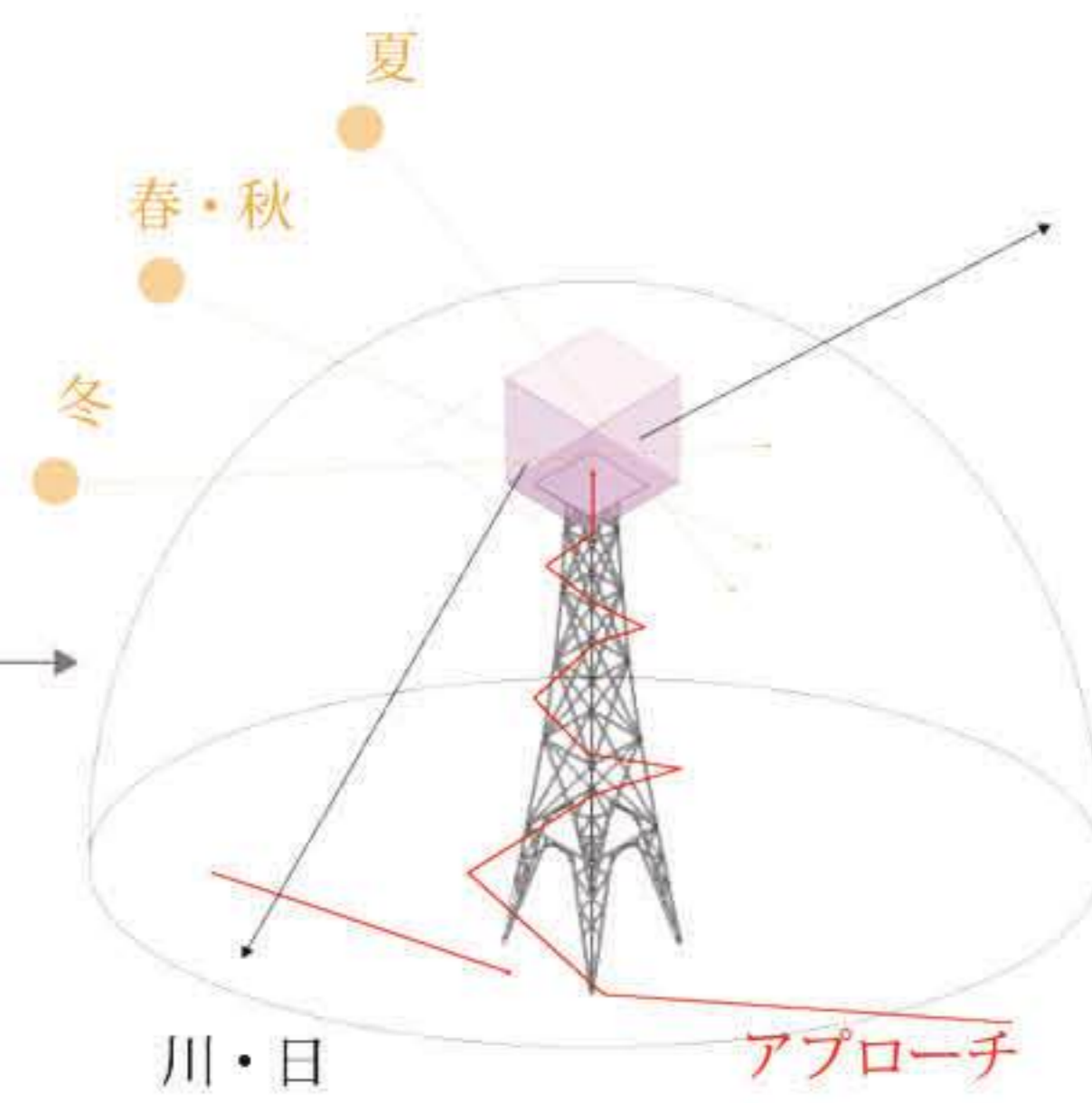
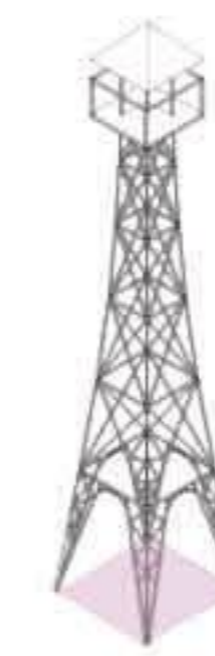
Design Diagram 設計ダイアグラム



写真と実測記録でデータ化する



データ化した火の見櫓と自身が設計する火の見櫓から 10 塔を選定

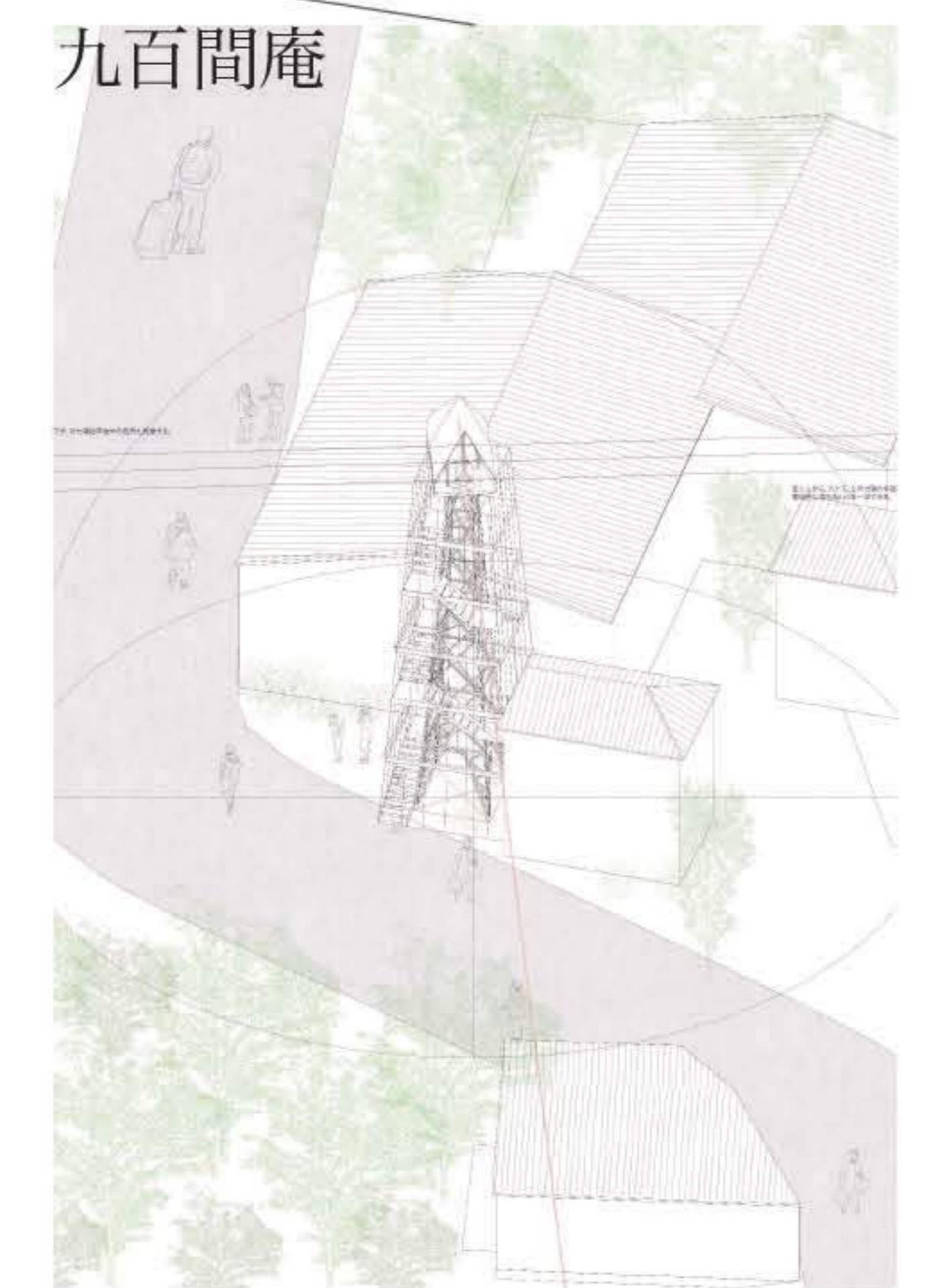
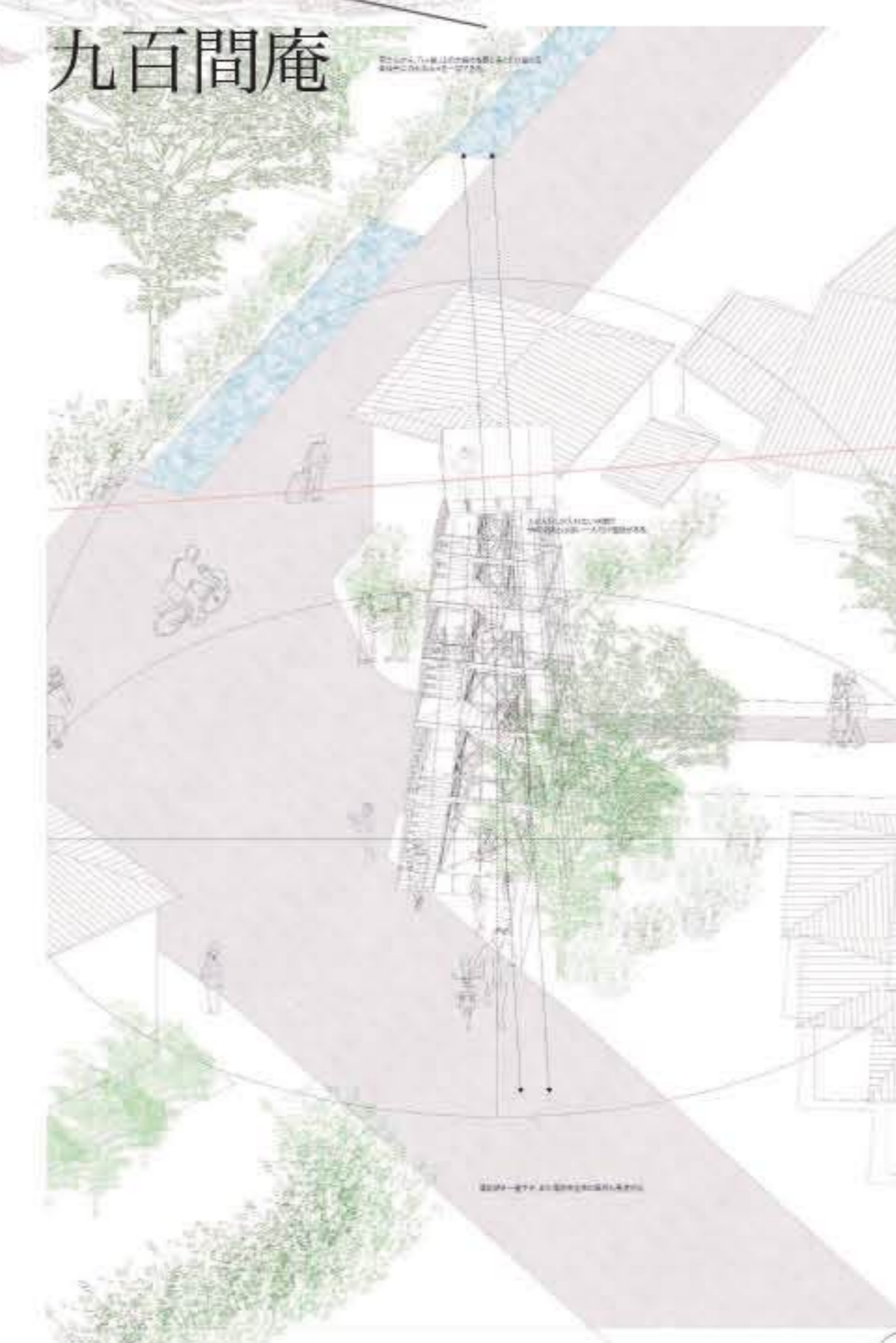
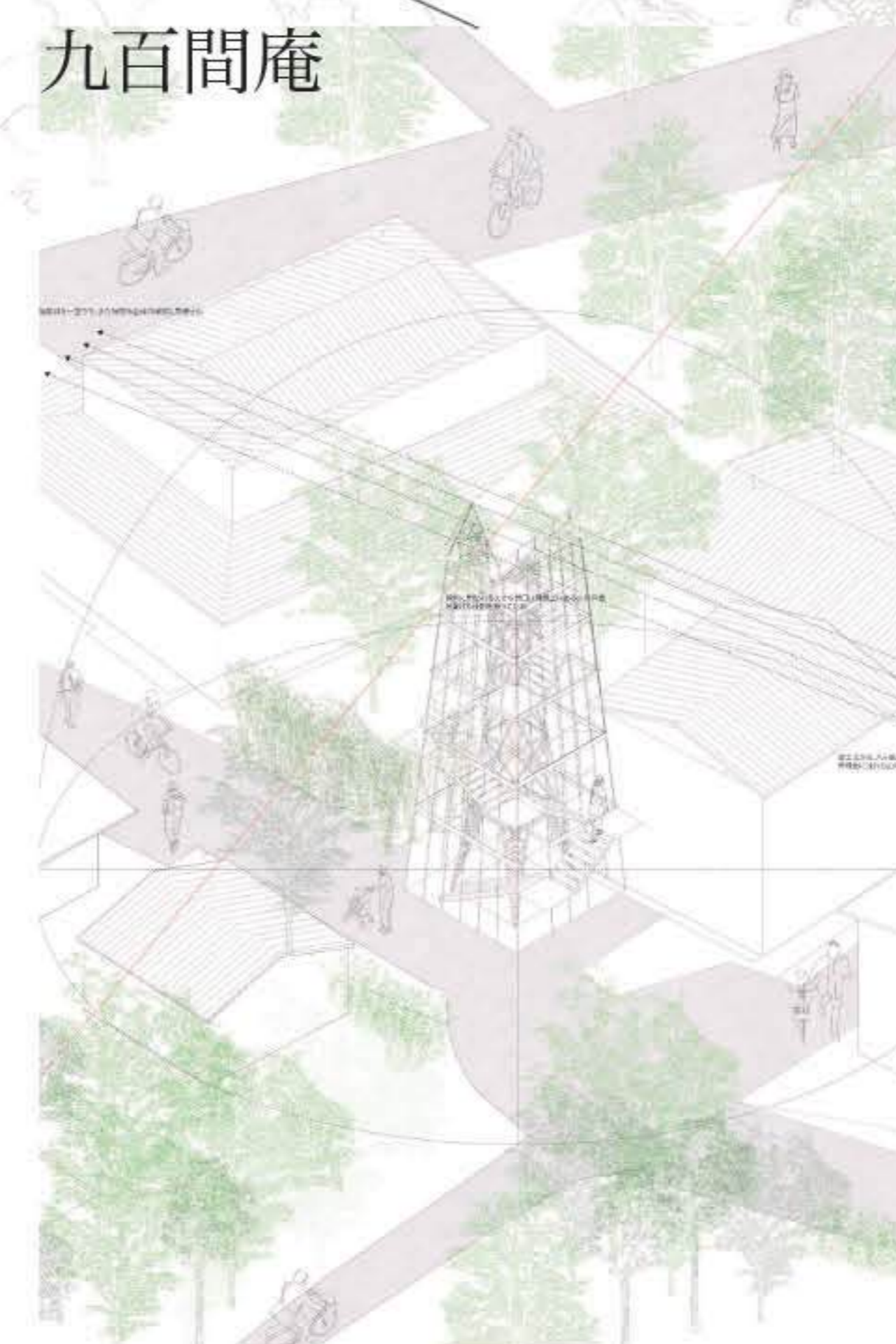
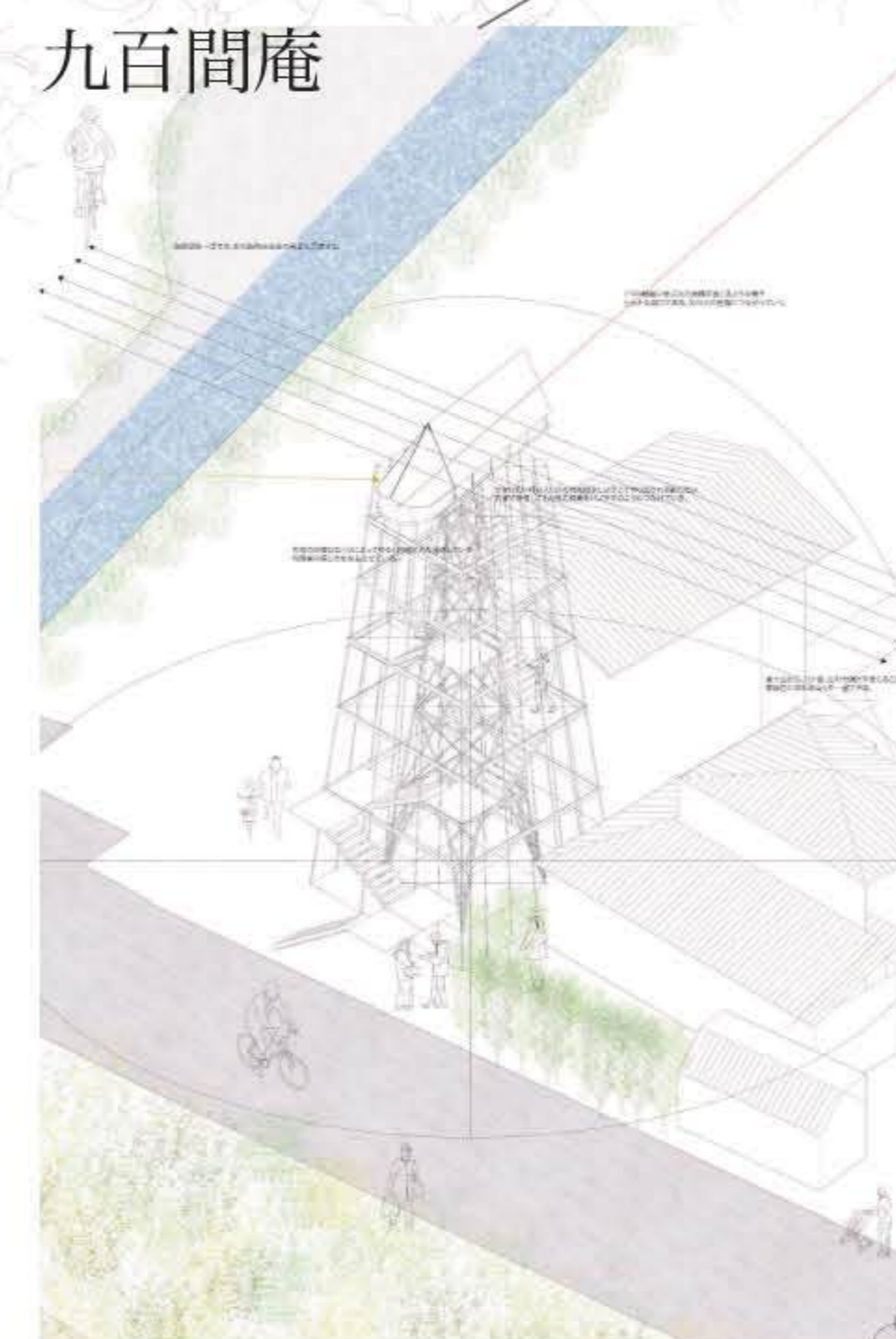
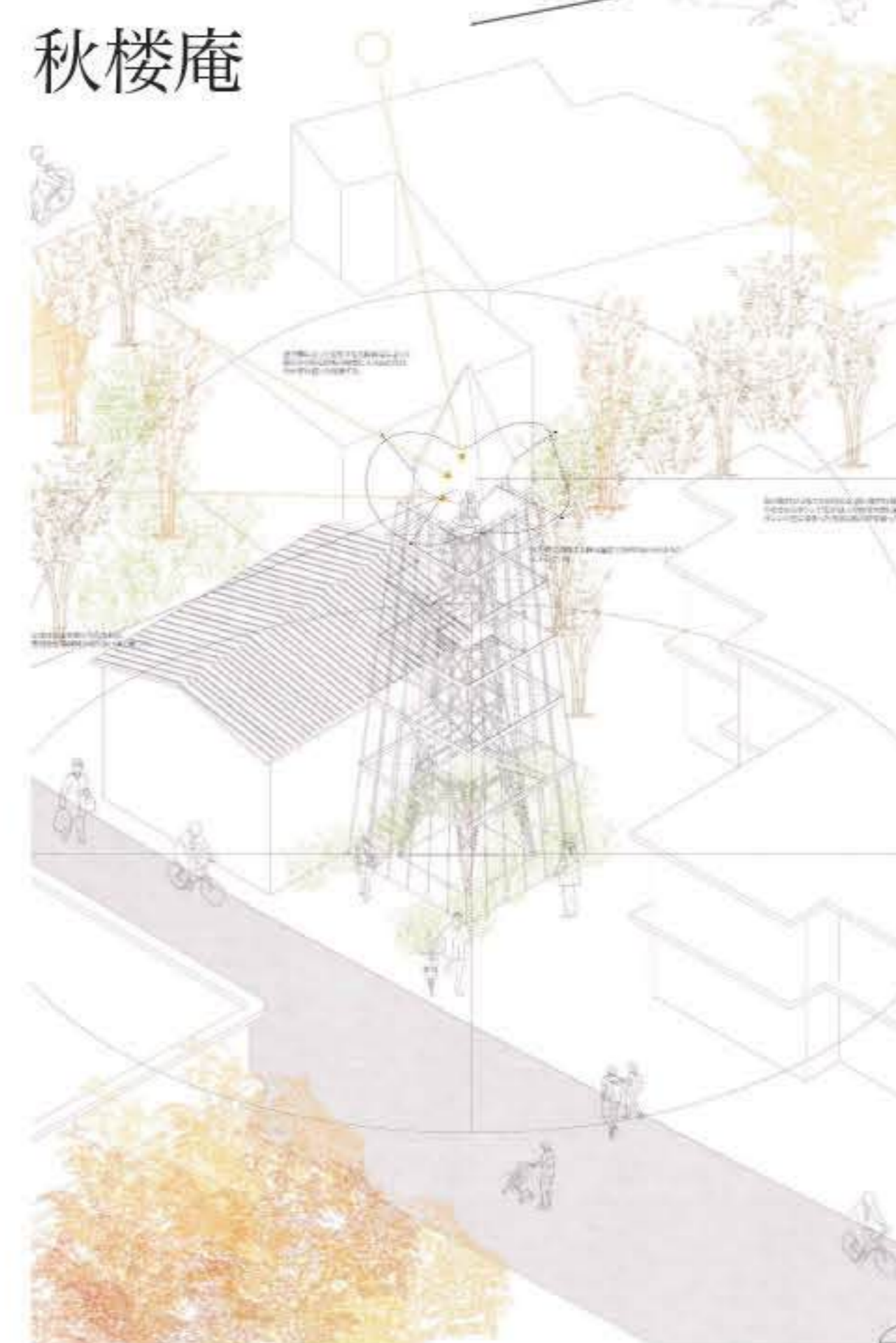
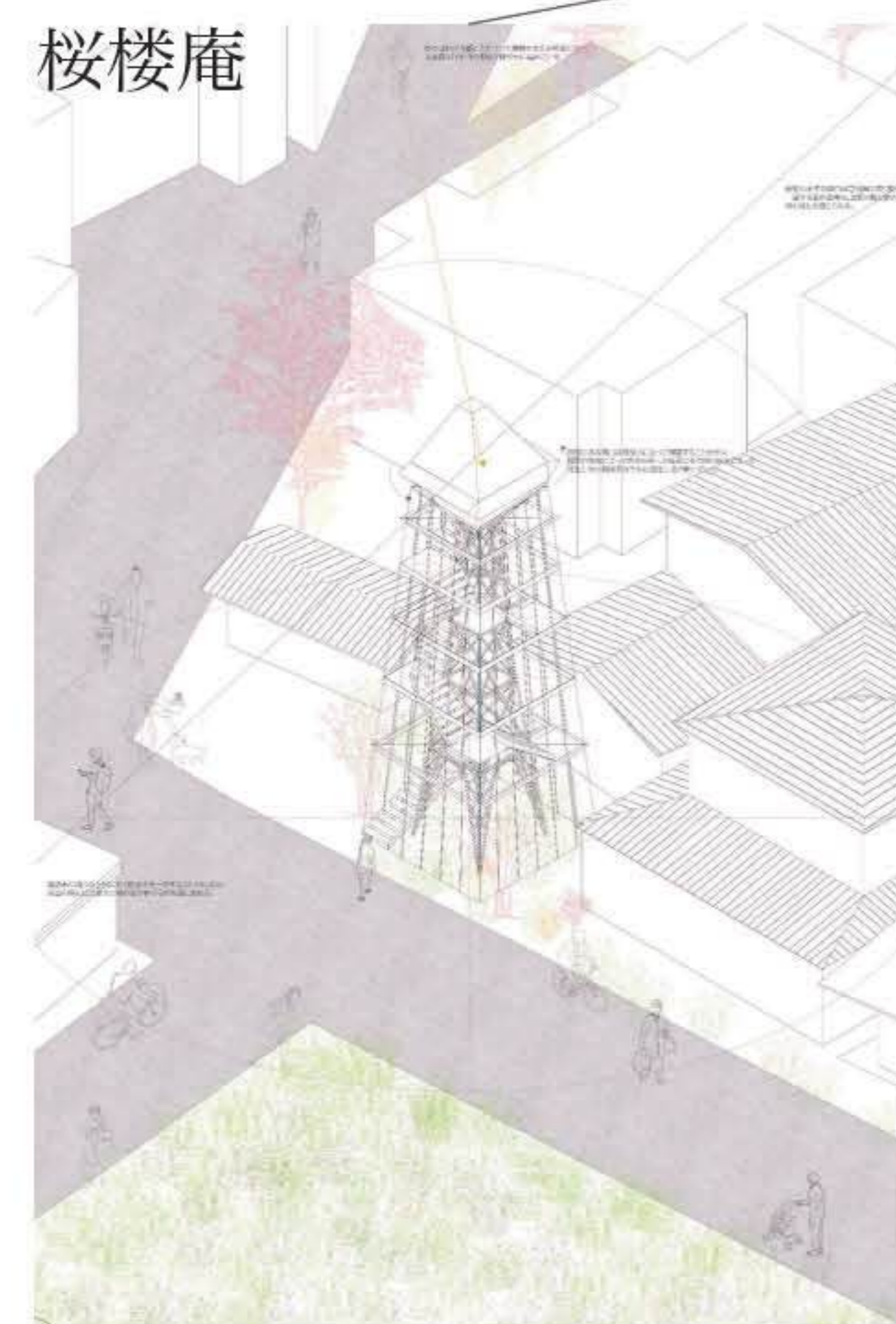
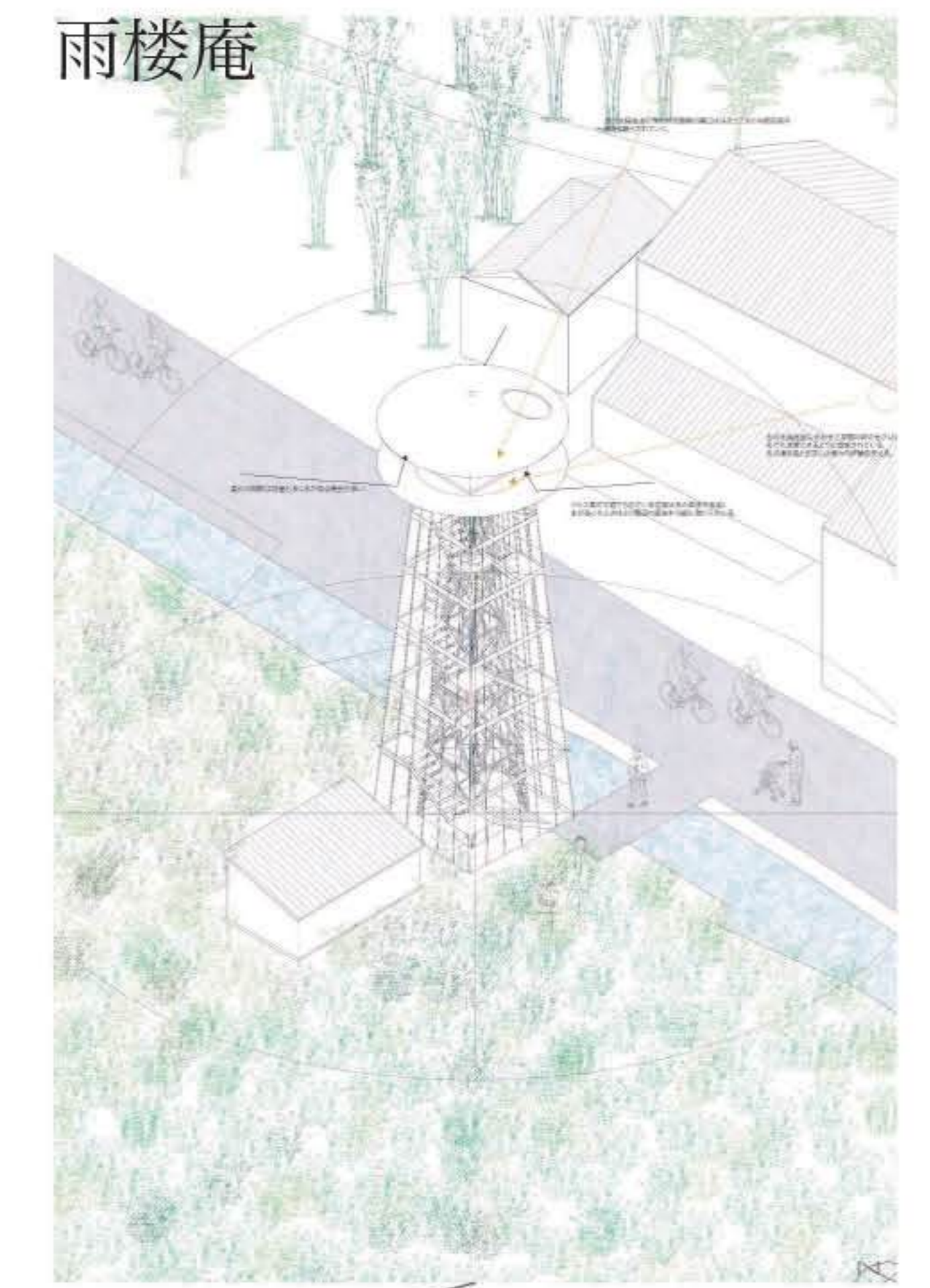
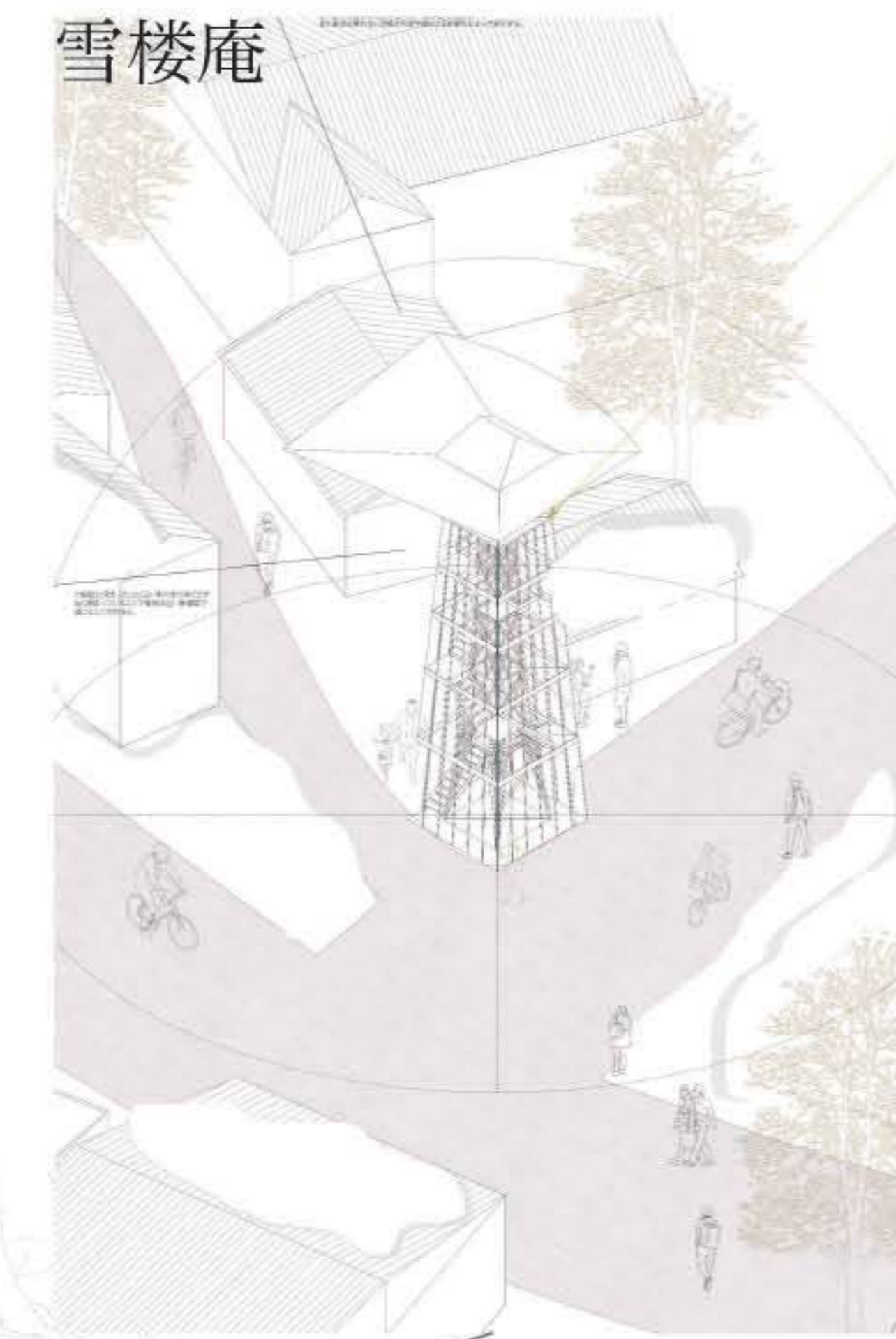
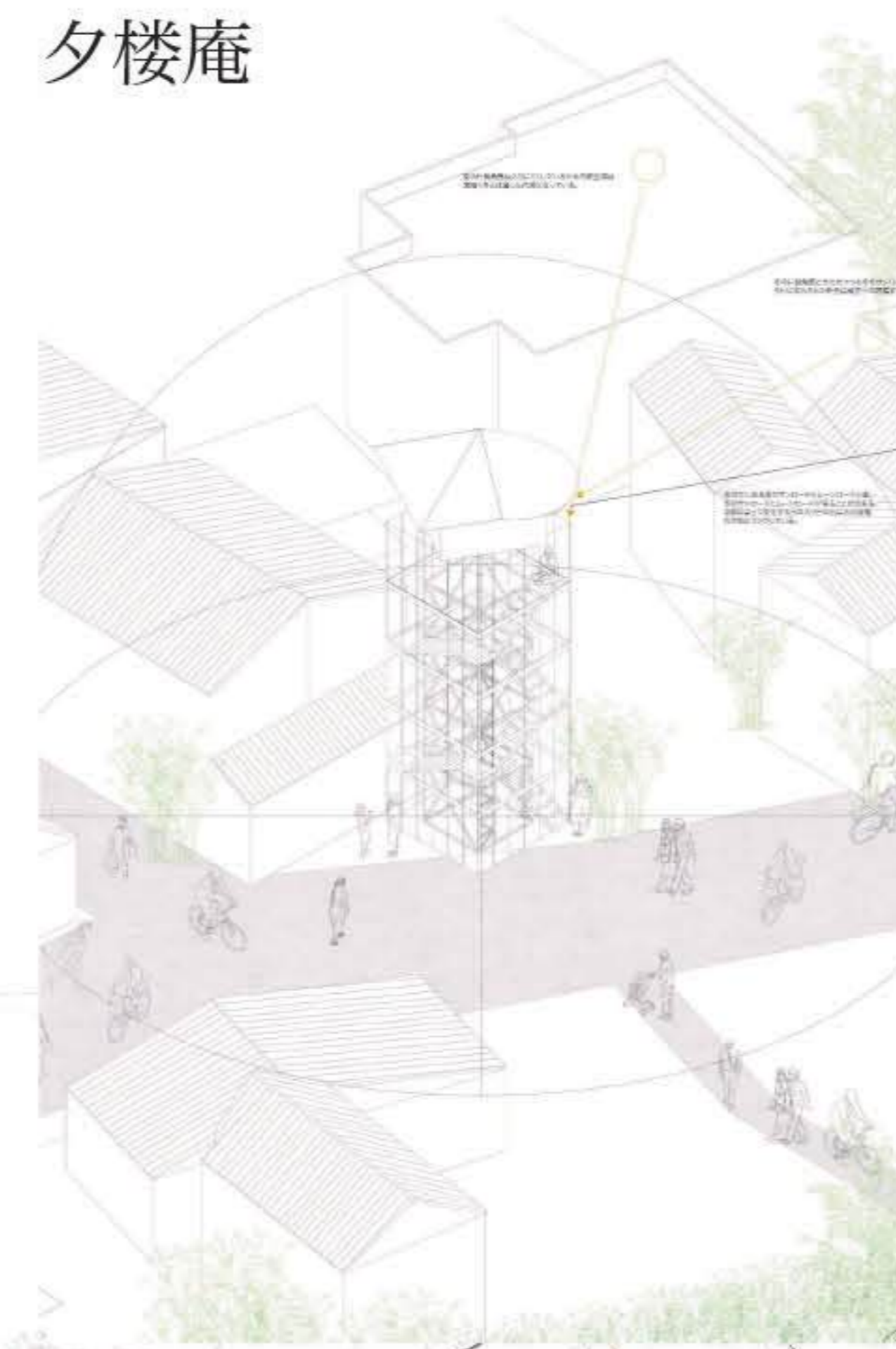
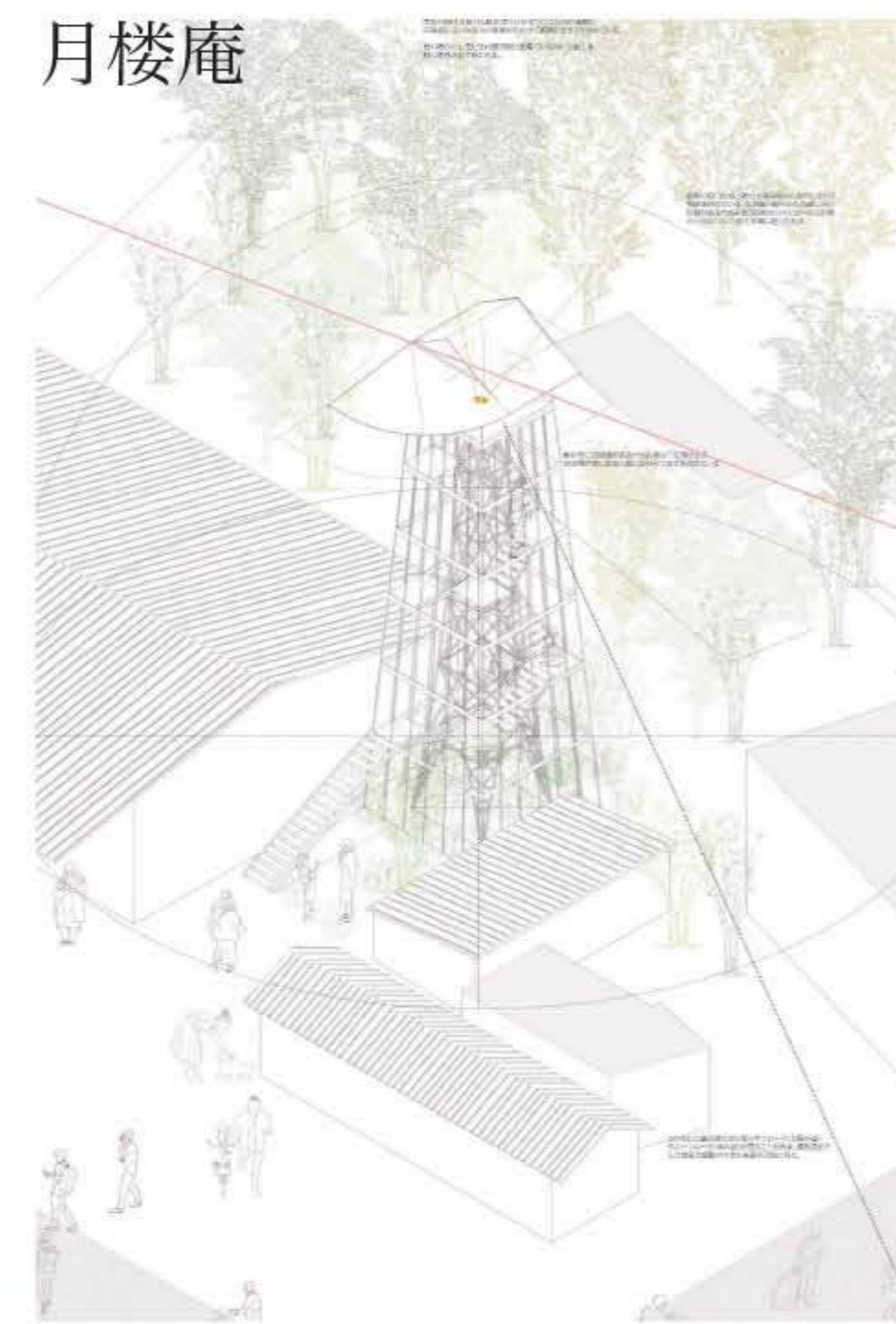


各 10 塔はプロポーションを考慮しつつ地面に接点している 4 点の長さ寸法を使用しながら

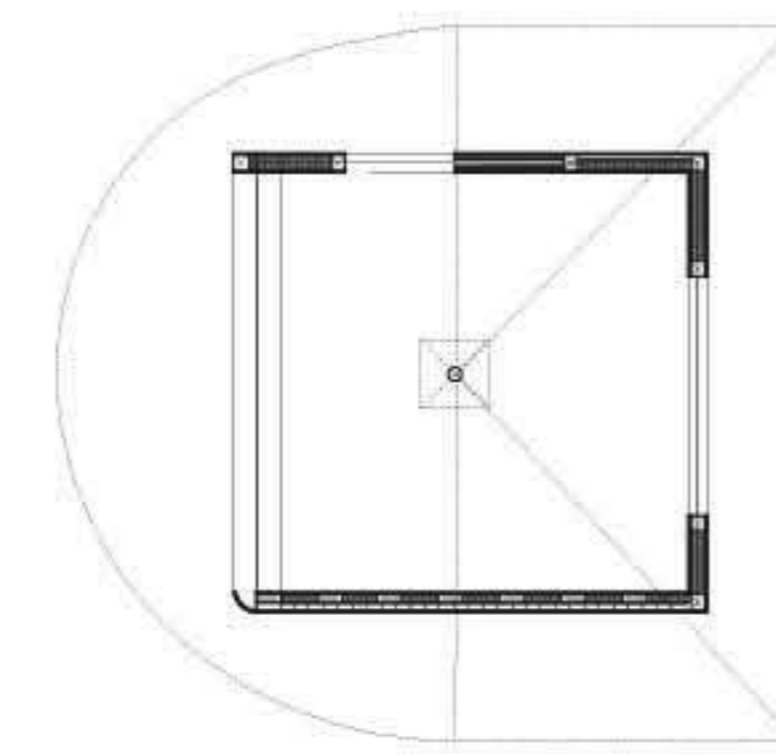
10 塔それぞれの周辺環境、季節、都市の位相を用いて多様性のあるデザインにする。

10塔の火の見櫓の配置計画

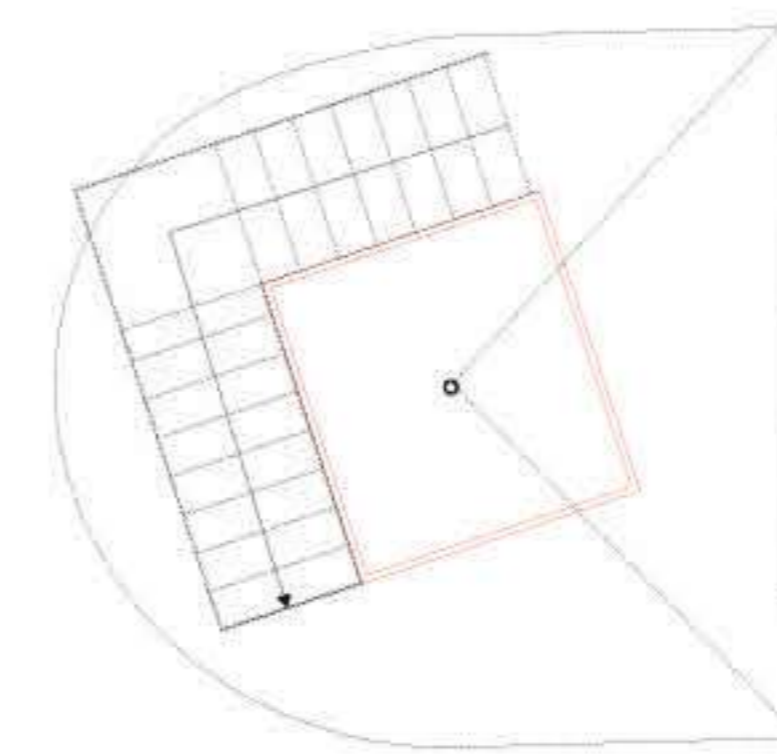
それぞれ10塔の火の見櫓は都市の居室となり諏訪市のコミュニティの中心と変化し象徴的な存在となる。 集合場所や勉強室、談話室など人の目的に対して多種多様に変化し街を見守る新たな建築としてあり続ける。



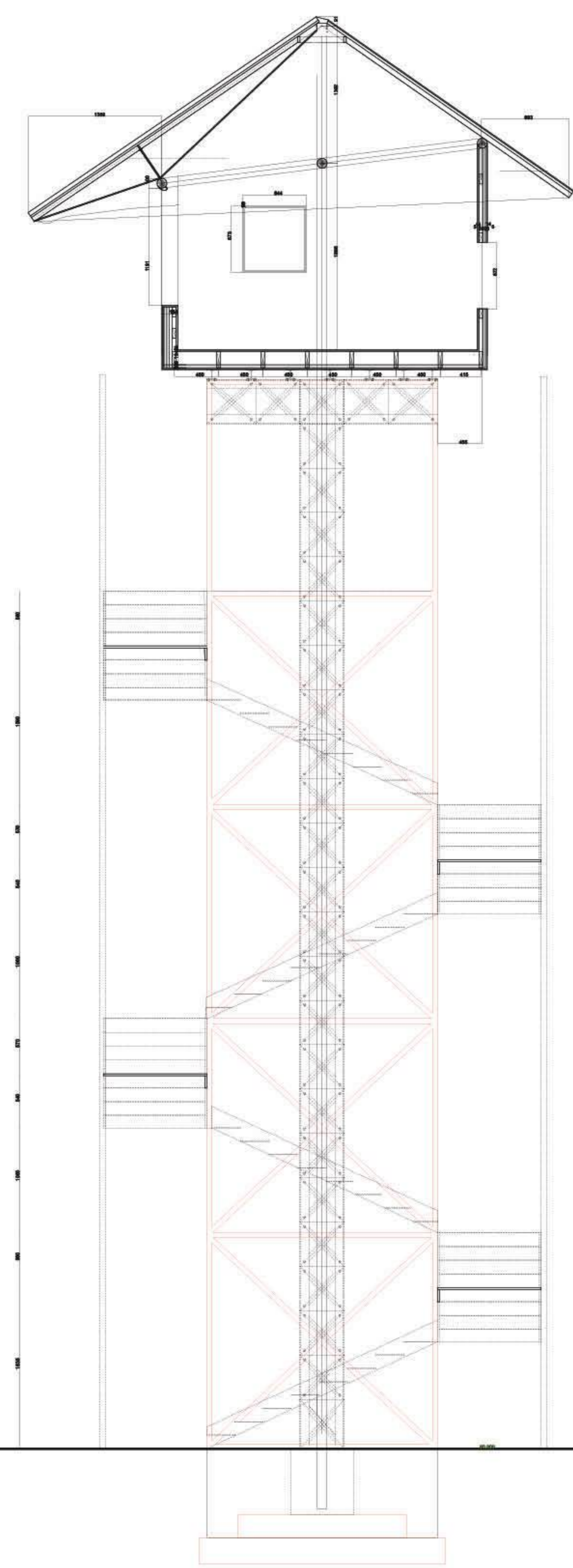
夕楼庵



1/50 塔層平面図



1/50 地層平面図

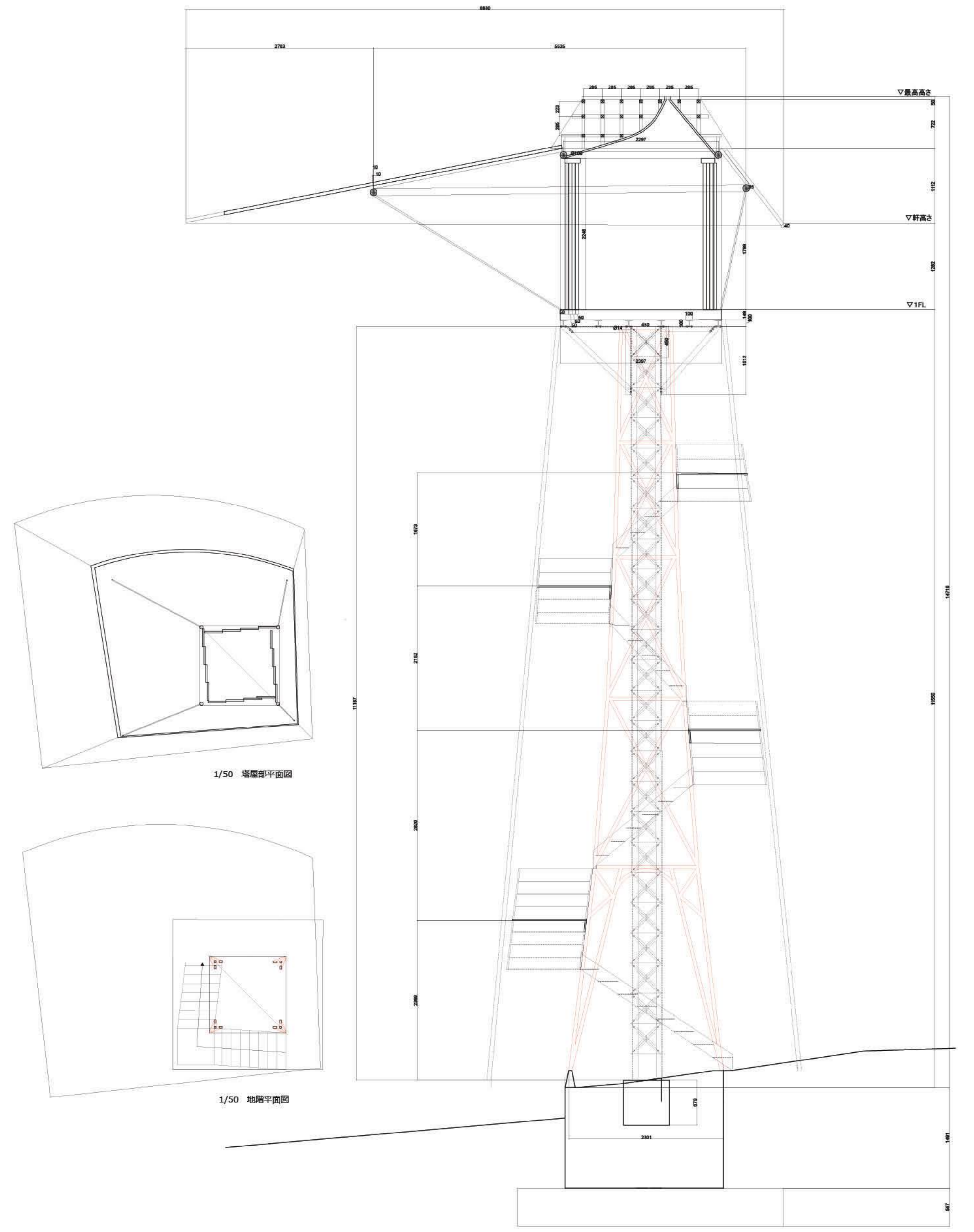


▽最高高さ

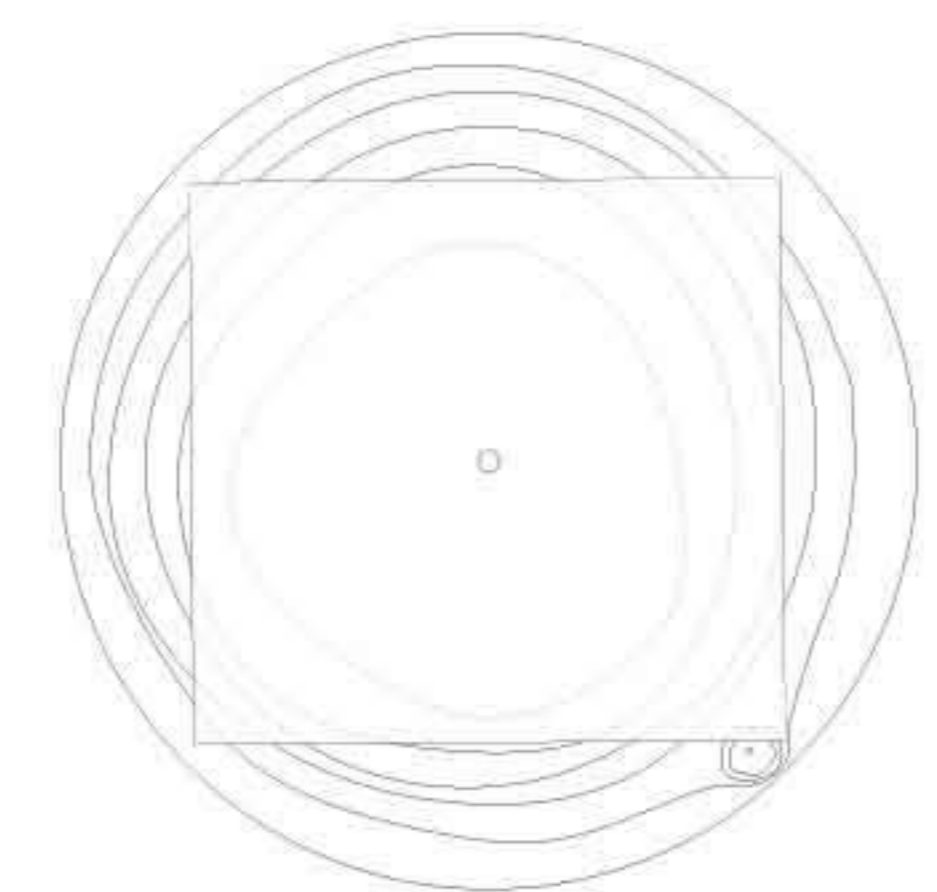
▽軒高さ

▽1FL

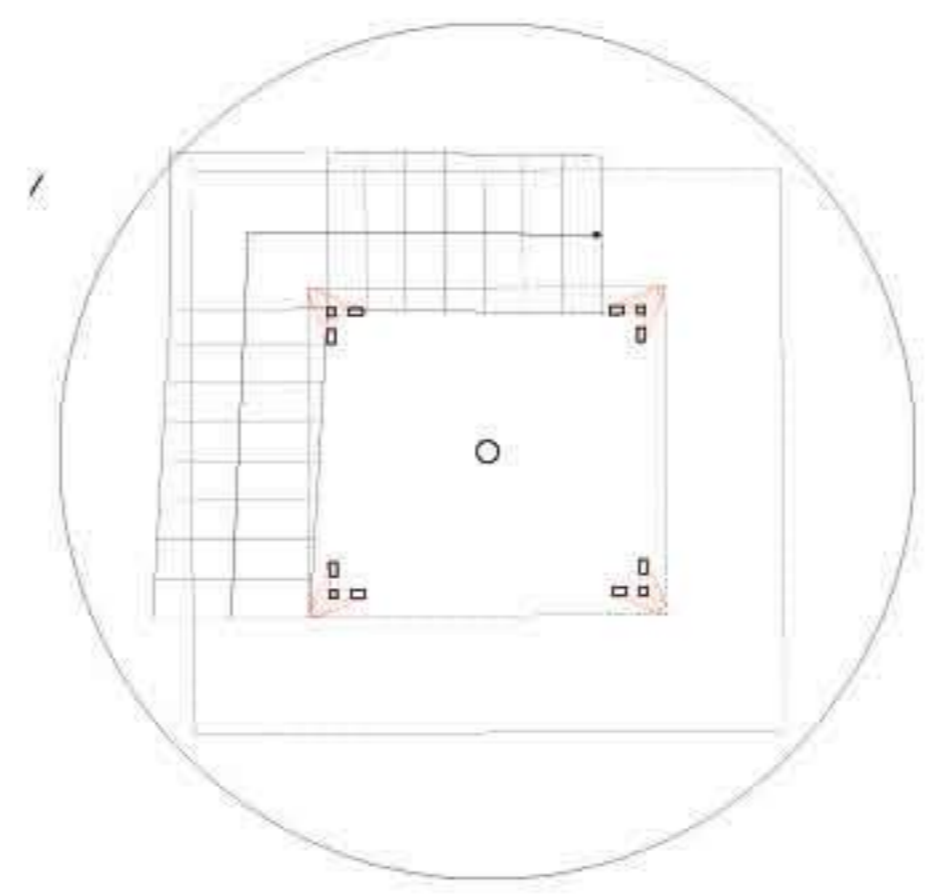
雪楼庵



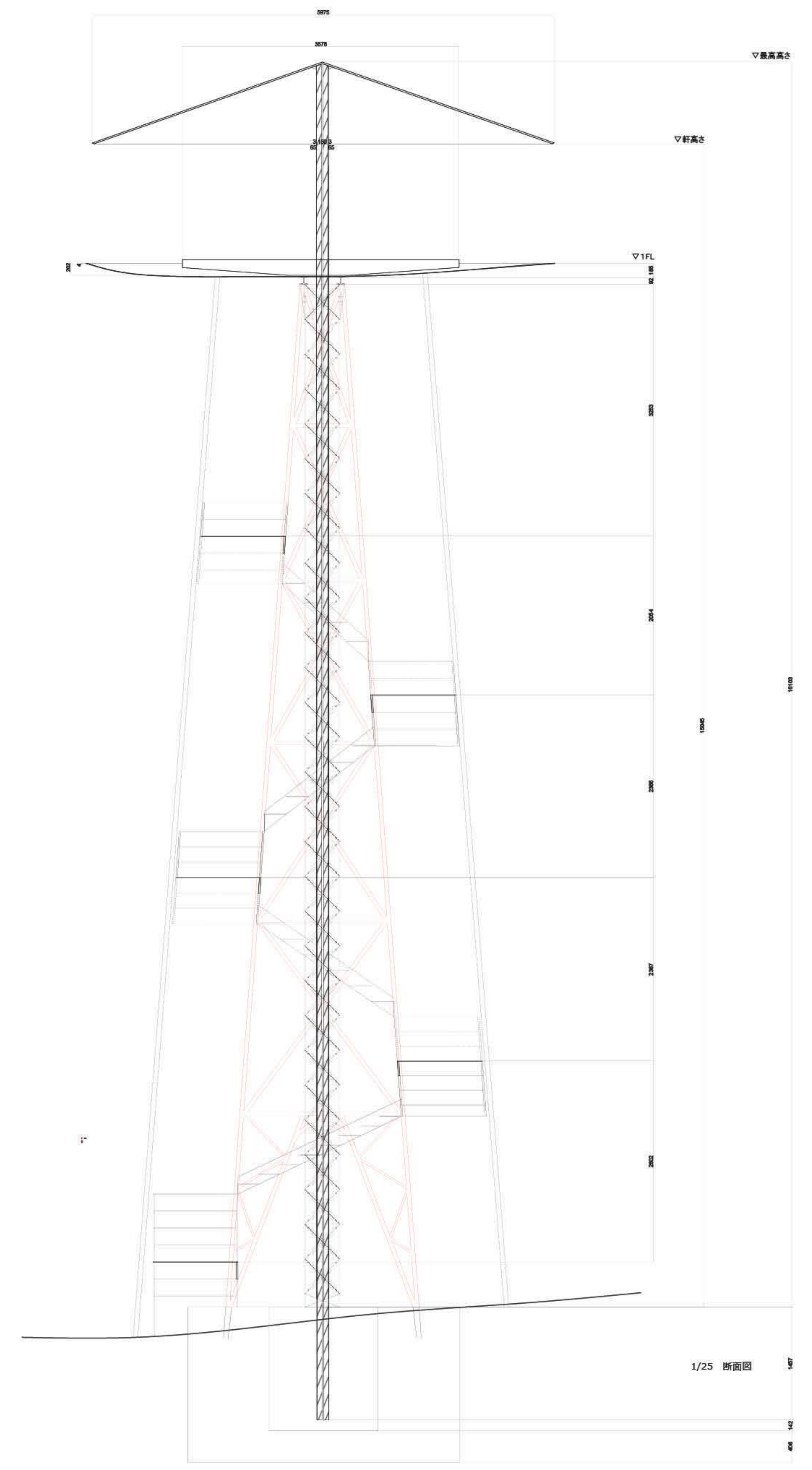
雨楼庵



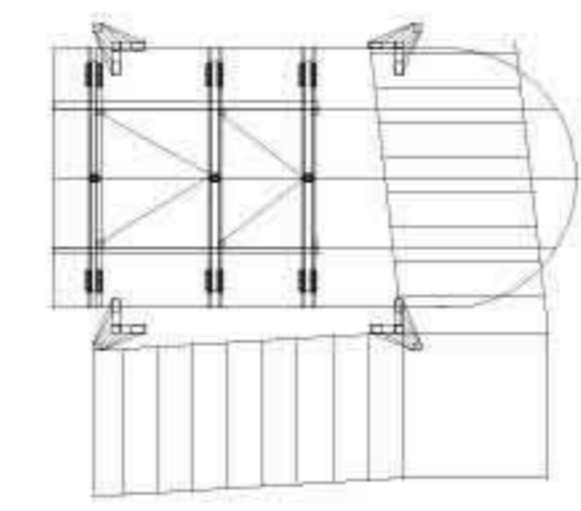
1/50 塔屋部平面图



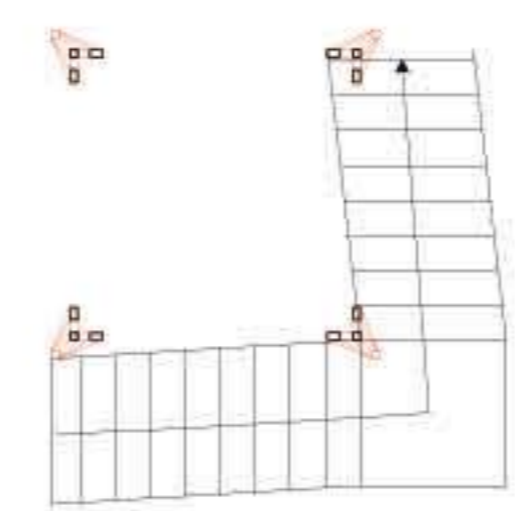
1/50 地階平面图



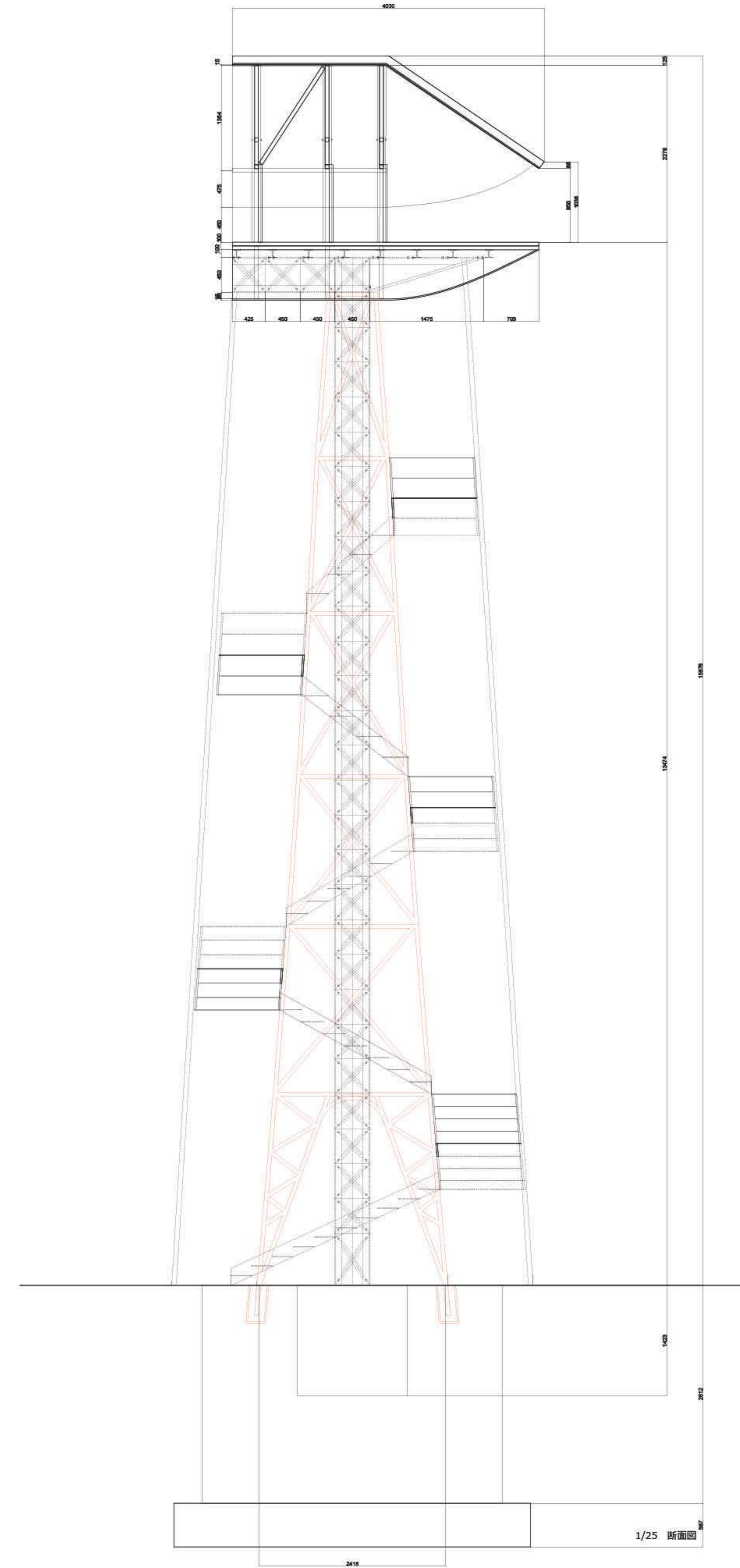
九百間庵



1/50 塔層平面図

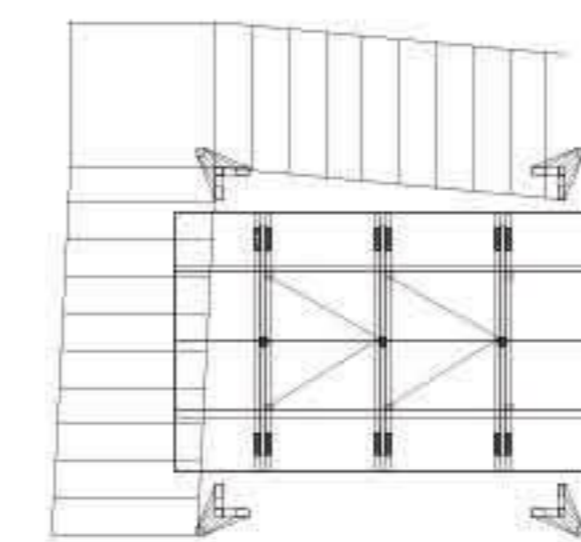


1/50 地階平面図

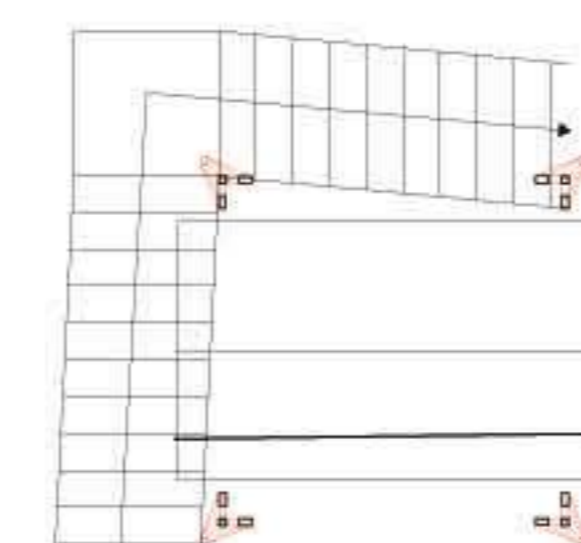


1/25 断面図

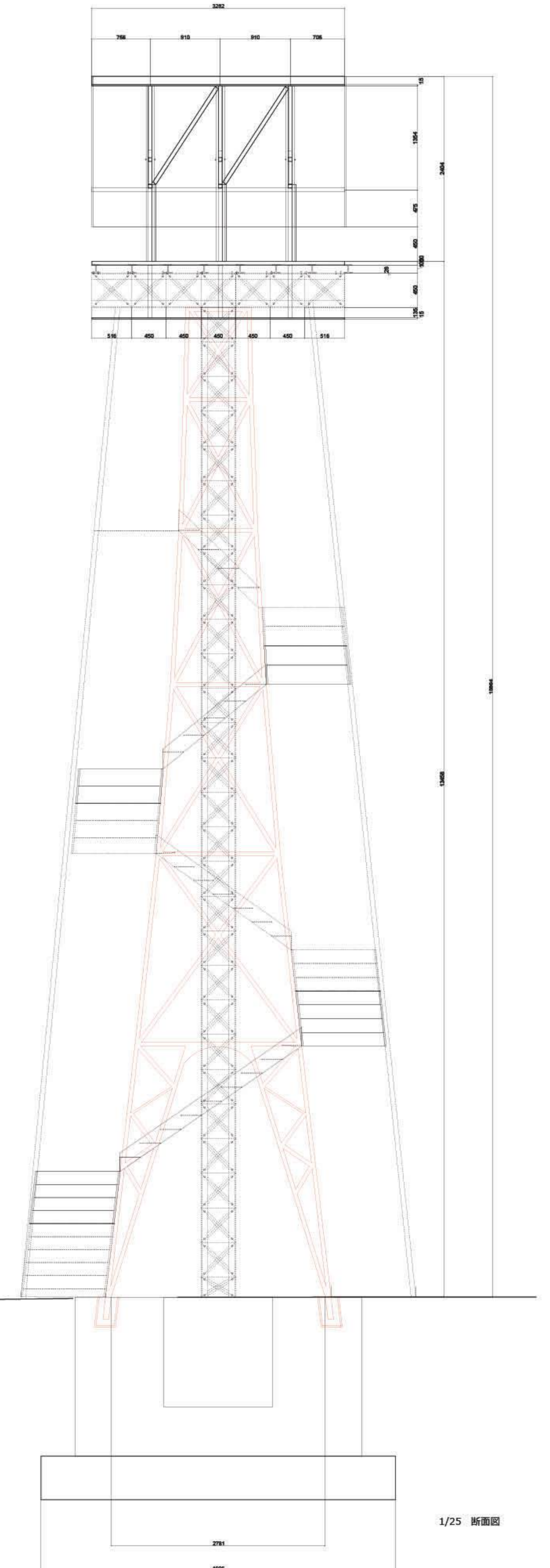
九百間庵



1/50 塔層部平面図

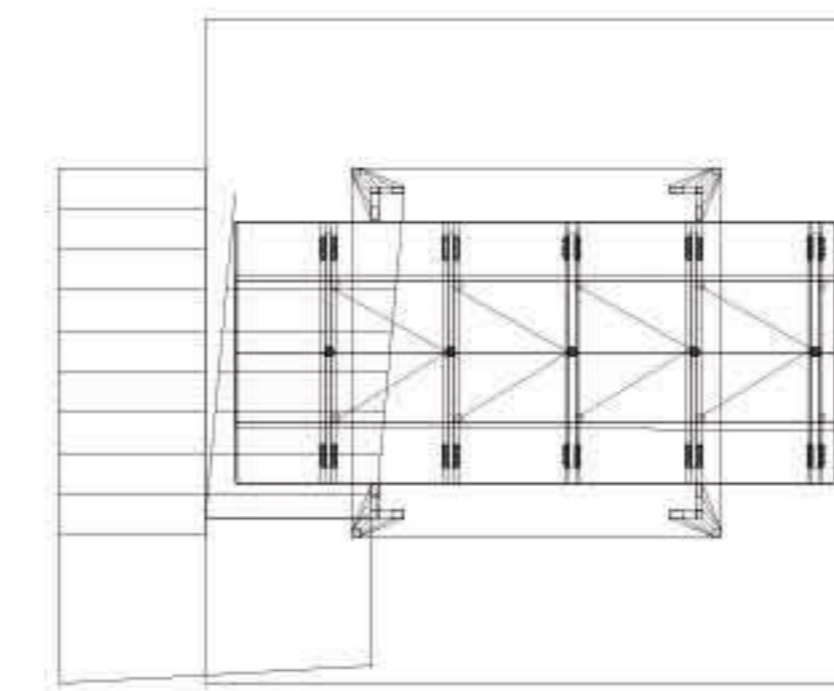


1/50 地層平面図

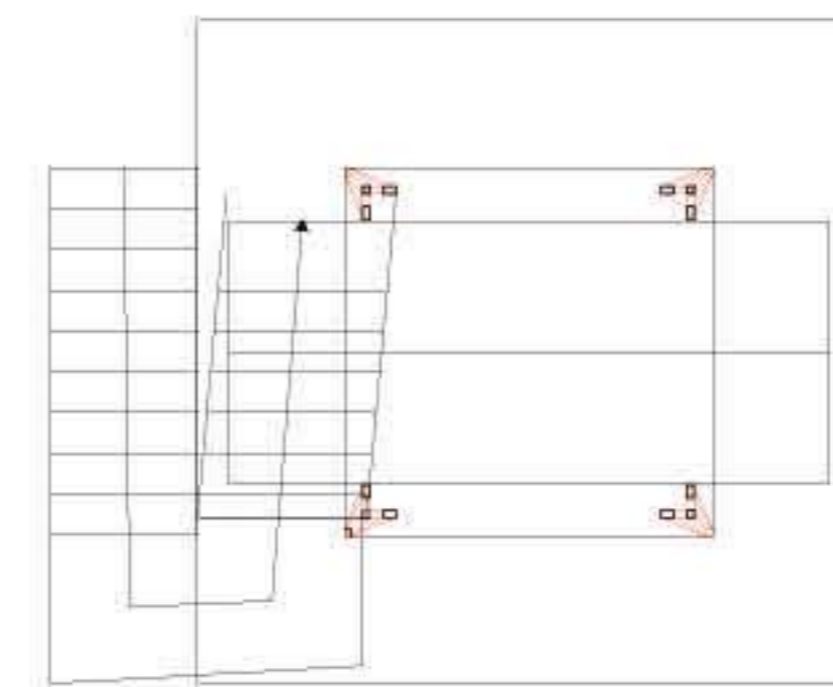


1/25 断面図

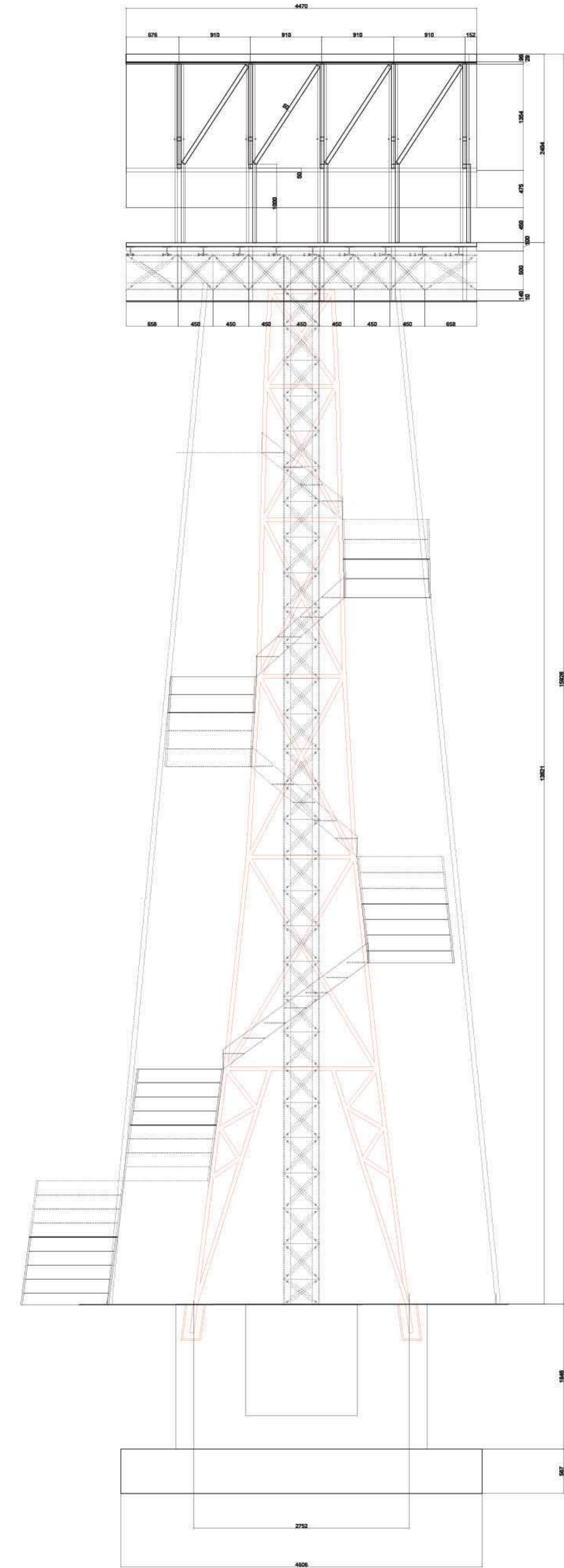
九百間庵



1/50 塔屋部平面図

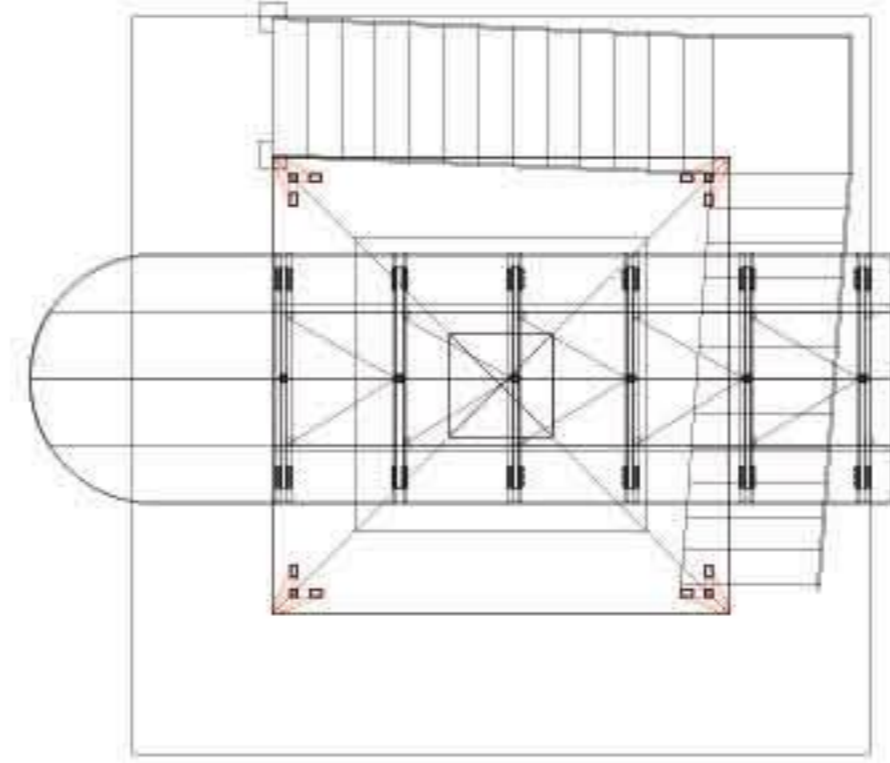
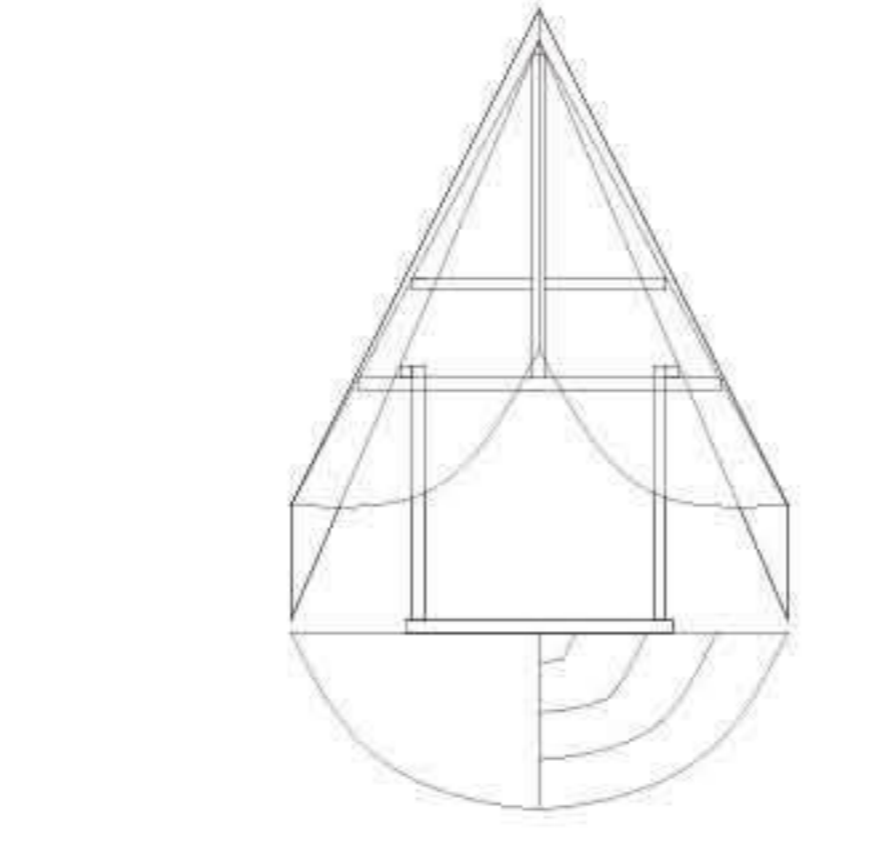
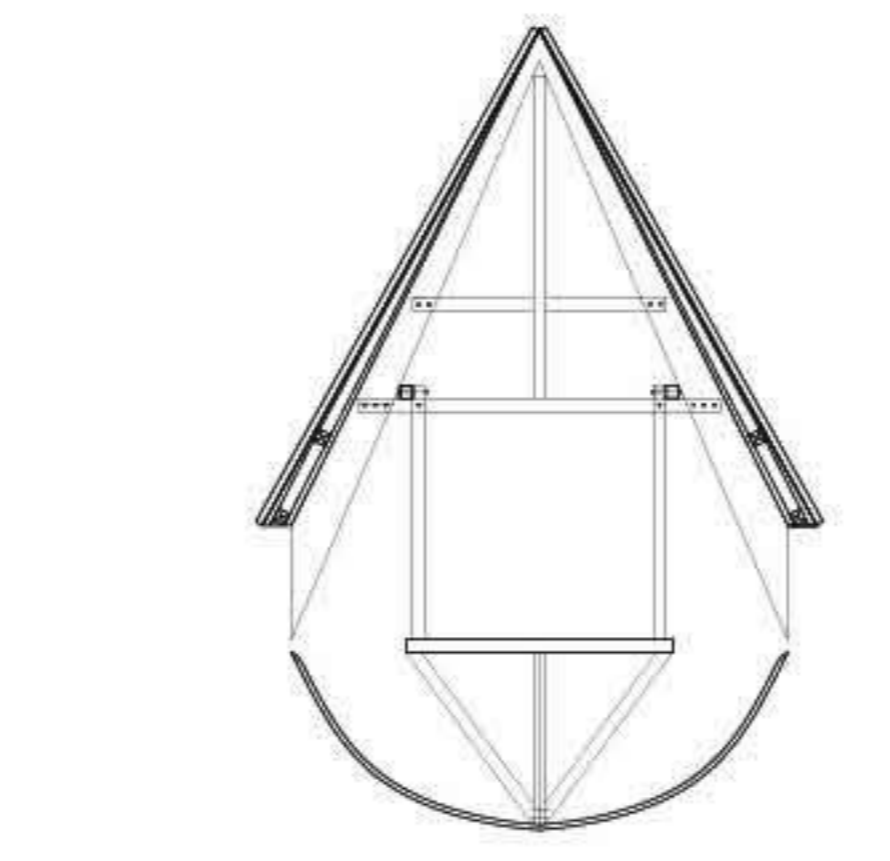


1/50 地階平面図

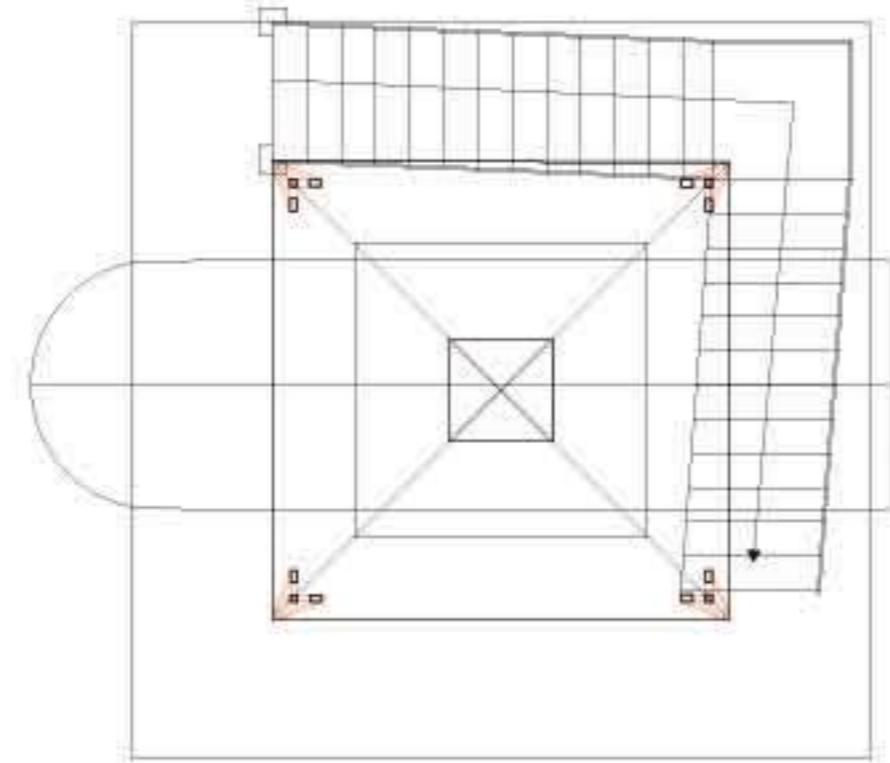


1/25 断面図

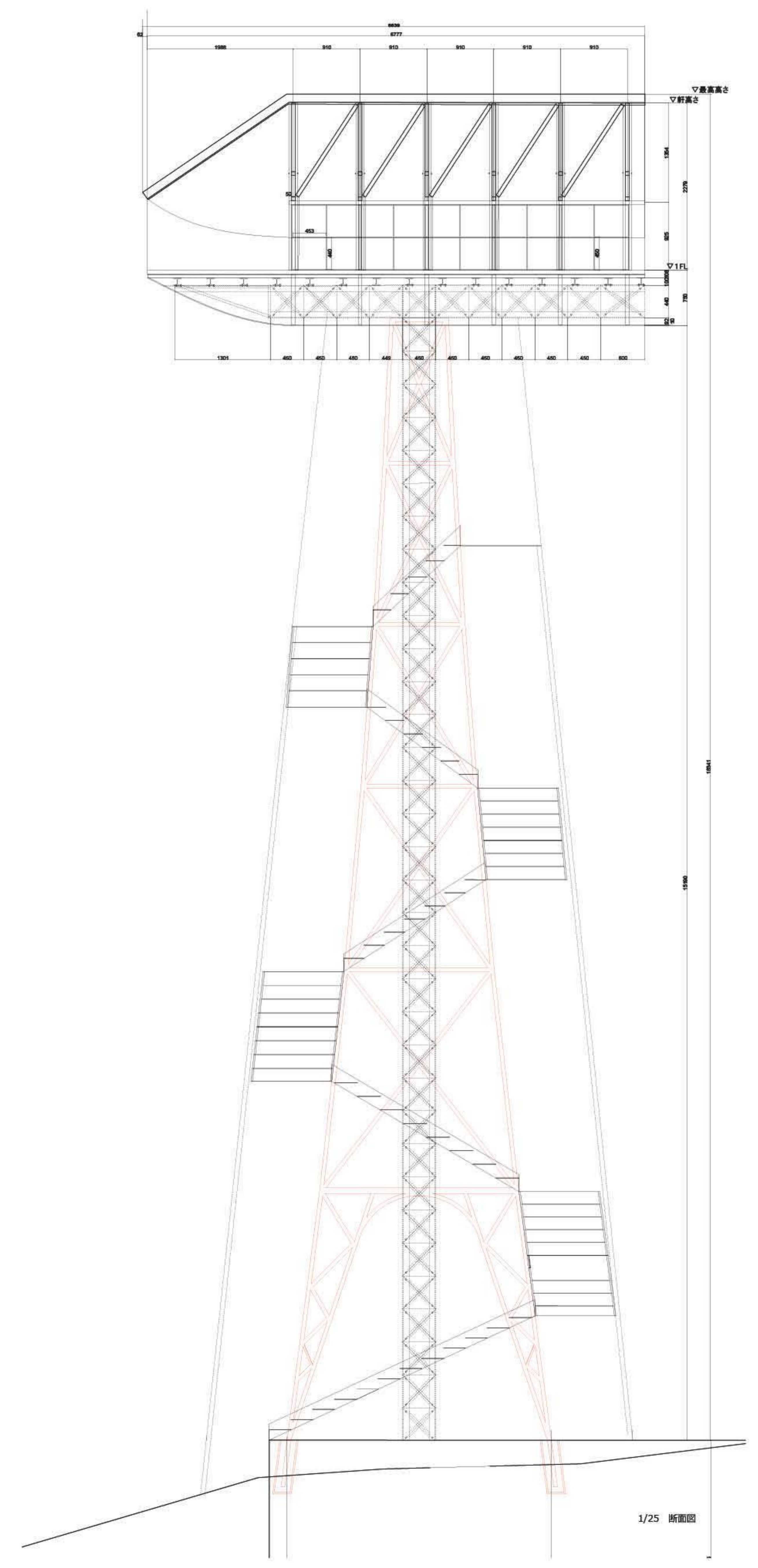
九百間庵



1/50 塔樓部平面圖

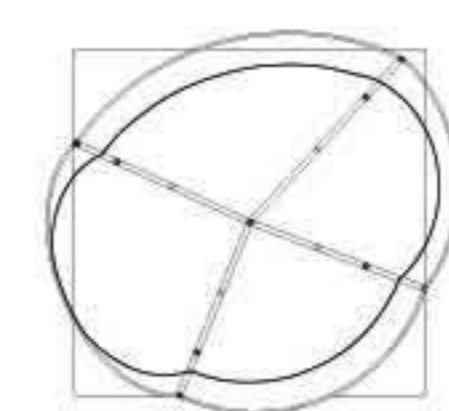


1/50 地庫平面圖

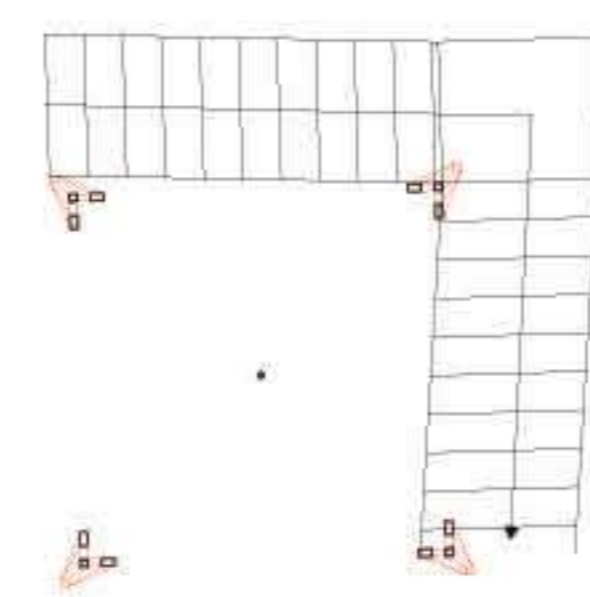


1/25 断面圖

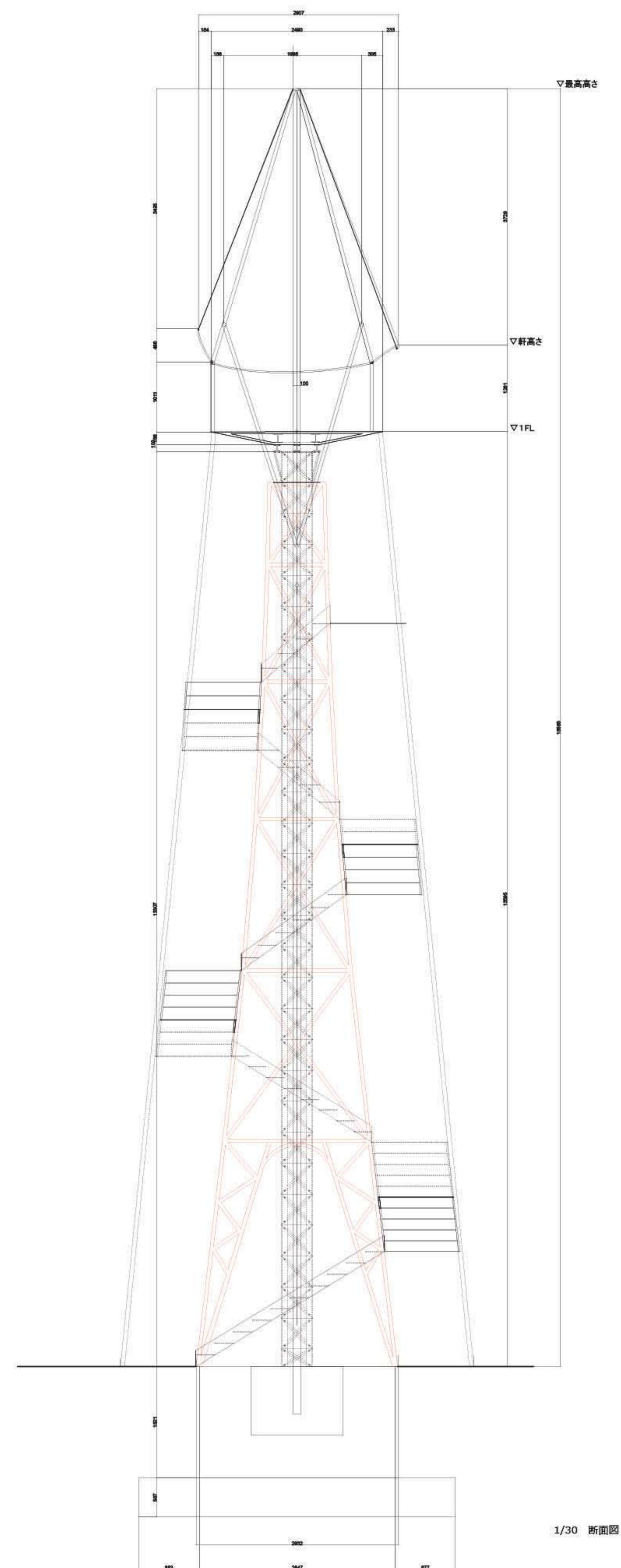
秋楼庵



1/50 塔屋部平面図

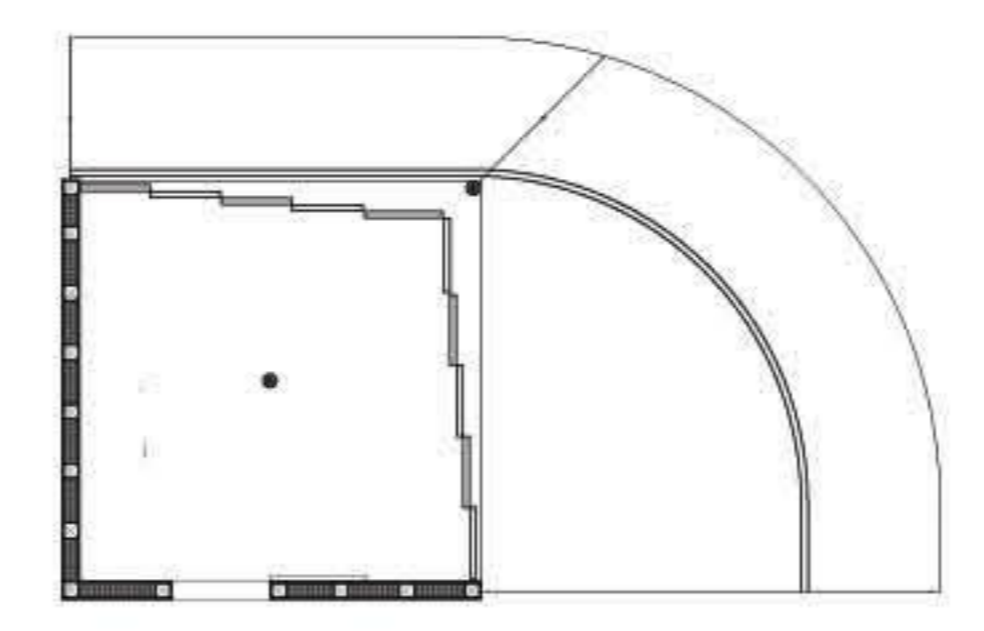


1/50 地階平面図

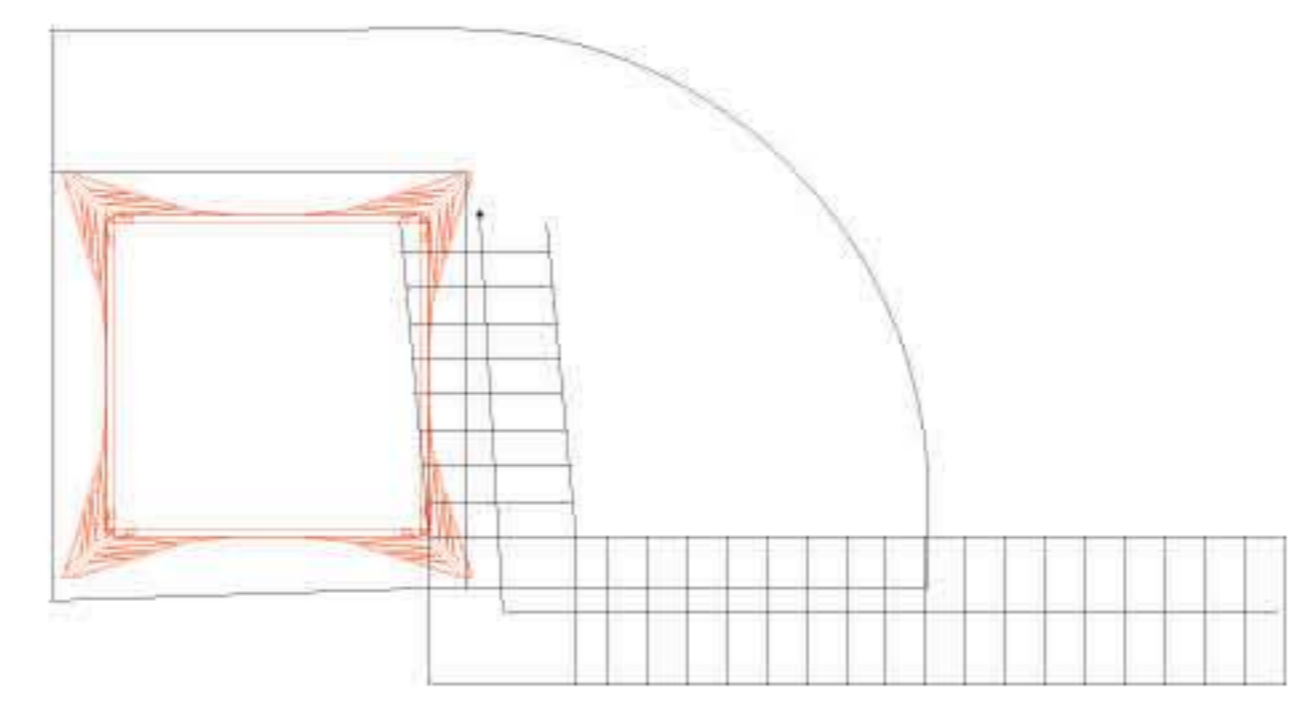


1/30 断面図

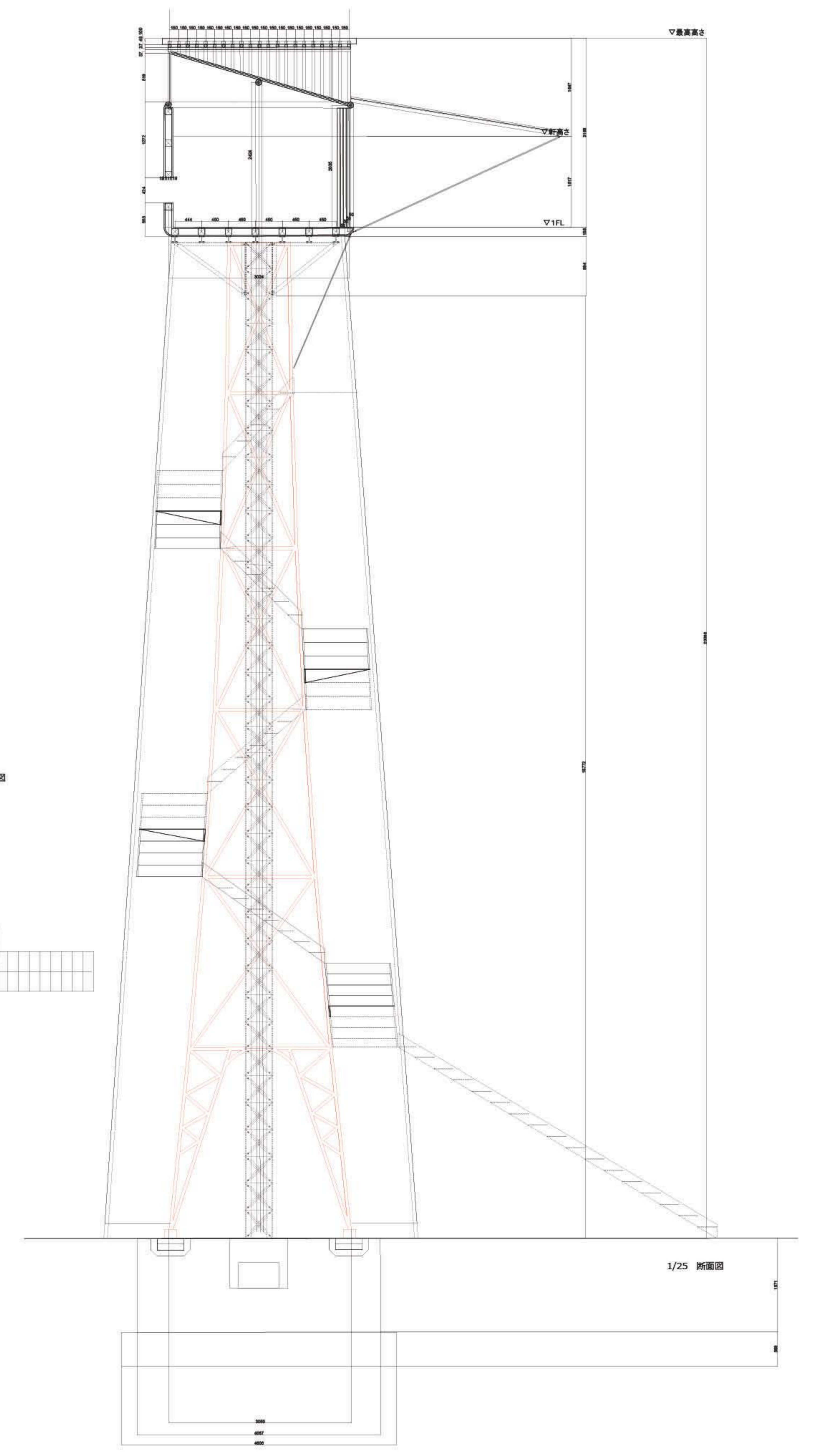
月楼庵



1/50 塔樓部平面圖

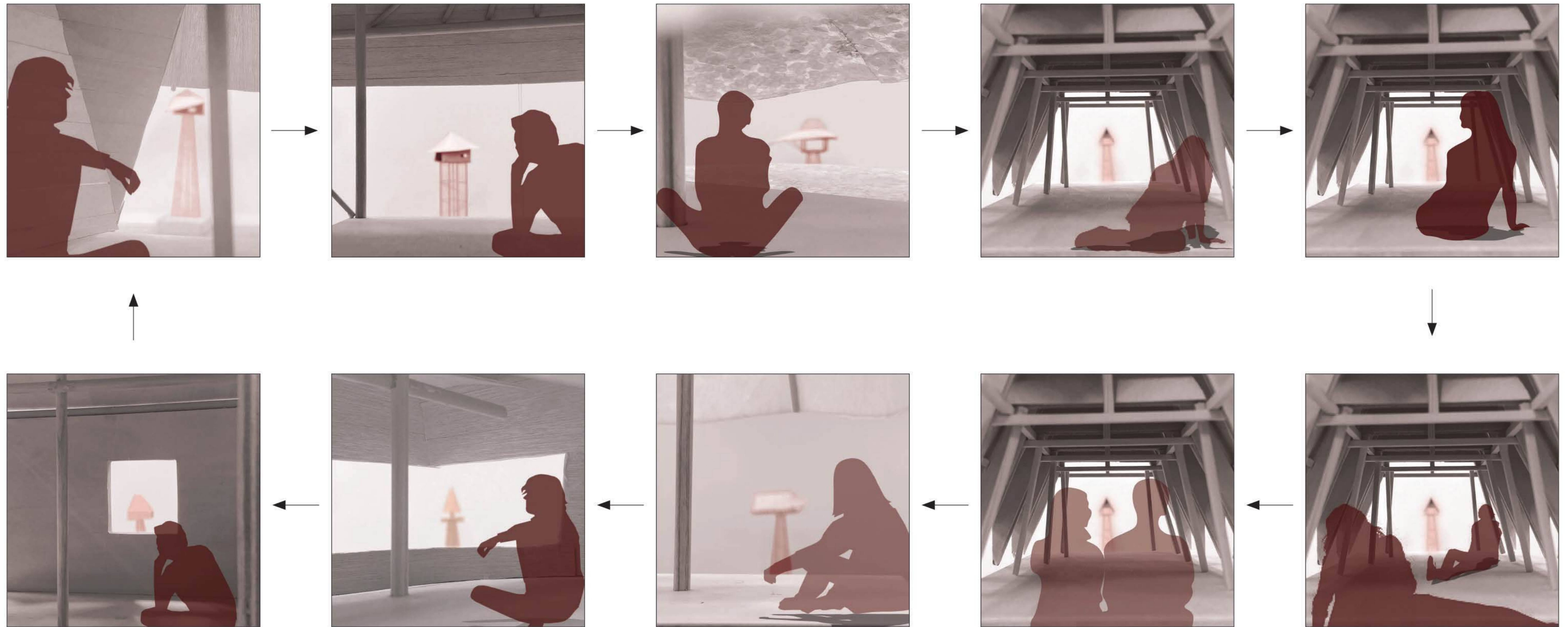


1/50 地層平面圖



1/25 断面圖

10 塔の火の見櫓のつながり



各 10 塔の櫓はノキやマドによって視覚的なつながりを認識できる。

10 塔の火の見櫓の模型



各櫓実際に同じような素材を模型に使用することでイマジナリー性を強めている

Cultural winery

Sustainable of track

矢野晃佑

Design requirements

Cultural Winery

①

世界的な変化の中心には、都会の忙しさがゆっくりとした、より親密なペースに変わる場所があります。そこでは、小さな町や田園風景で魅力的なルネッサンスが起こっています。常に本物とつながりを求める若い世代は、これらの絵のような場所の魅力を再発見し、それらを人気のある文化の避難所や理想的なバケーションの隠れ家に変えています。

②

これらの魅力的な施設は、上質なワインを味わったり新鮮な農産物を楽しんだりする場所にとどまらず、文化、音楽、テイスティング、そして実践的な農業の冒険を織り交ぜた体験のハブとして進化しています。 ” 文化的ワイナリー ” とは、新しい味の概念を想像することであり、アート、文化、伝統が一つのプロジェクトで結集する空間です。

③

このコンペの目標は、既存の施設を補完し、歴史に浸透した空間で現代的な体験を提供できる新しい建物を作ることであり、レジャーやイベント、自然が調和して共存する唯一無二のワイナリーです。

Site



このプロジェクトはポデーレ・フェデスピーナ滞在の方法を再定義する可能性があります。 ” 文化的ワイナリー ” は、クラシックなテイastingスペースを超え、ゲストや訪問者が歴史と自然に 360 度没頭できる新しいコンセプトを設計することを目指しています。

この挑戦は、既存の複合施設の延長として機能するだけでなく、リラックス、食事、仕事、学習など、さまざまな種類の活動を組み合わせることができる新しい独立した構造を設計することです。 同時に、新しい建物は小規模なイベントの開催に適したスペースを備えている必要があります。劇場の公演、音楽コンサート、映画上映、読書会、アート展など。つまり、ルニジャーナのぶどう畑に没入した多機能になるべきとする。

訪問者が時間を過ごし、製品を購入し、食事を楽しんだり、ワイン作りのプロセスを深く掘り下げたりする機会を提供する現代的な本部です。

改修プログラムの一環として、景観価値の高いスペースを回復して再利用するために、特定の既存のインフラ要素を撤去することが考えられています。 この場合、歴史的な家の東に位置する電柱は、複合施設の外に再配置され、新しい建物の配置にその展望台地が利用できるようになります。 また、敷地の北部に位置し、プロジェクトエリアに隣接する土地の一部が、ぶどう畑の拡張に充てられます。

Site detail Photo



Theme

私たちの文化的ワイナリーの主な目標は、生活の一部としてワイナリーを調和させる建築を提案する

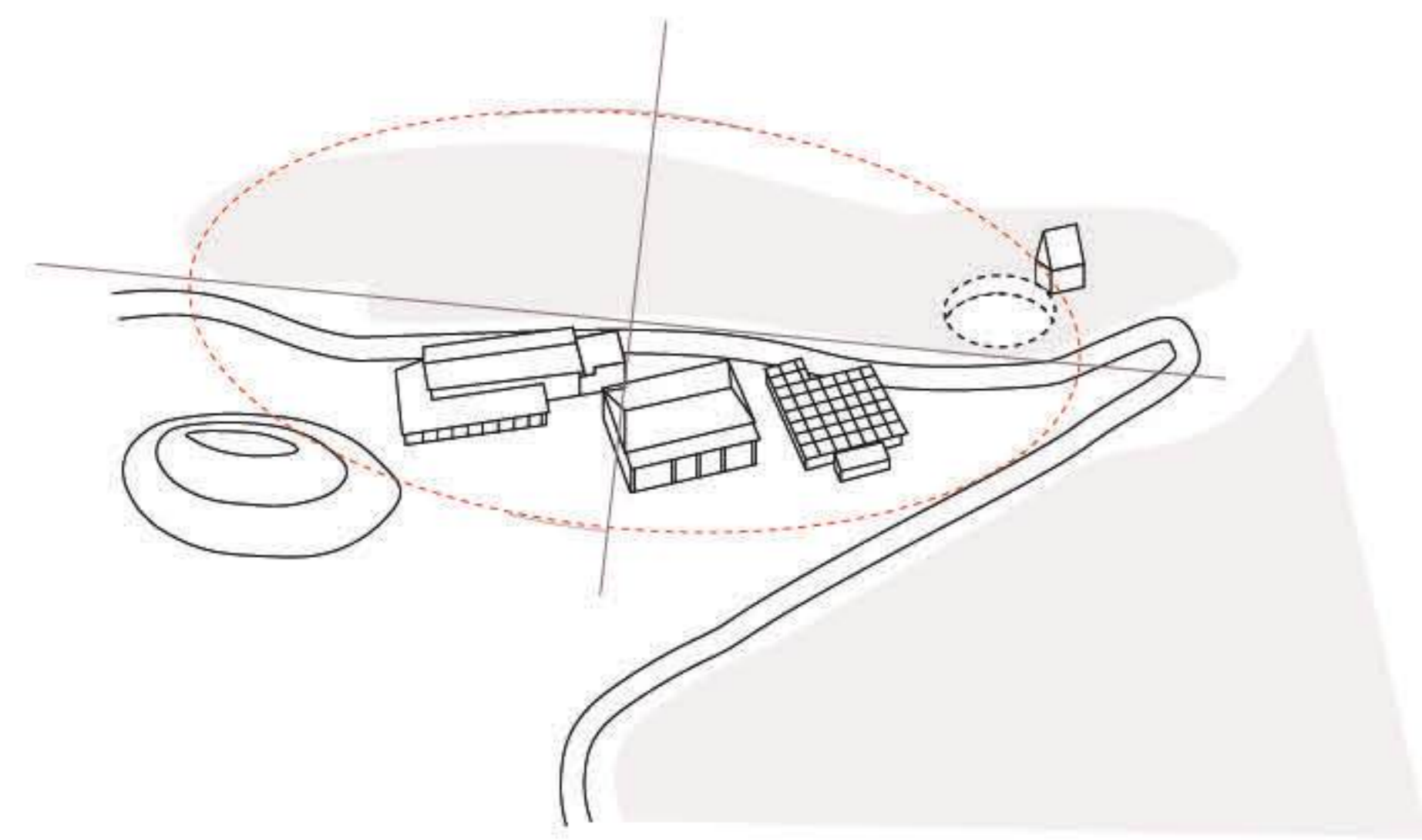
Concept

トスカーナ北部とリグーリア東部の間に位置するルニジアーナは、地理的な複雑さと歴史の豊かさが融合した魅力的な土地です。風光明媚な景観を作り出すボデリ農家の本拠地でもある。私たちは、この土地に眠る何世紀にもわたる伝統の不朽の物語を広げる。ここでは、チャペル、ワイナリー、景観という3つの異なる要素を組み合わせることで、イタリア生活の源泉を文化的に拡張する。ワイナリーと既存の農家をつなぐランドスケープは、外部からの訪問者のための多様なテーブルとなり、ワイン、生活、食の体験を更新する。チャペルとワイナリーをつなぐ空間構成は、祈りの形を広げ、自然と融合する文化ホールとして視覚的に機能する。

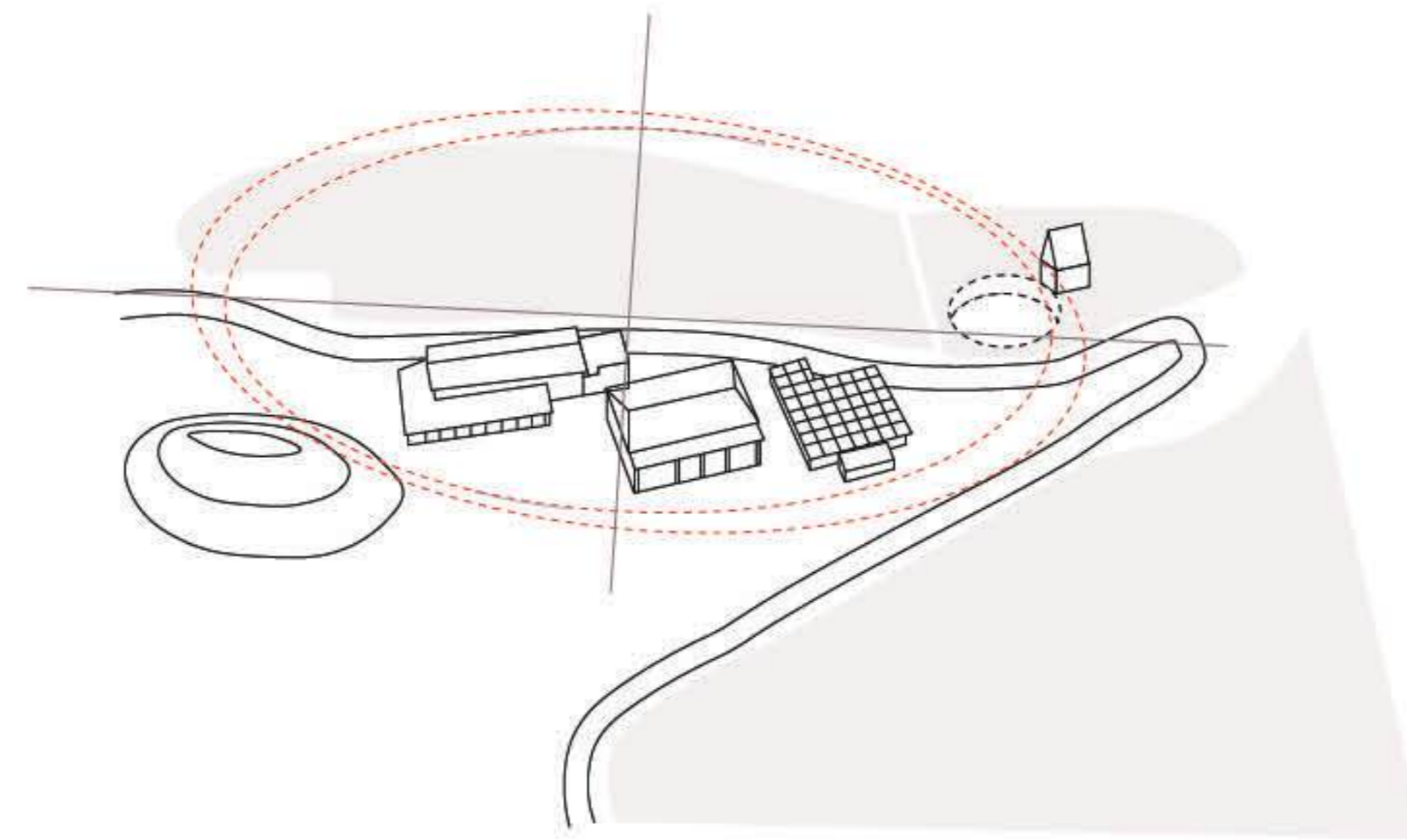


Sustainable track

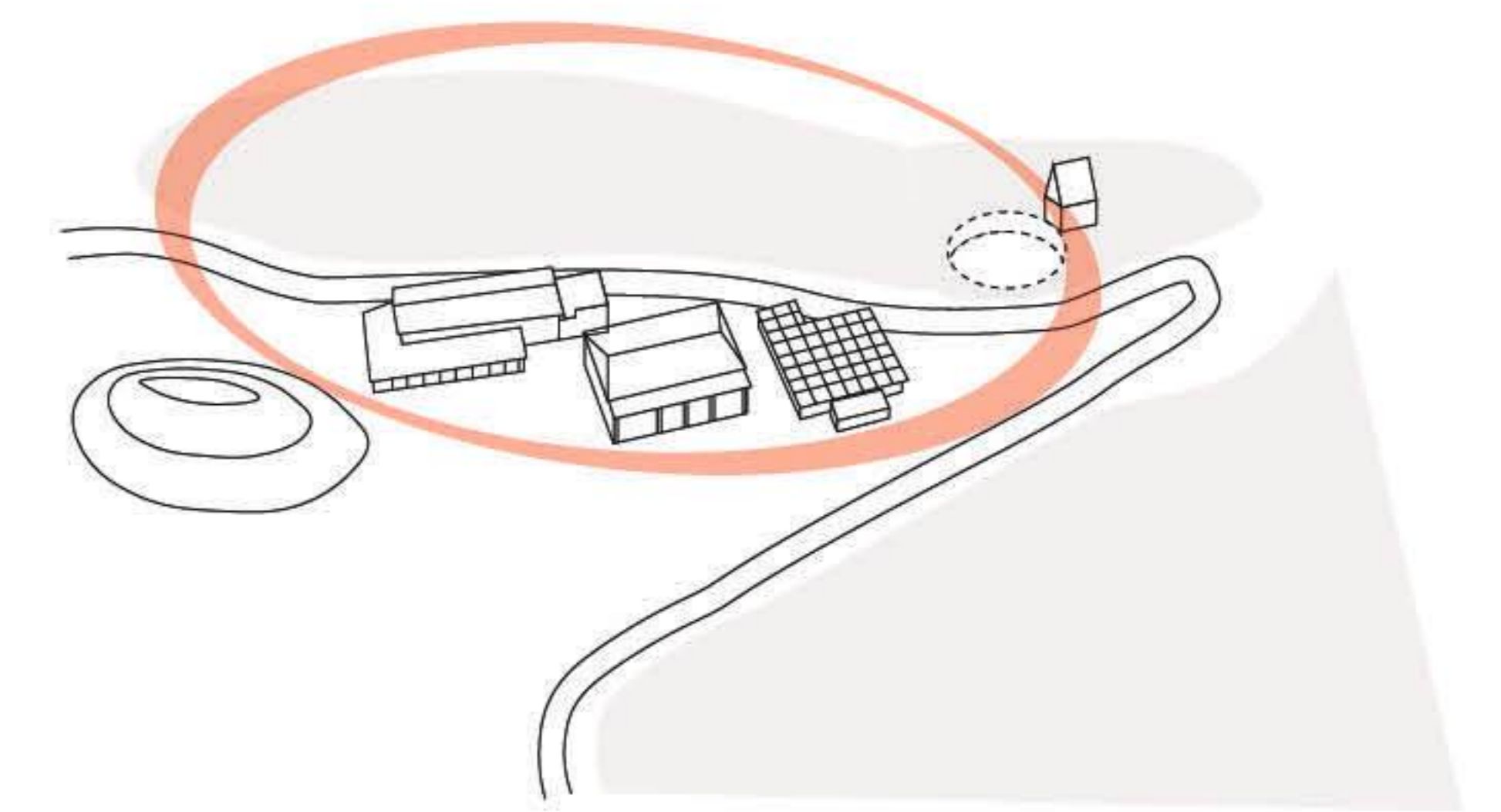
Design Diagram 設計ダイアグラム



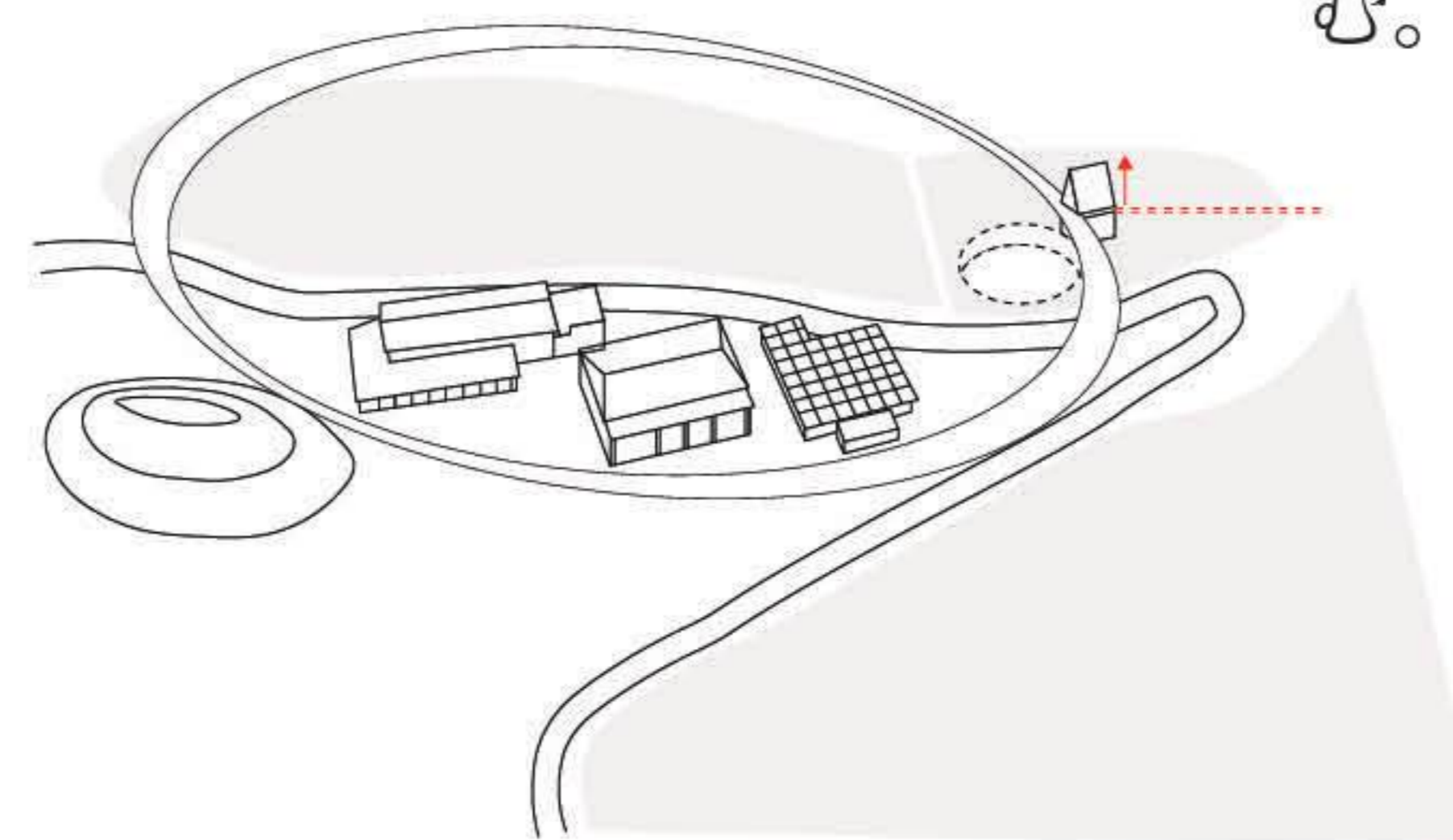
ステップ 1
チャペルとワイナリーという 2 つの異なる個性を楕円で囲む。



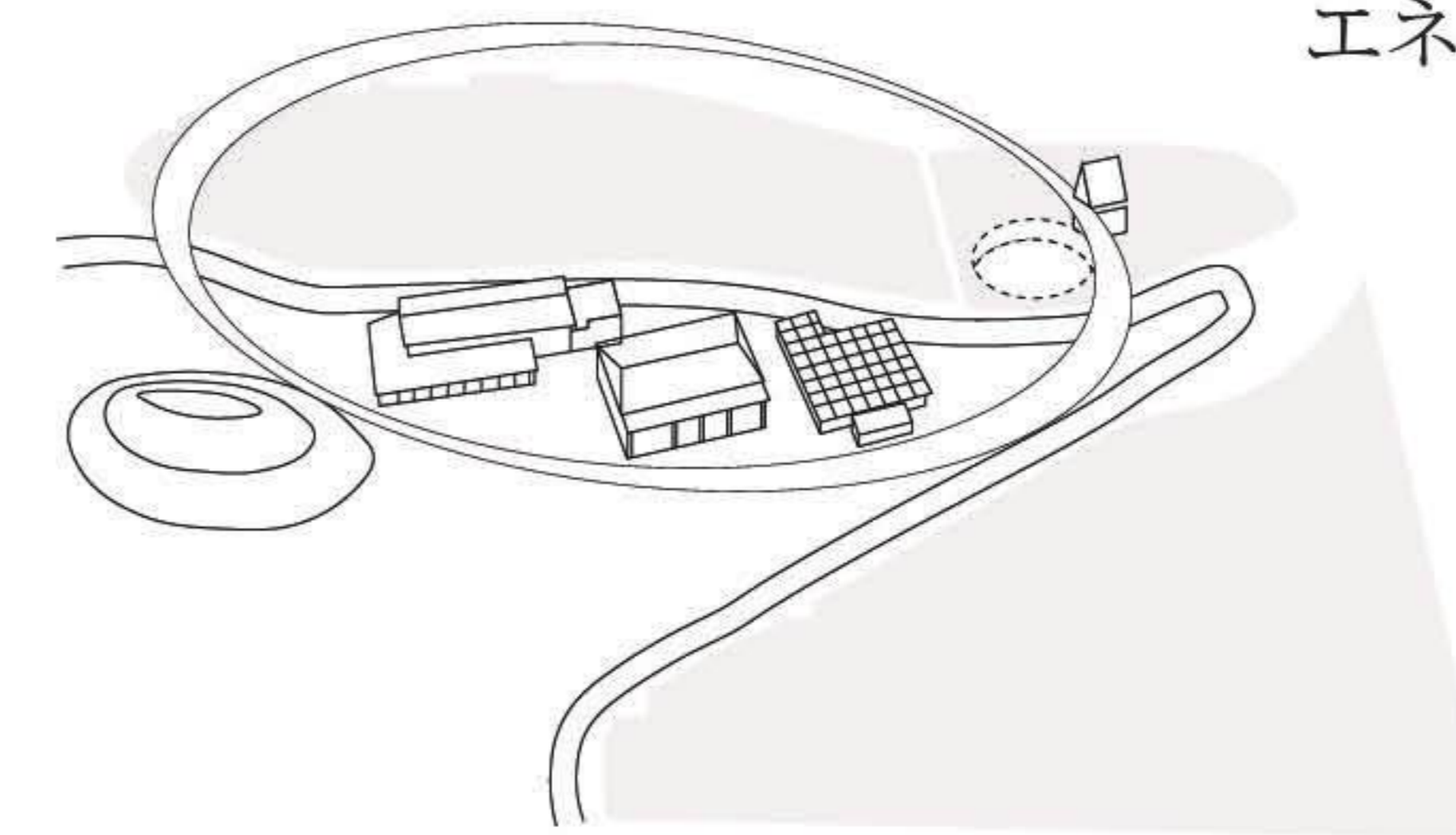
ステップ 2
角度の異なる楕円を内接円として囲む。



ステップ 3
2 つの楕円は内接円、外接円としてエネルギーを持つ。



ステップ 4。
エネルギーはチャペルの開口部として変容し、ポデーレにトラックとして戻る。

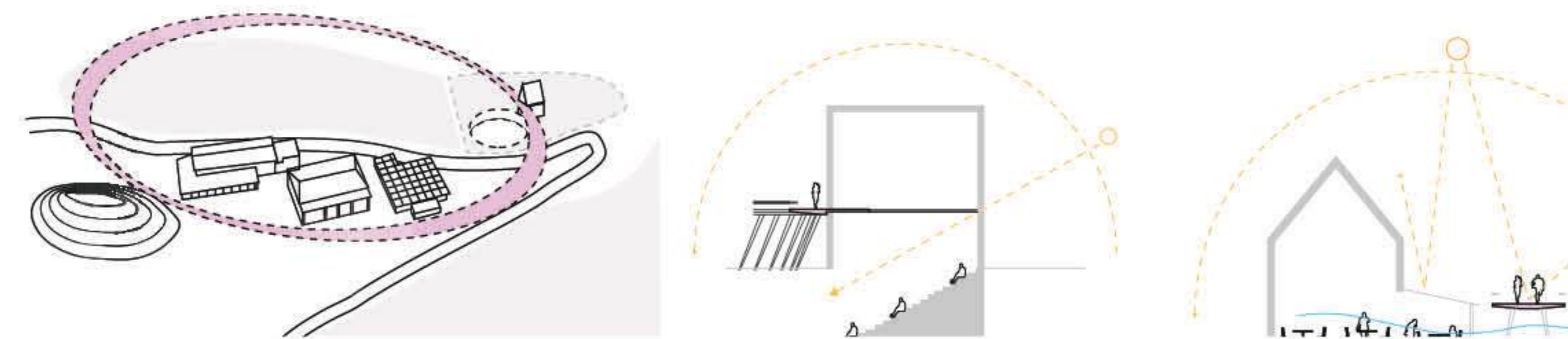


ステップ 5
このコースは、既存の建物、ワイナリーとチャペル、そして 3 つの個性を統合し、豊かな体験を提供する。

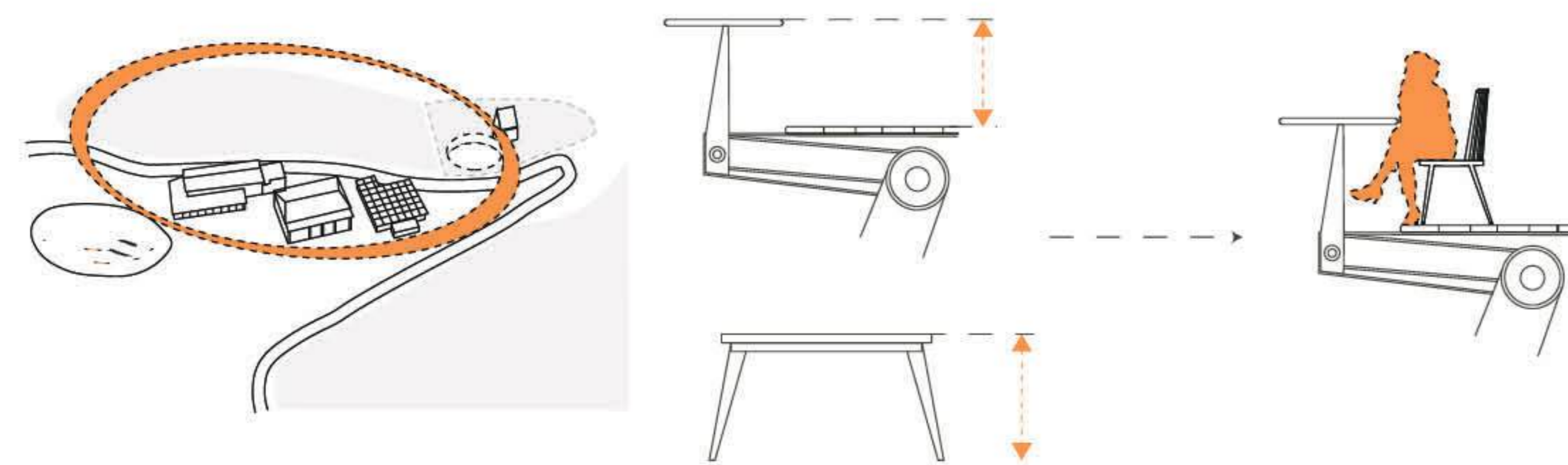
Land scape Diagam ランドスケープダイアグラム



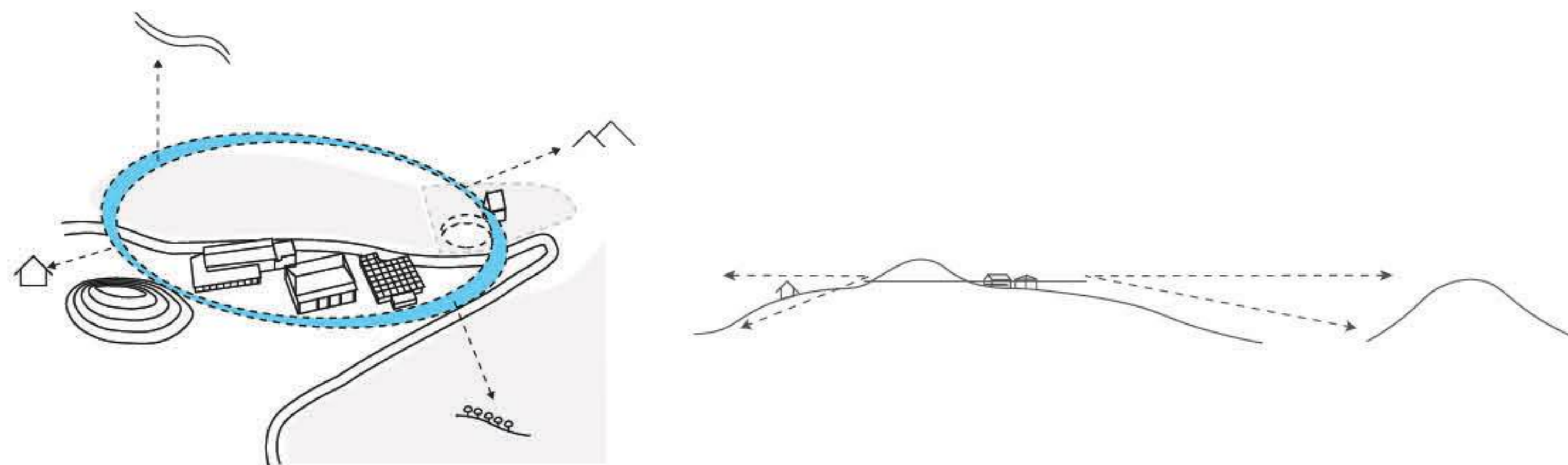
持続可能なトラックはランニングコースとして、また周辺地域の遊び場として機能する。子どもからお年寄りまでが体を動かし、健康に育つことができる。トラックは1周約200メートルで、適度な距離がある。ランニングだけでなく、自転車やウォーキングにも使える。ランニングをしたことがある人は、走りやすさをアピールするクッション材を使うことで、必要以上の負荷がかからない。



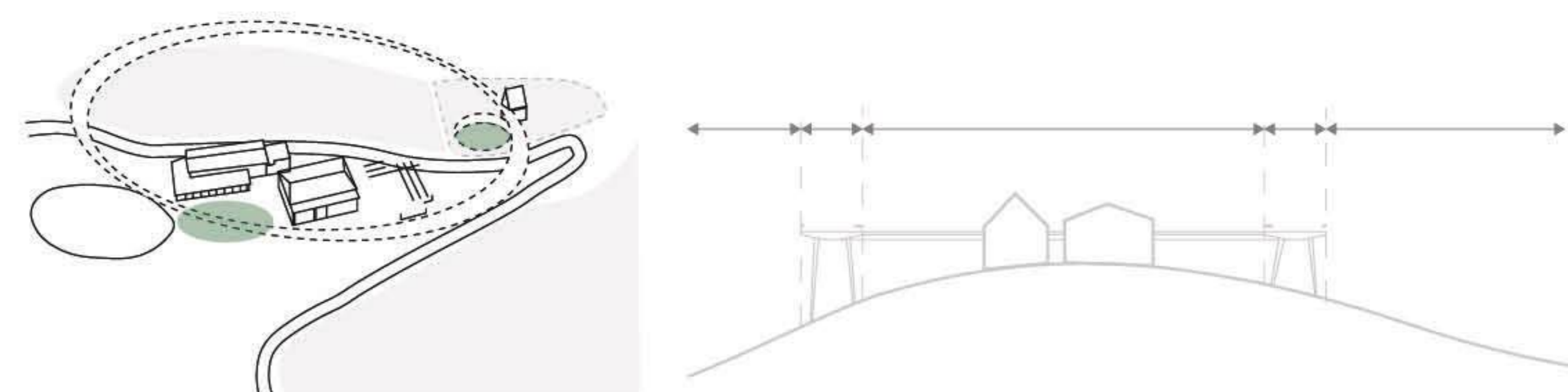
サステイナブル・トラックは一日中過ごすことができる。チャペル内部を神秘的な空間に変えるスリットは、サステイナブル・トラックとの衝突の結果である。したがって、サステイナビリティ・トラックの利用者は、日常生活の一部としてチャペルと自然に機能することになる。サステイナブル・トラックはまた、既存の中間エリアとして拡張し、ダイニング、コミュニティ、アクション・スペースへと変化する。祈り、食事、睡眠は新しい生活様式となり、伝統となる。



サステイナブル・トラックの外にも中にも、テーブルのような手すりがある。テーブルは運動中の休憩場所として、またコミュニケーションの舞台として機能する。テーブルの高さは700mmを基本としており、360度の視界で景色やワインを楽しむことができる。また、テーブルの滑らかな形状は、視線を多様化させることでワインの見え方に変化をもたらしている。

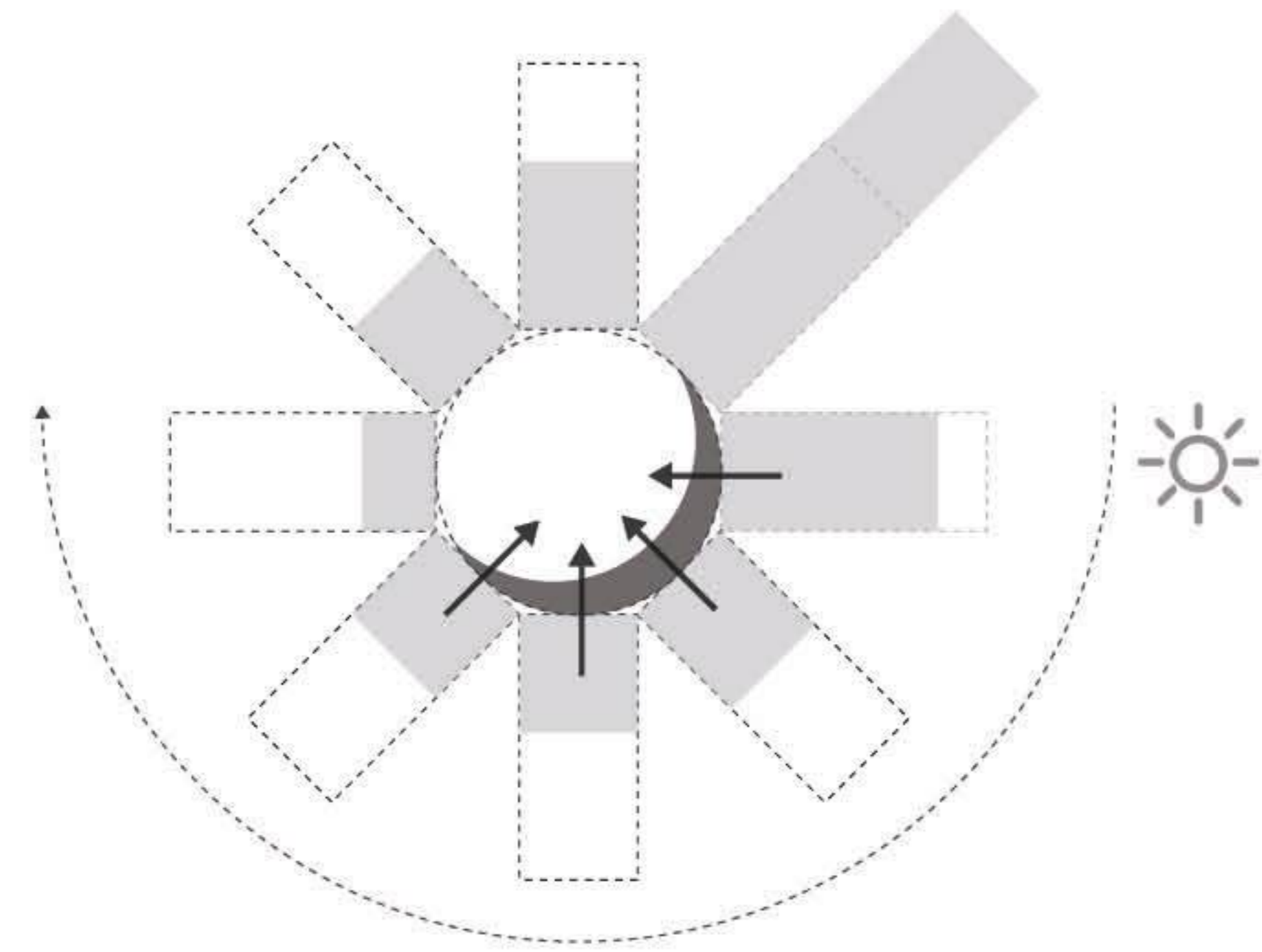


サステイナブル・トラックの高さは、風光明媚な丘によって決まる。そのため、軌道の円周の中でも、展望台として機能する場所、ワイナリーとつながる場所、屋上など人々がくつろげる場所が、豊かな伝統を持つ風景と360度つながるように設計されている。こうして、昔ながらの伝統が現代のトピックとして機能することになる。

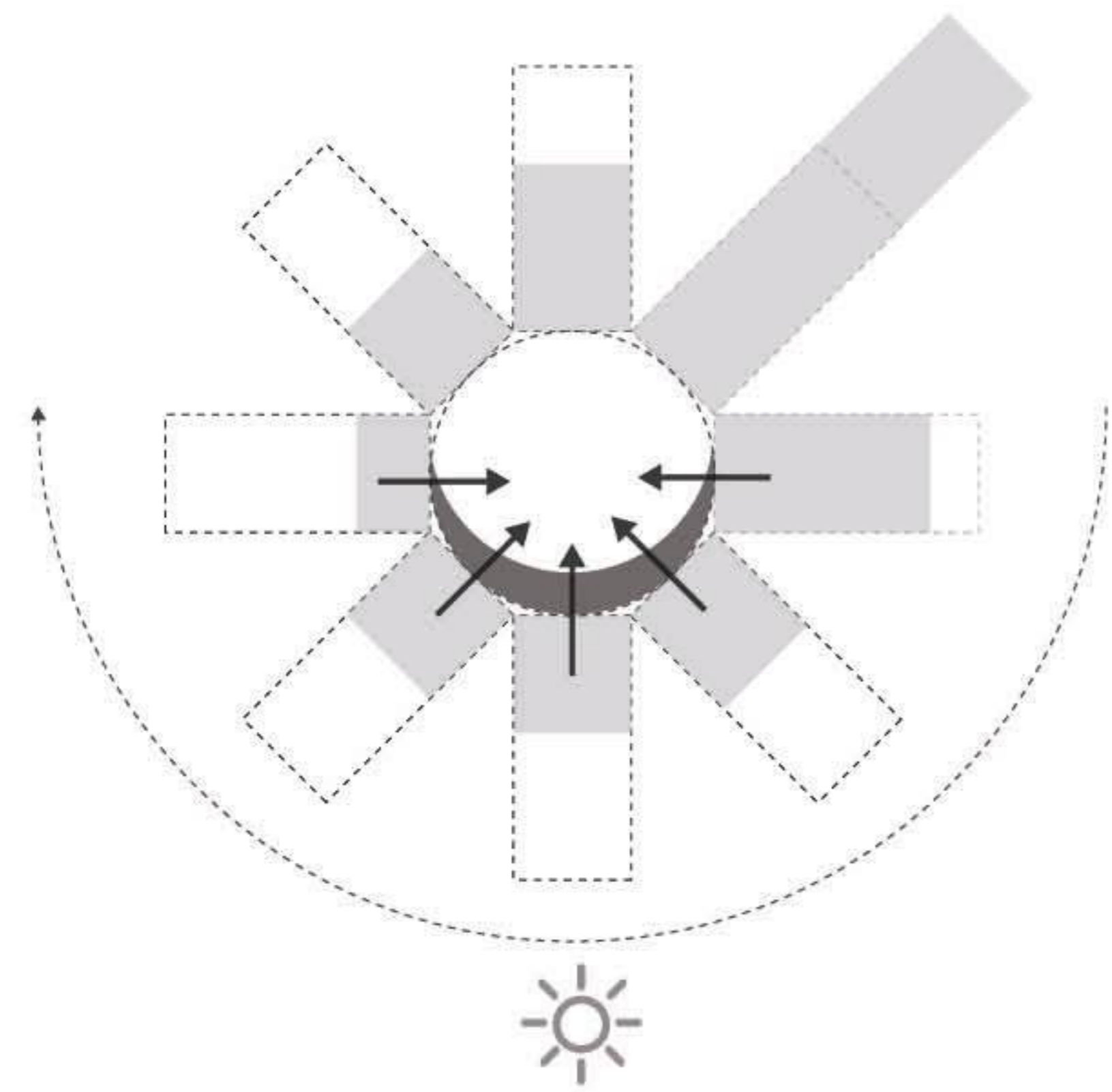
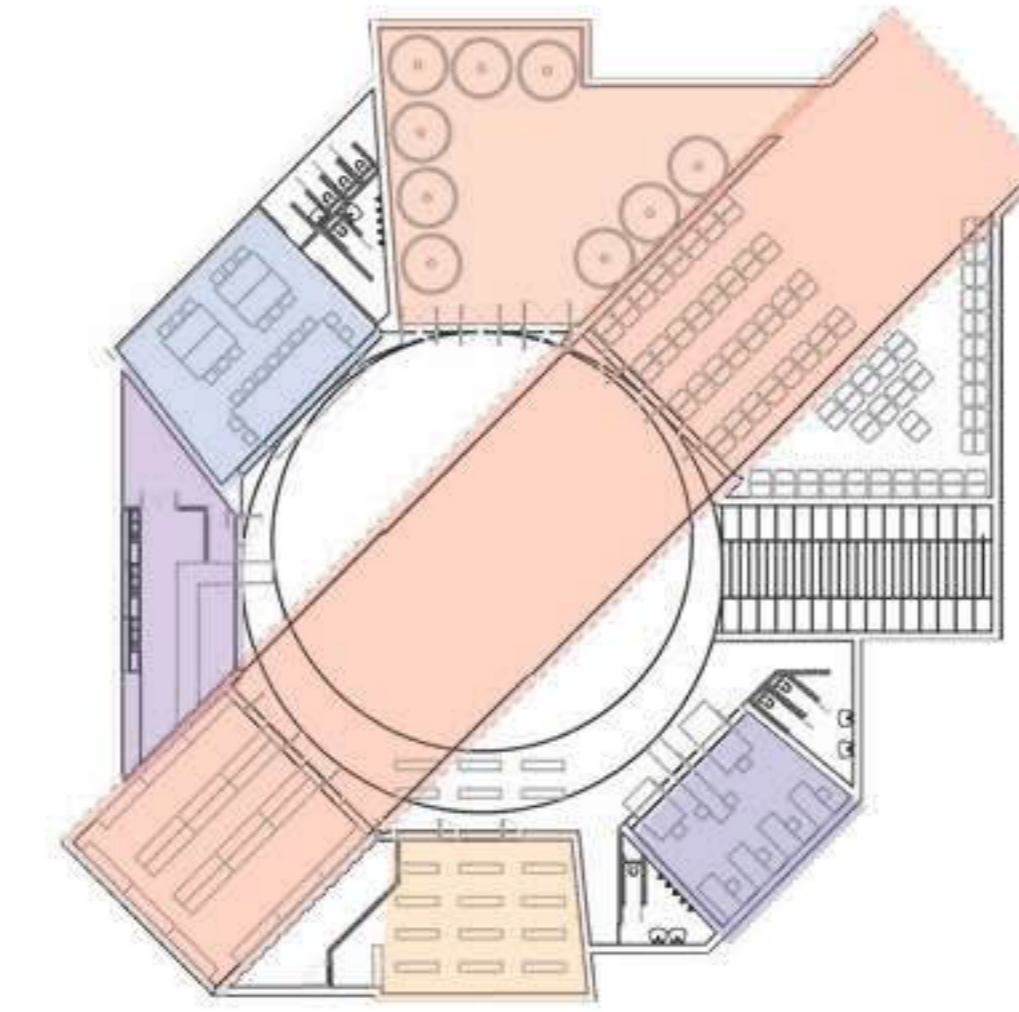


サステイナブル・トラックは、既存のワイナリーと新しいワイナリーを取り囲んでいる。2つのワイナリーの間は、小さなスペースとして機能するだけでなく、水平方向に情緒を添える。訪問者、愛好家、家族連れは、水平に変化する景観を楽しみ、ユニークな場所として記憶するだろう。トラックが作り出す小さな空間は、音楽活動やイベント活動に使われ、トラックを通して没入型空間として機能する。

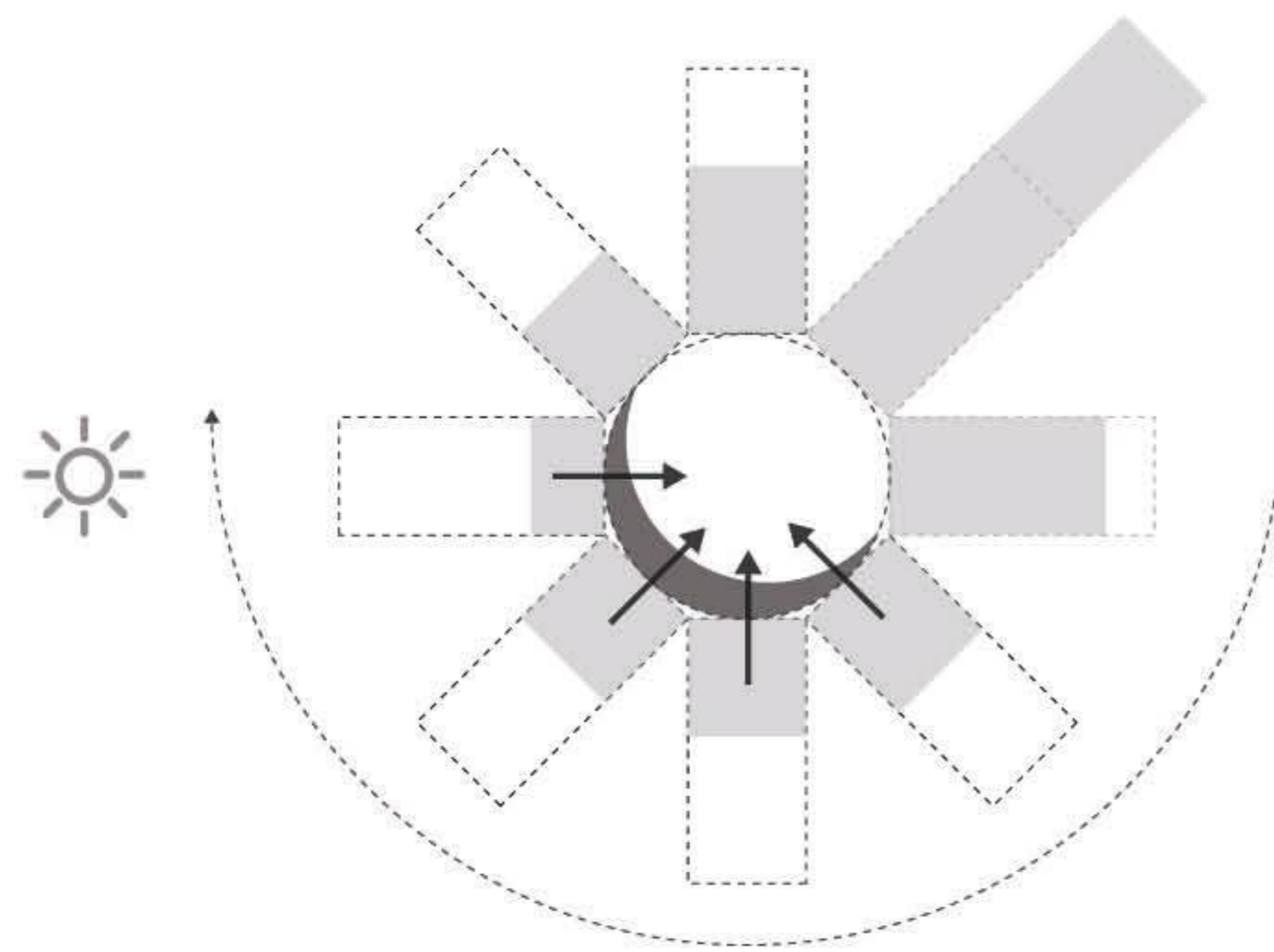
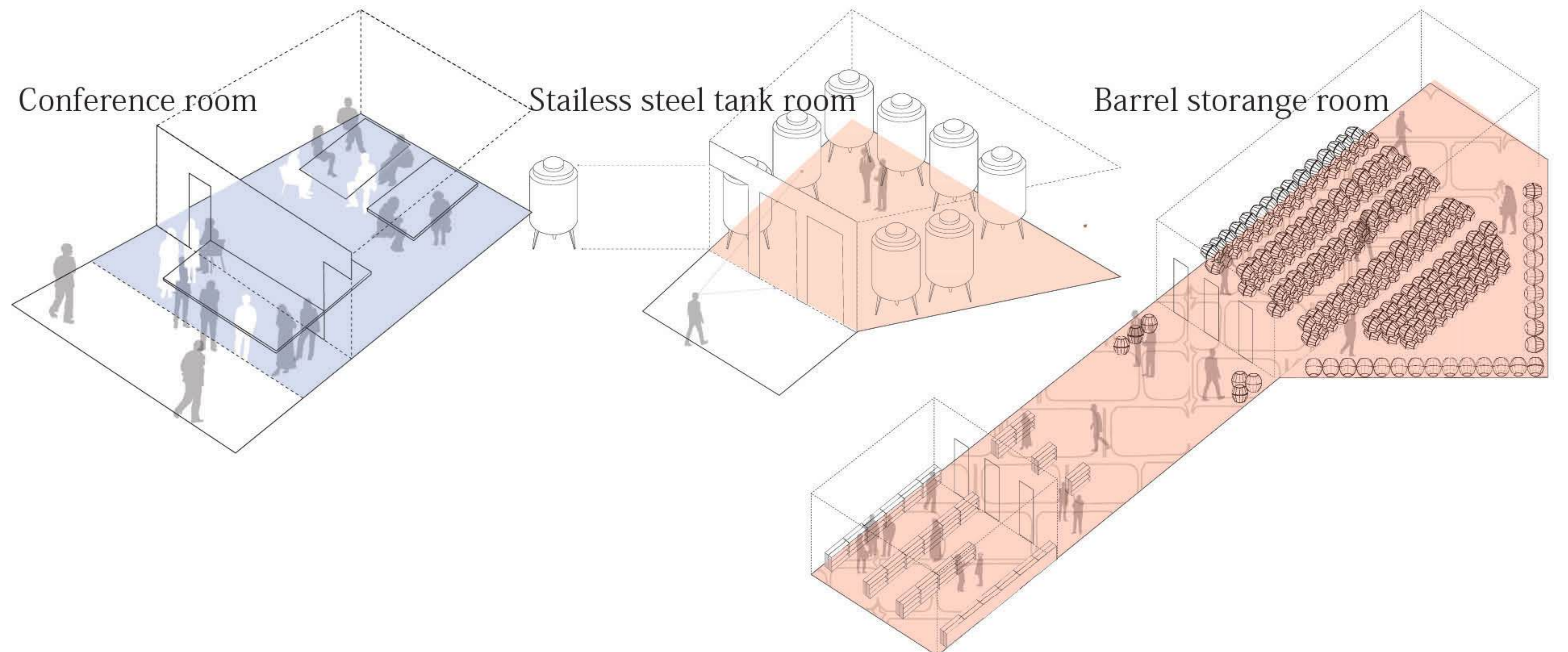
Chapel Diagram チャペルダイアグラム



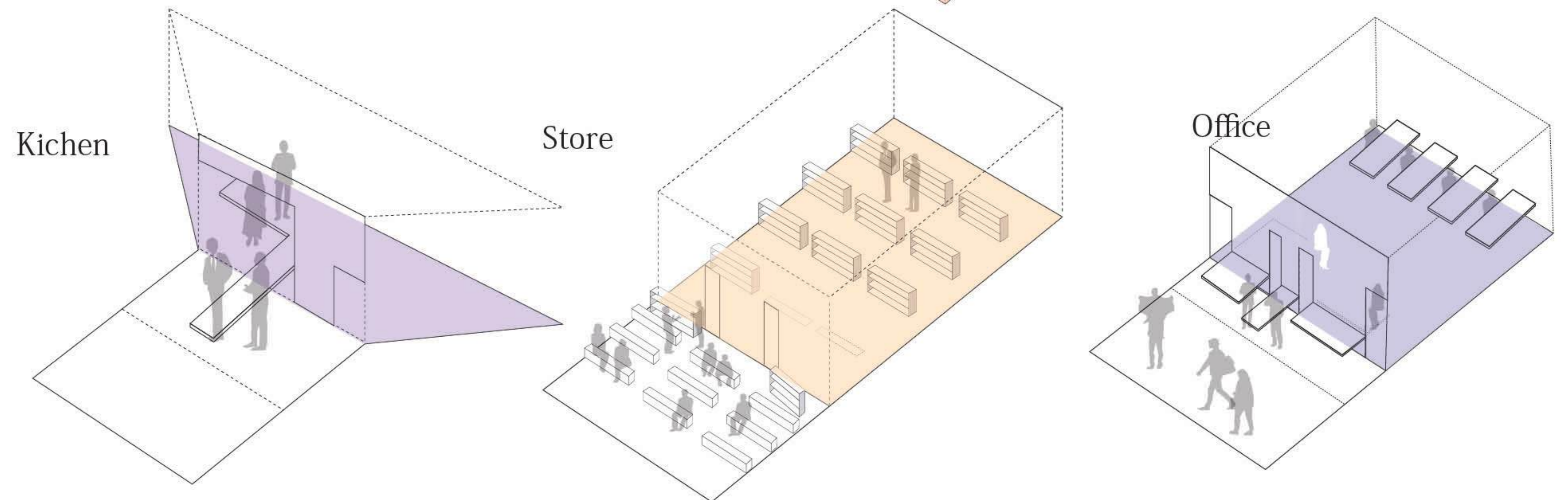
7 : 00

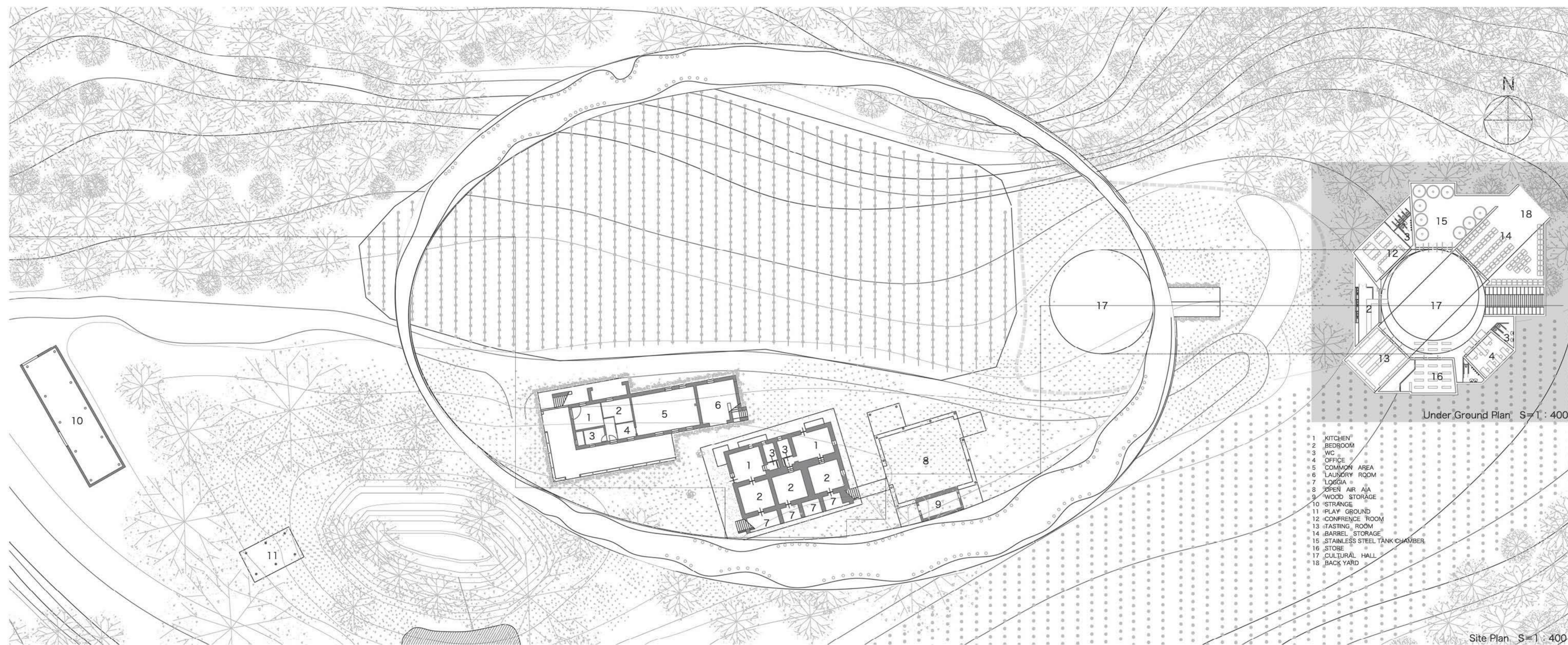


12 : 00

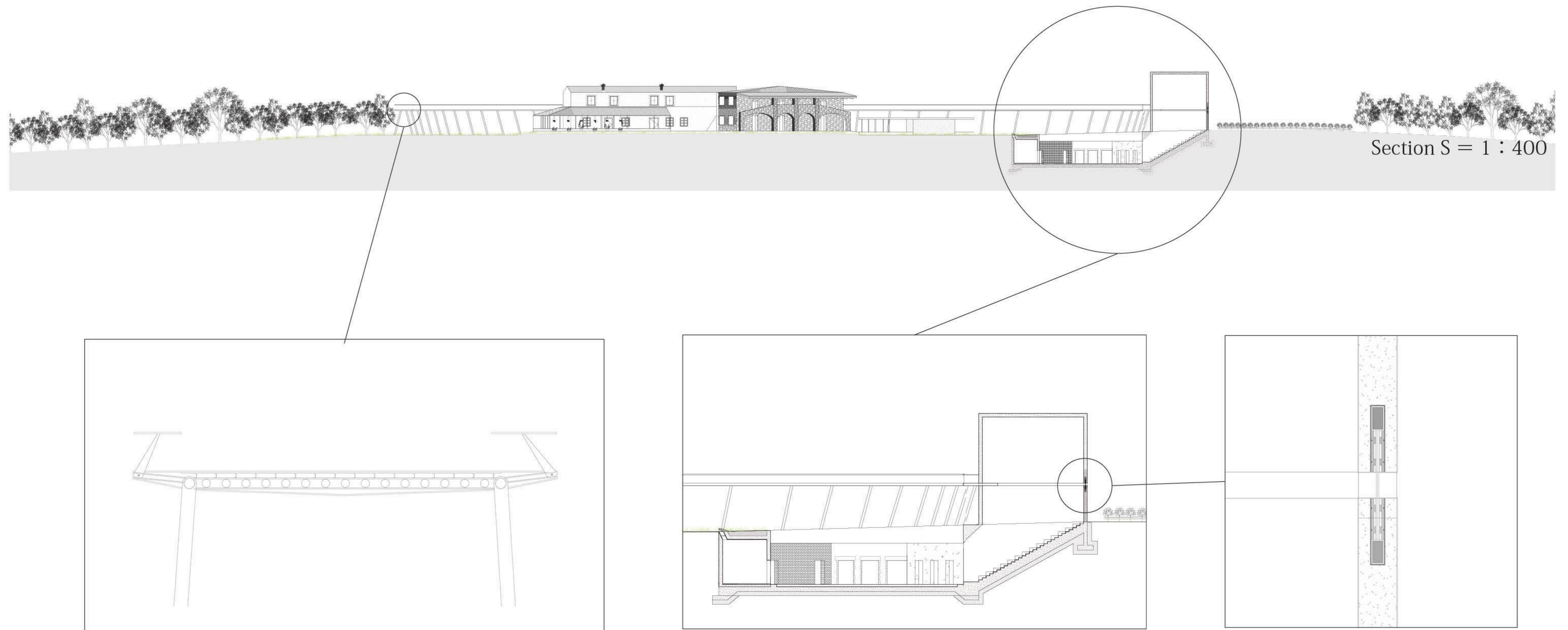


18 : 00





楕円のトラックはイタリアの風景とワイナリーを緩やかに繋げる



ワイナリーはイタリアの都市空間のような広場から各用途に繋がる用デザインされている



トラック場では座りながら食事したり談話したり走ったり様々な昨日に変化する



文化ホールは各用途室がモレダシ様々な人のコミュニティの広場となる



文化ホールは大地と空をつなげることでより風景と関係性を強める。



家具や机が広場にアラワれることで中間領域が生まれる。

相良村川辺川魅力創造事業・交流拠点施設 公募型プロポーザル 相良村の象徴なる交流施設

矢野晃佑
川崎大勇
小堀日菜子

相良村が持つ魅力を生かした空間づくり・相良村の食文化を発信する施設・県産の木材を使用した交流拠点施設と外構計画・一年中利用できる施設・水という地勢を活かした村と交流拠点の接続についての提案

相良村の象徴となる交流拠点施設

私たちは、相良村の歴史・景観・文化を生かし、地域内外の皆さんがいつでも利用できる施設を提案し、相良村の地域活性化に繋がる川辺川魅力創造事業としての交流拠点づくりに努めます。

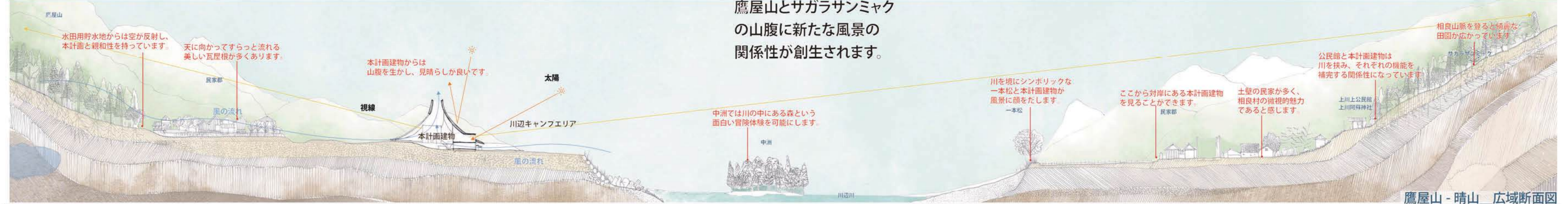


0 設計コンセプト及び復興の象徴となるような魅力ある施設の工夫：仕様書3設計条件①
新たな風景を創生する

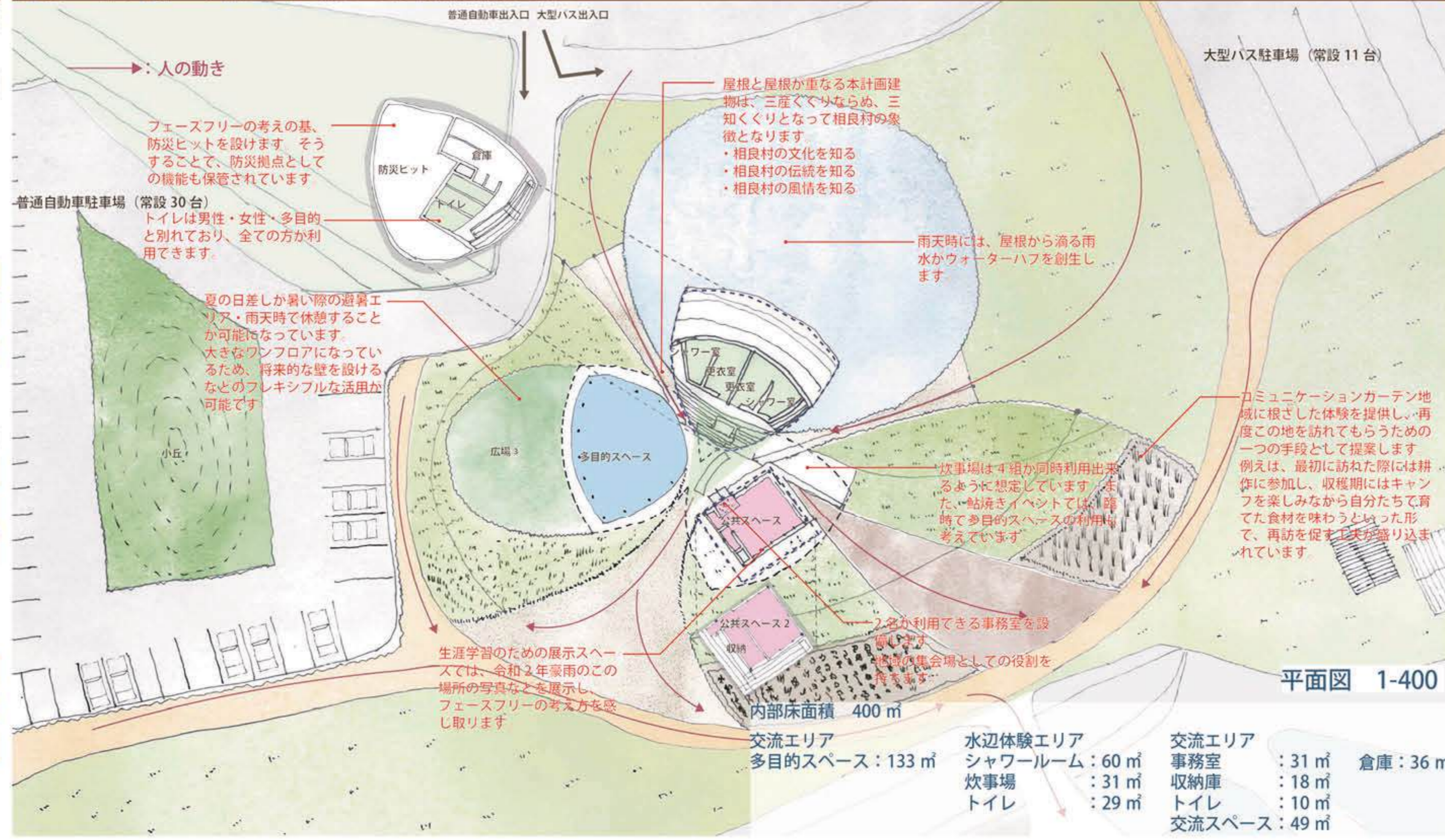
私たちは、本プロジェクトの設計を通して相良村の内側にある微視的魅力と外側にある巨視的魅力を最大限に引き出すとともに、自然災害と隣り合わせの環境において生涯学習のための場所を創造する役目があると考えました。その役割を、以下の3つのコンセプトを基に実現します。

- a. 鷹屋山と晴山などの山脈に囲まれた球磨盆地、誰もが心馳せる原風景を持つ田畑と日本一の清流である川辺川に一番近くで触れ合える中洲など相良村が持つ自然の恵みを生かした新たな風景の一部になる拠点づくりと相良村の四浦和紙、相良茶など川辺川を介した地産物の発信を行う計画とします。
- b. 相良村の交流拠点事業が掲げる「ひと・もの・こと」から成立する空間づくり。災害に対して「適切に」備え、古くからこの村は雨や川など水に関係が多いため、この村の象徴となるような「水と共生する建築」の在り方を提案します。
- c. 本計画が、敷地周辺に建つ建物などの素材感に寄せることで、周囲との関係性を持って建築を成立させる・周囲に溶け込む建築で地域の皆さんのハブベースになるとともに観光に訪れた方々へまたここへ戻ってくる旅となるための暖かみのある建築を目指します。

5 地域や民間等と連携し成長させていく施設とし、拡張性を持たせた計画の工夫：仕様書2計画条件④
川辺川を境に交流拠点と周辺地域との関係性

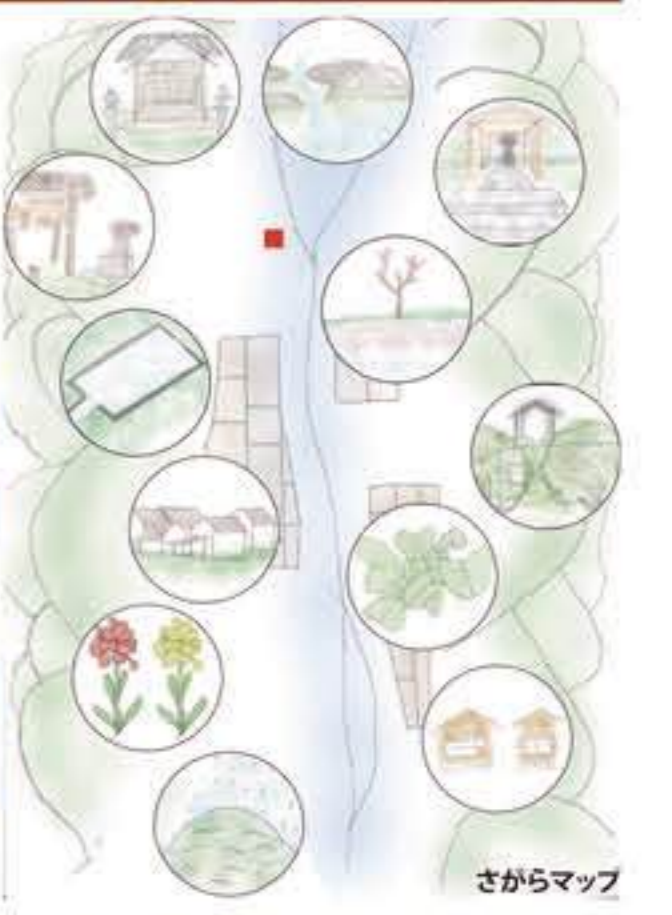


建築基準法、消防法等に適合した設計・交流拠点の地域交流や維持、継続性を考慮した平面計画の工夫：仕様書3設計条件②、プロポーザルの内容(2)①
内部・半外部・外部が連続する交流拠点施設



1 敷地リサーチを基に相良村に潜む魅力を発信する工夫
本プロジェクトに影響を与える相良パターン

相良村の魅了には川辺川を挟むように多くのパタンが潜んでいます。このさからマップにあるように本計画地は、山腹に囲まれた自然との相性が良い村であると感じています。そこで、相良村の風土に沿い、佇むようにして豊かな隠れ里を受け継いでいきたいと考えています。福寿草や雨との関係性、水田の水張りなど本計画に密かにこの村のアイデンティティを忍ばせ、村としての一体感を生むように工夫します。



2 地域の未来へつながる取り組みに対して相良村の恵みを活かす工夫
食文化を通じて地域の連携を図り、村の経済を潤す

相良村は自然との相性の良さを基に、多くの特産品を抱える食文化豊かな村です。そこで、本計画では食を中心としたネットワークを新たに創生したいと考えております。その結果、特産品のブランド力の向上と持続可能な村づくりに伴うさからムーブの発展に繋げていくことを可能にします。



3 交流拠点施設の地域交流や維持継続を考慮した平面計画の工夫：プロポーザルの内容(2)①
交流拠点施設が人々の生活コアに参入していく

拠点施設としての本計画建物は、提案に散在する多くの機能や地域の方々との接続を補完する重要な役割を果たします。コミュニティガーデンの運営は、この地の気候や栽培に精通した方々の知識や経験を活用し、シルバー人材育成センターなどを通じて参加を募り、地域の皆様の協力を得て、持続可能な形で維持していく考えです。また、本交流拠点施設は環境保全に関する生涯学習の場としてもこの施設を活用できます。毎年の台風や令和2年の豪雨などで日常的に災害と隣り合わせの場所です。そこで、災害に対して平常時との区別をなくすという意味であるフェーズフリーの意識を身に付け、利用する全ての方の学習場所になります。

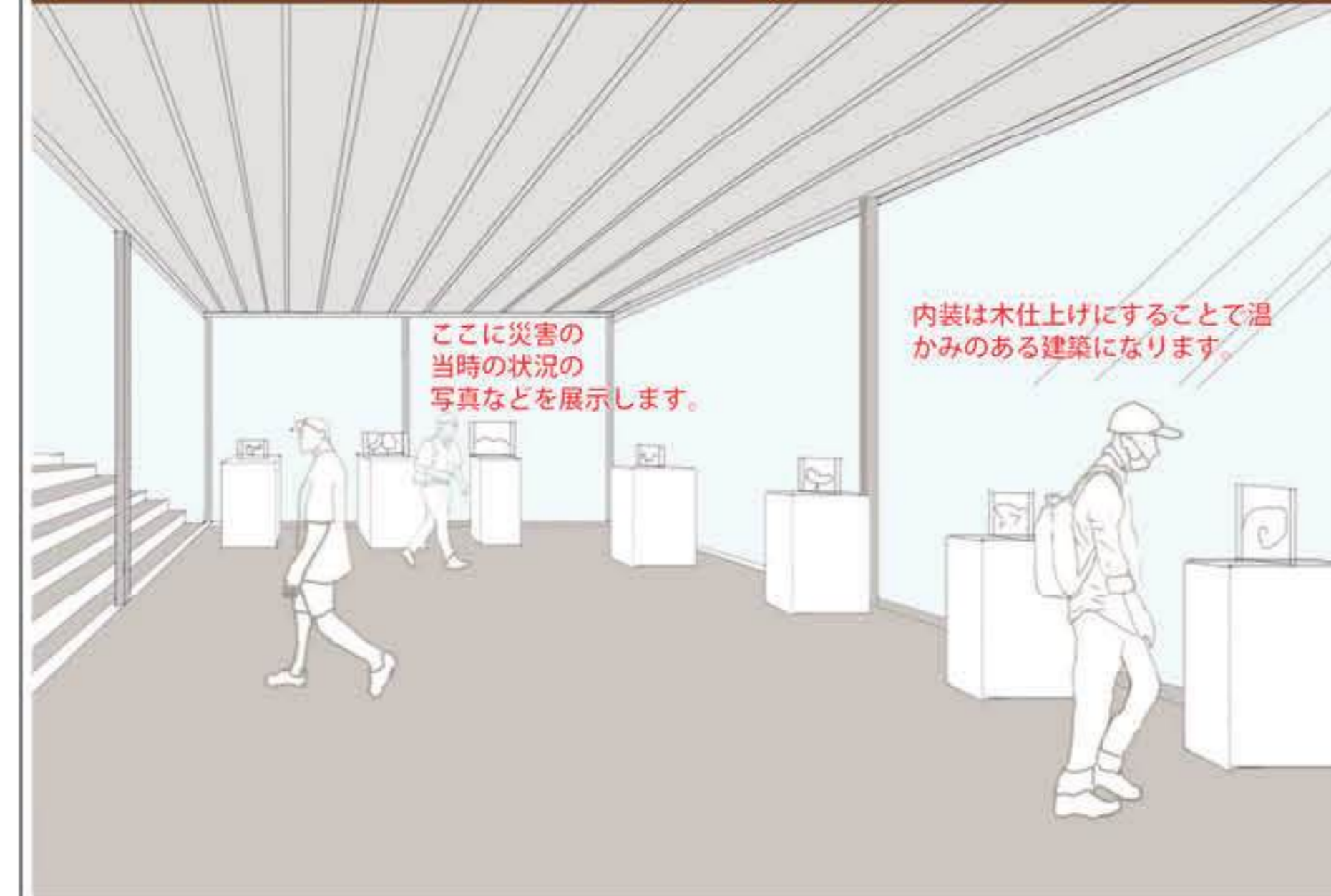
4 熊本県産木材の活用及び構造安全性の確保についての工夫：プロポーザルの内容(2)②
意匠計画と構造計画の一体化した計画に関して

本計画の主要部材には熊本県産のスギをメインとする木造構造を採用しました。また、屋根は大梁と小梁ともに300×300mmとし、スパンを2～6m以内に収めることでコストや環境に適した架構とします。屋根の構造を支える柱や耐震壁は3つエリアで異なる構造形式を採用しました。



相良村が持つ魅力を生かした空間づくり・相良村の食文化を発信する施設・県産の木材を使用した交流拠点施設と外構計画・一年中利用できる施設・水という地勢を活かした村と交流拠点の接続についての提案

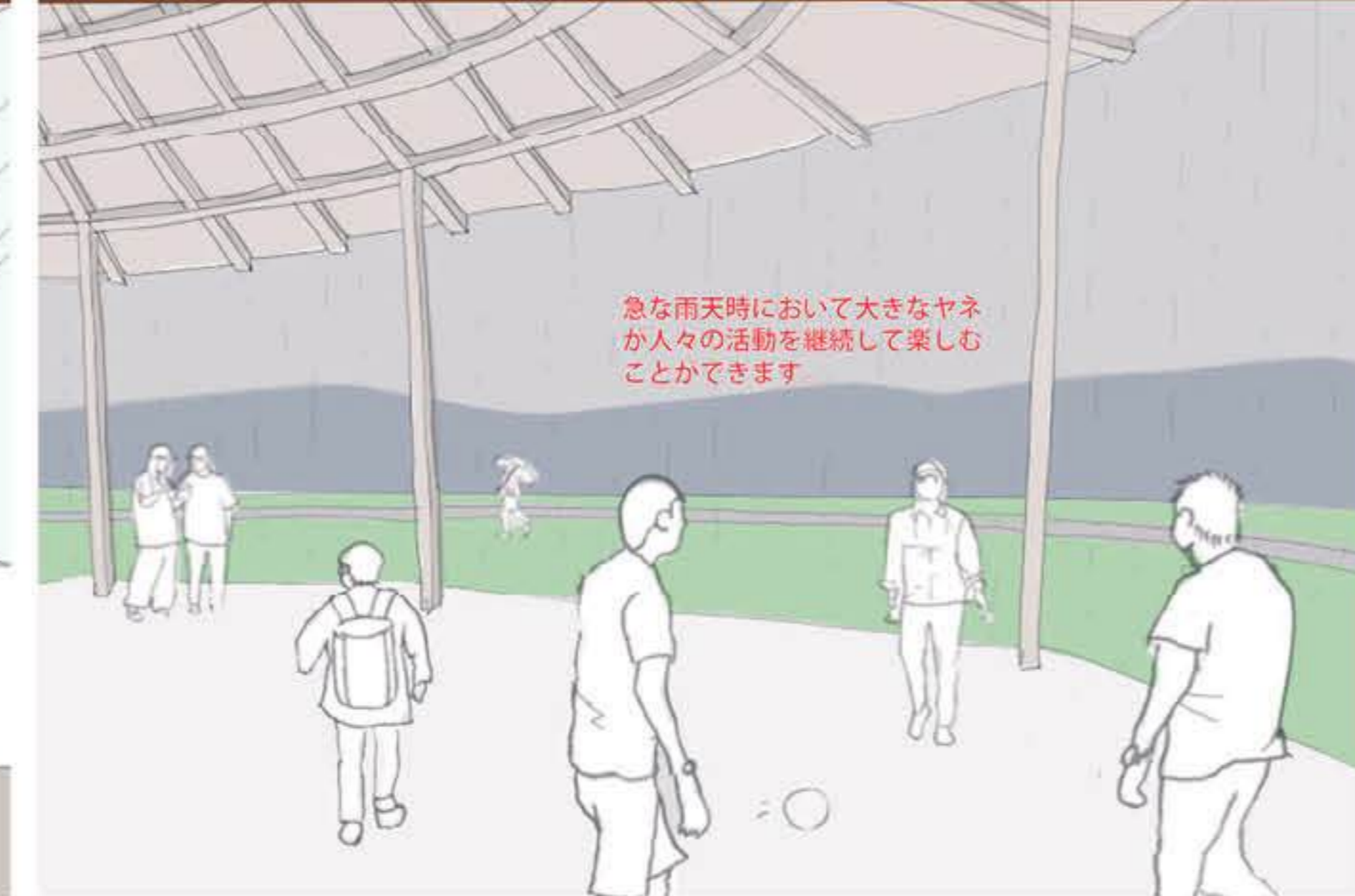
可能な範囲で内装の木質化を積極的に行う工夫：仕様書3設計条件⑥
公共スペース：生涯学習をするための展示



ここに災害の当時の状況の写真を展示します。

内装は木仕上げにすることで温かみのある建物になります。

洪水浸水想定区域に含まれ、災害リスク対策への工夫：仕様書1計画地、設計条件など⑥、3設計条件⑥
多目的スペース：雨天時の利用方法



急な雨天時において大きなヤネが人々の活動を継続して楽しむことができます。

ユニバーサルデザインを前提とした設計の工夫：プロポーザルの内容(2)2⑥、仕様書3設計条件⑥
建物へのアプローチ：バリアフリーの考え方

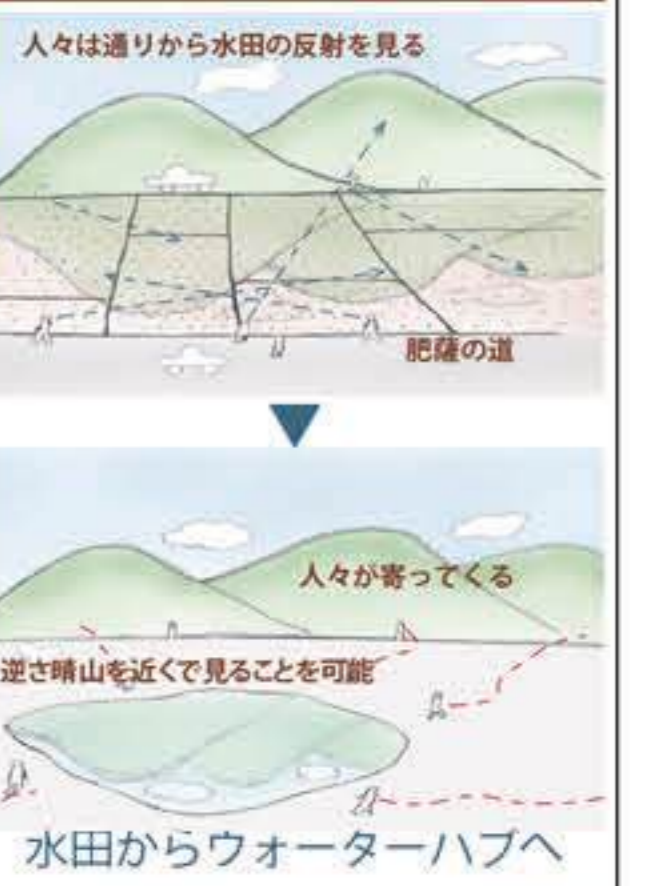


開放感のある半屋外空間が皆さんをお待ちしています。

このサガラヤネをくぐることで相良村を知ることができます。

8 地勢を活かしたアプローチの工夫
田んぼを跨ぎ550年の歴史を紡ぐ

本計画地は元々水田であったことから、この地を本計画において、水と人が集まる場所としての役割を持たせたウォーターハブへと変化させることで、新たな空間の創造と村と交流拠点とのインターフェイスとしての役割を持ちます。また、司馬遼太郎は肥薩という言葉に気に入り、日本で最も豊かな隠れ里といわれることから、私たちは肥薩の道から見えるこの景観を継承すべきであると考えます。



9 地域の皆さんの想いを形にする工夫：仕様書4全体事業のスケジュール、5事業費、6ワークショップ・設計協議等
皆さんの意見をフレキシブルに活用して作り上げる

ワークショップについては、3回行う考えをしています。そこでは、川辺川地区に住まう方々へ上川上公民館で一回、相良村総合体育館で相良村全域の住民も含めたワークショップを2回行い、地域の方々と同じ目線で施設を作り上げます。また、地域の生活インフラで使用されるA-coopや未来を担う子どもたちの意見も募るため小学校などに、事前に検討案を送り、間接的意見を伺うことで、子供から大人まで全ての人の意見を受け取る体制を目指しています。状況に応じて設計変更を視野に入れつつ柔軟に設計していきたいと考えており、相良村のもつ微視的魅力を最大限に引き出し、本プロジェクトが目指す地域内外の人々をつなげる提案を深めていきます。日頃から防災意識の高い地域の皆さんだからこそ気づける問題点を活かした持続可能な拠点づくりを目指していきます。

作業工程表

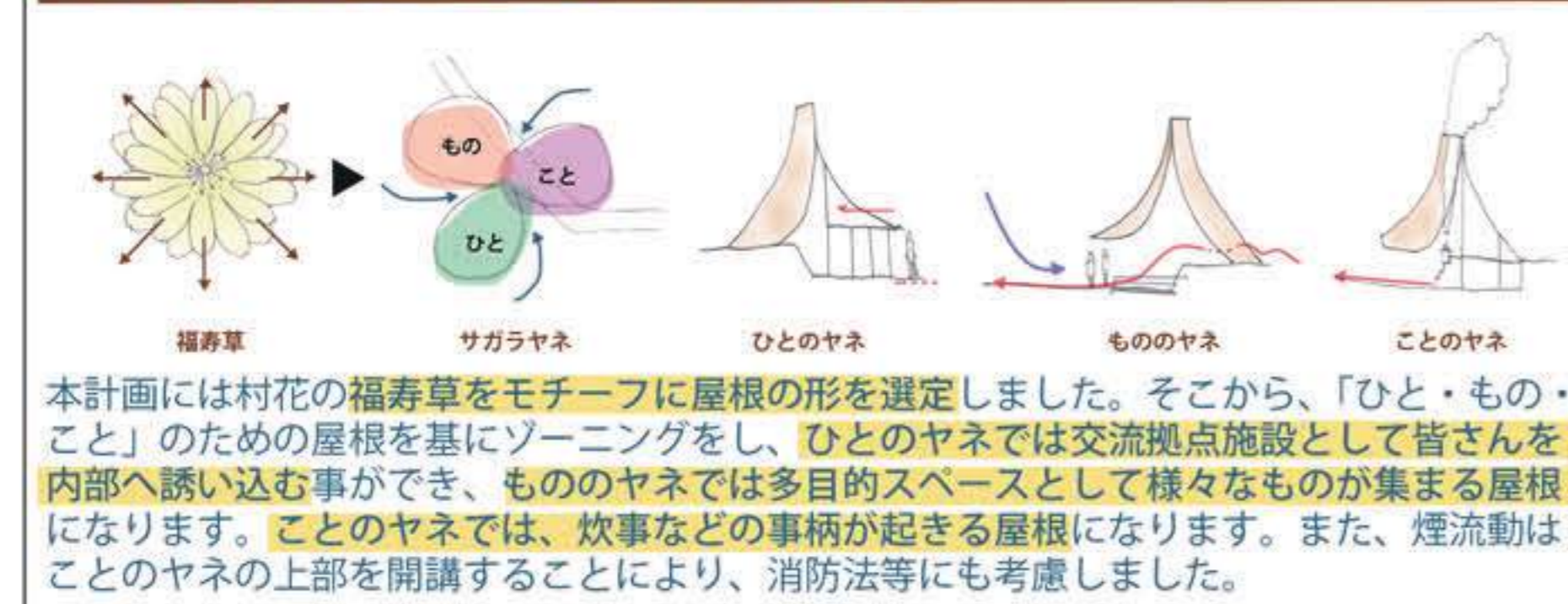
Table with 3 columns: Year (2024, 2025, 2026) and Month (1-12). It details project phases like 'Design/Construction Scheduling', 'Workshop', and 'Construction' with specific months and durations.

きめ細かなフェーズ設定によるコスト管理

・工事費の抑制のために、デザインの特徴となるポイントを絞り、空間そのものの質と構成によって豊かな建築を計画します。
・基本設計、実施設計の各々の期間内に二度のチェック期間を設け、段階的なコスト管理を行います。早期にコスト把握に着手することにより、基本設計、実施設計の各々の段階において手戻りなくスムーズな入札/着工へと繋がります。
・特に躯体工事費については、近年市場環境が流動的であるため、状況に応じて設計変更も視野に入れながら、柔軟に対応していきたいと考えています。

Summary table for construction costs: 躯体工事 54.7百万円, 仕上げ工事 43.3百万円, 設備工事 38.5百万円, 本提案に必要な外構工事 49.5百万円.

6 建築基準法、消防法等その他関係法令に適合した設計の工夫：仕様書3設計条件⑦
村の財産から本計画が決まる



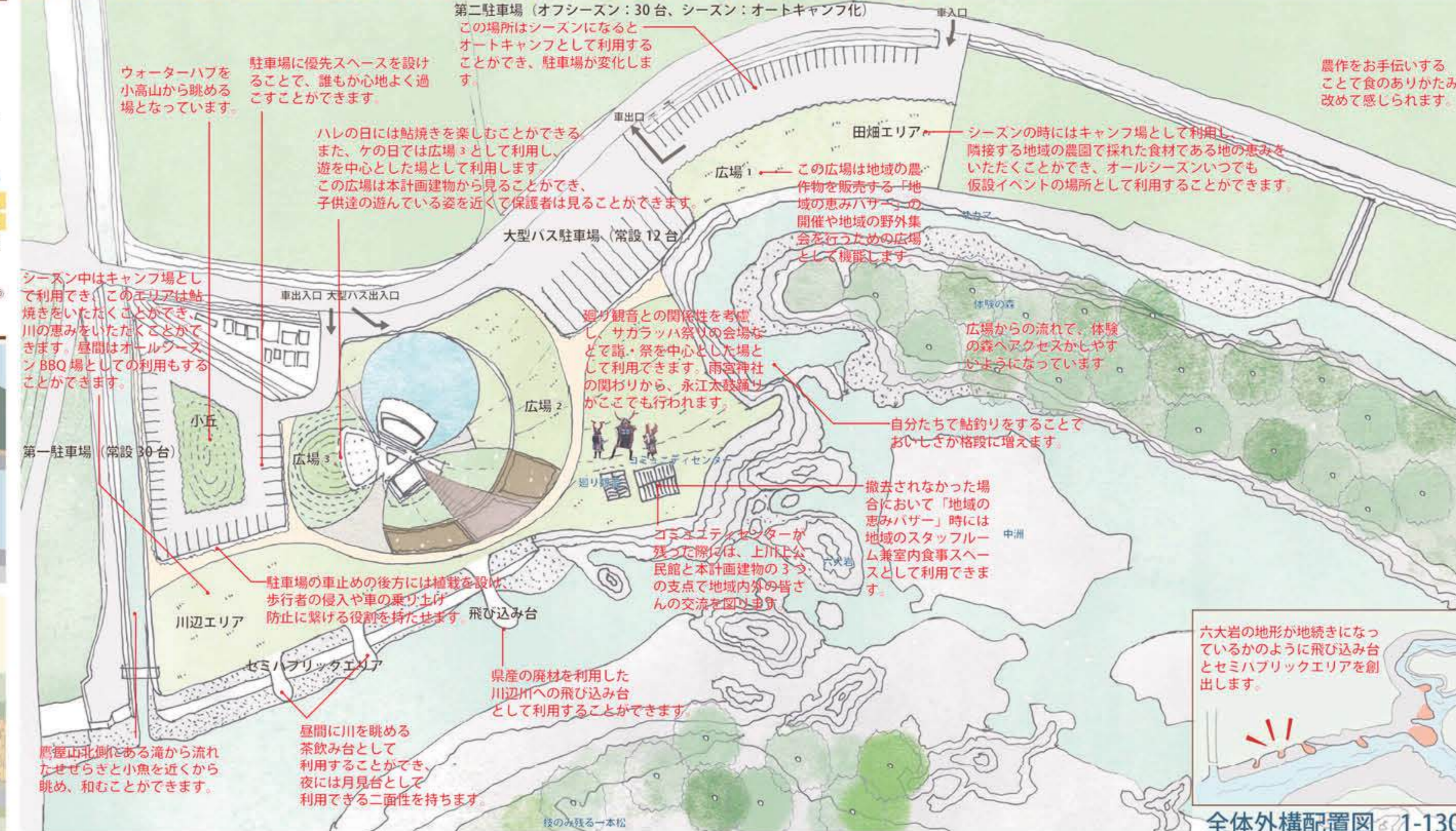
本計画には村花の福寿草をモチーフに屋根の形を選定しました。そこから、「ひと・もの・こと」のための屋根を基にゾーニングをし、ひとのヤネでは交流拠点施設として皆さんを内部へ誘い込む事ができ、ものヤネでは多目的スペースとして様々なものが集まる屋根になります。このヤネでは、炊事などの事故が起きる屋根になります。また、煙流動はこのヤネの上部を開講することにより、消防法等にも考慮しました。

7 地域への貢献を考慮した県産材の活用・景観に配慮した計画の工夫：仕様書3設計条件⑧、⑨
四季を生かし、ここに再び帰ってくる旅にする



春：桜が咲く対岸と川辺川で癒される
夏：川辺川の恒例遊びができる
秋：地域の方と触れ合う田畑エリア
冬：粘焼きエリアで粘を囲んで暖を取る

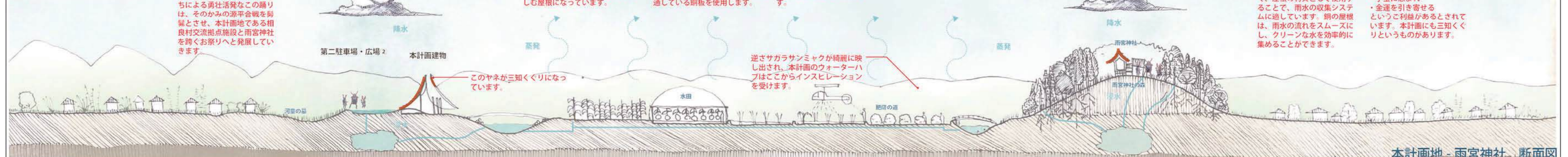
相良村の魅力を活かした地域活性化につながる外構配置計画・バリアフリー、ユニバーサルデザインを前提とした設計・メンテナンスのしやすさの工夫：プロポーザルの内容(2)⑥、仕様書3設計条件⑧
三知くぐりの先にある相良村の000を000できるランドスケープの提案



この場所はシーズンになるとオートキャンプとして利用することができ、駐車場が変化します。ハレの日には粘焼きを楽しむことができます。また、ケの日では広場として利用し、遊を中心とした場として見ることができ、この広場は本計画建物から見ることができ、子供達の遊んでいる姿を近くで保護者は見ることができ、自分たちで粘焼きをすることでおいしさが倍増します。

10 地域や民間等と連携し成長させていく施設とし、拡張性を持たせた計画・使用材料は一般で流通しているものを基本とする・メンテナンスのしやすさや耐久性、環境負荷低減(省エネ、省資源等)に配慮した計画の工夫：仕様書2計画条件③、仕様書3設計条件⑦⑧、プロポーザル内容(2)⑧
風景を肌で感じることのできる施設を目指して

雨を介し、本提案と雨宮神社が呼応します。



十二月第二週の日曜日には、「永江太鼓踊り」が奉納されています。十余名の踊り子たちによる勇壮活発なこの踊りは、そのかみの源平合戦を舞台とさせ、本計画地である相良村交流拠点施設と雨宮神社を強くお祭りへと発展していきます。

本計画地-雨宮神社-断面図

概算工事費： 188.3百万円

